IEHE TOHOKU Report 85
Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

第34回東北大学高等教育フォーラム
新時代の大学教育を考える［18］報告書

検証　コロナ禍の下での大学入試

令和３（2021）年９月
東北大学高度教養教育・学生支援機構
国立大学アドミッションセンター連絡会議

第 34 回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える［18］）

検証　コロナ禍の下での大学入試

◇ 日　時　：　令和 3 年 5 月 17 日（月）13:00～17:30
◇ 会　場　：　東北大学百周年記念会館　川内萩ホール（及びオンライン配信）
〒980-8576　宮城県仙台市青葉区川内 40
◇ 主　催　：　東北大学高度教養教育・学生支援機構
◇ 共　催　：　国立大学アドミッションセンター連絡会議

プログラム

司　　会　　富山大学特命教授　　船橋　伸一　　氏

開会の辞　　東北大学総長　　大野　英男

来賓挨拶　　文部科学省高等教育局大学振興課長　　西田　憲史　　氏

基調講演 1　コロナ禍における個別大学の入学者選抜
――令和 3 年度選抜を振り返って――

九州大学准教授　　立脇　洋介　　氏

基調講演 2　オンラインを活用した東北大学入試広報活動の新たな展開

東北大学高度教養教育・学生支援機構教授　　久保　沙織　　氏

（休憩）

現状報告 1　臨時休校・分散登校の下での「学習の遅れ」の回復

東京都立戸山高等学校主幹教諭　　近藤　明夫　　氏

現状報告 2　オンラインの現場から――Web 授業のメリット・デメリット――

須磨学園高等学校教諭　　多田　鉄人　　氏

現状報告 3　大学入試における教員としての資質・能力の評価

横浜国立大学准教授　　鈴木　雅之　　氏

（休憩）

討　　議
司　会　　東北大学高度教養教育・学生支援機構教授　　倉元　直樹
東北大学高度教養教育・学生支援機構特任教授　　末永　仁

閉会の辞　　東北大学理事・副学長　　滝澤　博胤

第 34 回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える［18］）

検証　コロナ禍の下での大学入試

目　　次

第 34 回東北大学高等教育フォーラム企画主旨　1
開会の辞　3
来賓挨拶　6

第Ⅰ部　基調講演

基調講演者紹介　9

基調講演１　：　コロナ禍における個別大学の入学者選抜
——令和３年度選抜を振り返って——
九州大学准教授
立脇　洋介　氏　11
資料　19

基調講演２　：　オンラインを活用した東北大学入試広報活動の新たな展開
東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授
久保　沙織　氏　22
資料　31

第Ⅱ部　現状報告

現状報告者紹介　41

現状報告１　：　臨時休校・分散登校の下での「学習の遅れ」の回復
東京都立戸山高等学校主幹教諭
近藤　明夫　氏　44
資料　49

現状報告２　：　オンラインの現場から
——Web 授業のメリット・デメリット——
須磨学園高等学校教諭
多田　鉄人　氏　52

資料 60
現状報告３　：　大学入試における教員としての資質・能力の評価
横浜国立大学准教授
鈴木　雅之　氏 65
資料 71

第Ⅲ部　　討　　議　――パネルディスカッション―― 75

閉会の辞 94

講　評

講評１：　第 34 回東北大学高等教育フォーラムに参加して
青森県立八戸北高等学校　山本　智也　教諭 97

講評２：　「変わるべきもの」と「変わるべきでないもの」
岩手県立黒沢尻北高等学校　小田島　淑人　指導教諭 100

講評３：　第 34 回東北大学高等教育フォーラムに参加して
宮城県宮城野高等学校　菊地　敏広　教諭 105

講評４：　第 34 回東北大学高等教育フォーラムに参加して
秋田県立秋田高等学校　澁谷　明人　教諭 109

講評５：　第 34 回東北大学高等教育フォーラムに参加して
山形県立東桜学館中学校・高等学校　高田　悠幾　教諭 112

講評６：　コロナ禍の入試から学ぶこと
福島県立原町高等学校　小針　伸吾　教諭 115

アンケート・参加者統計

アンケート集計結果 119
アンケート自由記述 120
参加者統計 136

第 34 回東北大学高等教育フォーラム企画主旨

令和 3 年度の大学入学者選抜は特別なものとして長く歴史に刻まれることだろう。

高大接続改革の初年度として，大学入試センター試験に代わって大学入学共通テストが初めて実施された。しかし，改革の目玉として予定され，準備が進められていた「英語民間試験」と「記述式問題」の大学入学共通テストへの導入は直前に撤回された。高大接続改革の方向性には不透明感が漂っている。

加えて，誰もが予想し得なかったのは新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の蔓延である。わが国では昨年 2 月頃から徐々に広がり始め，令和 2 年度入試では一部の大学が影響を受けた。最初の緊急事態宣言下では学校の機能が止まり，9 月入学への転換も議論された。ほとんどの大学で，にわかに全面的なオンライン授業が始まり，新入生はキャンパスライフを知らない大学生となった。高校の対応は地域や学校で大きく分かれた。大学入学共通テストには第 2 日程が設けられ，国立大学の個別試験にも追試験が設定された。一方，COVID-19 の感染機序が明らかになるにつれ，感染拡大の深刻さとは裏腹に人々の警戒感は薄れていった。その結果，令和 3 年度入試は感染症に対する厳戒態勢の下，COVID-19 第 3 波の只中で行われた。

高大接続改革とコロナ禍に翻弄された受験生はどう入試を迎えたのか。高校現場ではどのような見通しの下,何が行われていたのか。個別大学では何が議論され，どのように入試が準備されたのか。正解が見えない時代の教育と選抜の在り方が模索される中，真っ先に大学入学者選抜そのものが問われることとなった。その成果はどうだったのか，本フォーラムが予定される5月の時点では結果が見えているだろう。ウィズ・コロナ時代の大学入試を描くには時期尚早だが，記憶が新しいうちにこの特別な入試の経験を記録に残しておかなければならない。今回の東北大学高等教育フォーラムはそのような主旨の下，開催することとした。

基調講演には入試の実施と入試広報に関する講演を用意した。講師は九州大学准教授の立脇洋介氏と東北大学准教授の久保沙織氏である，いずれも若手として最前線で奔走した立場から，話題提供をお願いした。コロナ禍の下，オンラインを活用した高校としなかった高校，いち早くCOVID-19対応の独自路線を打ち出した大学からの話題提供を予定している。高等学校および大学の先生方，関係する方々の多くの参加と忌憚なき活発な議論を期待している。

なお，本企画は国立大学アドミッションセンター連絡会議との共催である。

本報告書は，フォーラムの録音記録に修正を加えた原稿,「招待参加者」としてフォーラムに参加し，フロアの立場からフォーラムに対してお寄せいただいた講評，および，アンケート・参加者統計から成る。招待参加者は，東北地方6県の高等学校進路指導研究会進学指導部会等を通じ，各県 1 名ずつ選ばれた方々である。本報告書は，録音テープから起こした原稿に対し，発言者が校正を加え，最終的に編集責任者が表現の修正を加えたものである。招待参加者の原稿については，体裁の統一に関わる部分を除いて，表現の修正は行っていない。

編集過程で生じた不具合に関しては，全て編集者の責任である。

（編集担当: 東北大学 高度教養教育・学生支援推進機構高等教育開発部門入試開発室
教授　倉元直樹）

開　会　の　辞

東北大学総長　　大野　英男

船橋伸一特命教授（司会）：

皆様，こんにちは。

本日はコロナ禍の大変な状況の中，ご来場，オンラインのそれぞれで，全国から 500 名以上という多数の皆様にご参加をいただき，誠にありがとうございます。ただ，本日は来場のコードの送受信にトラブルがあり，オンラインでの参加となった方々がおられます。大変失礼いたしました。

予定の時刻となりましたので，第 34 回東北大学高等教育フォーラム「検証　コロナ禍の下での大学入試」を始めさせていただきます。ご案内のとおり，本フォーラムは東北大学と国立大学アドミッションセンター連絡会議との共催になっております。こちらで幹事を務めております，私，富山県にあります富山大学の船橋伸一と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

開会に当たりまして，主催者を代表し，大野英男東北大学総長よりご挨拶を申し上げます。それでは，大野総長，どうぞよろしくお願いいたします。

大野英男総長：

船橋先生，どうもありがとうございます。

皆さん，こんにちは。東北大学総長の大野です。今回で 34 回目となります東北大学高等教育フォーラムの開会に当たり，一言ご挨拶を申し上げたいと思います。

先ほど船橋先生のほうからもご紹介がありましたとおり，国立大学アドミッションセンター連絡会議と東北大学が共催してございます。お力添えをいただきましたことに，深く御礼を申し上げます。また，来賓としてご挨拶をいただきます文部科学省高等教育局大学振興課，西田憲史様をはじめ，お忙しい中，基調講演，現状報告をお引き受けくださいました先生方に深く御礼を申し上げます。

このフォーラムは，2004 年から開催してございます。年 2 回，春と秋の開催で，春は特に高大接続，入試関連で開催してございます。昨年の 5 月の開催予定だったフォーラムは，新型コロナウイルス感染症の影響で 9 月に延期いたしました。その際，今回と同じように「来場参加」と「オンライン参加」というハイブリッドで開催し、その結果，非常に多数の皆様にご参加いただくことになりました。今回も同様の形で実施をしておりますが，昨年同様，活発な議論と意見交換をぜひよろしくお願いしたいと思います。

今回のテーマは，「検証　コロナ禍の下での大学入試」であります。

本年度の入学者選抜は，初めての大学入学共通テストに加えて，パンデミックでござい

ましたので，受験生諸君も，また高校の先生の皆さんも，そして私どもも，新たな時代に対応すべく様々な知恵を出し合い，随所で工夫をし，特に主催する側としては感染症対策をしつつ入学者選抜試験を進めるという前代未聞のオペレーションとなりました。

我が国におけるパンデミックの収束は，ワクチンの接種状況によります。7 月末には高齢者の接種が終わるという予定で進んでいます。本学も、ワクチンの接種に貢献するということで，これは水曜日に記者会見がありますが，県・市と協力した接種センターを開設することとしています。とはいえ，どれだけ早く収束するかは見通せませんので，この次の入学試験がどういう形になるのかも不透明です。加えて、パンデミックはこれが最後というわけでもありません。ここで，今回の経験を振り返って，そして互いの取組や知見を共有することで，今後のウィズコロナ，ポストコロナ，あるいは次に来るパンデミックに備えて，新しい入試の在り方を模索する指針を皆様と一緒に得られたらと思っております。

本日は基調講演者として，まずは九州大学から立脇洋介先生にお話をいただきます。入試が行われた当時，そして今も予断を許さない状況の福岡において，どのように入試を乗り切られたのか，貴重なお話をお伺いしたく思います。

続いて，本学からは久保沙織准教授が、主に入試広報活動に関する話題を提供させていただきます。本学の特徴であります対面型の入試広報活動がほぼ完全に封じられた中で，オンラインを中心とした新たな大学の情報提供活動を短期間に整備いたしました。さらに，コンテンツの多言語化によって，距離の制約を超えるオンラインならではの試みも始まったところであり，そのような取組をご紹介させていただきたいと思います。

2 つの基調講演の後，現状報告として，オンラインに頼らずに従来型の教育方法で昨年の最初の緊急事態宣言期間を乗り切った東京都立戸山高等学校の近藤明夫先生，逆にオンラインを駆使した教育を行っている学校として兵庫県の須磨学園高等学校から多田鉄人先生，そしていち早く独自のコロナ対策路線を打ち出した横浜国立大学から鈴木雅之先生にそれぞれご登壇をいただき，厳しい制約の中での大学入試の実施についてお話をお伺いする予定でございます。

立脇先生と多田先生はオンラインでのご講演ということで，まさしくそれ自体がウィズコロナ時代のシンポジウムの在り方を示すよい機会であると私は感じている次第でございます。

本学では，今年度 7 月にオープンキャンパスを企画しております。本学は，コロナになる前まで 7 万人に近い方々にオープンキャンパスに参加していただいてきたわけですけれども，昨年はオンラインに切り替えました。今年もオンラインを中心に，しかし万全な感染症対策を施すことが前提にした小規模の対面も取り入れて，来場された皆さんに東北大学のキャンパスに親しんでいただき，ウィズコロナ時代における高大連携活動の一つの取組を提示することができればと考えているところでございます。

新型コロナウイルス感染症のパンデミックによって，社会のあらゆる側面で大きな変革期が訪れています。本学での教育活動においても，対面とオンラインを効果的に組み合わせる試みが急速に進展し，ベストミックスデザインによる授業，あるいはラーニング・アナリティクスによって個別最適化された学習の可能性の追求，留学が制限されている中での海外の協力校の単位を取得できるオンライン授業，国際間教育の展開など，様々な場面で学生諸君が充実した大学生活を送るための取組が今始まっているところでございます。

大学入学者選抜も，大学教育の営みの一つと位置づけられますが，本フォーラムで展開

される議論が、今後起こり得る問題を予見し，何より受験生が安心して試験に臨める一助となることを願い，また大学教育全体の改善，発展につながっていくことを期待いたしまして，私からのご挨拶とさせていただきます。

本日はご参加いただき，誠にありがとうございます。

（拍手）

船橋伸一特命教授（司会）：

大野総長，ありがとうございました。水曜日の記者会見，ぜひ拝見したいと思います。

来　賓　挨　拶

文部科学省高等教育局大学振興課長*　西田　憲史　氏

船橋伸一特命教授（司会）：

続きまして，本日来賓としてご出席いただいております，文部科学省高等教育局大学振興課，西田憲史課長からご挨拶を頂戴いたします。本日，オンラインでの参加となっております。では，西田課長，よろしくお願いいたします。

西田憲史課長：

ただいまご紹介にあずかりました文部科学省高等教育局大学振興課長の西田と申します。よろしくお願いします。第34回東北大学高等教育フォーラム「検証　コロナ禍の下での大学入試」の開催に当たり，一言ご挨拶を申し上げます。

まず，本来であれば仙台に赴き，皆様に直接ご挨拶を申し上げるべきところ，現在都内では緊急事態宣言が発令をされておりますことから，オンラインでのご挨拶となりますことをまずご理解賜ればというふうに存じます。本日のフォーラムが，多数の方々のご参加を得て開催されることにつきまして，まずもって心よりお喜びを申し上げます。また，東北大学大野総長をはじめ，本フォーラムの開催にご尽力いただいた東北大学高度教養教育・学生支援機構や国立大学アドミッションセンター連絡会議の関係各位の皆様方に対しまして深く敬意を表するとともに，本日ご参加いただいている皆様におかれましては日頃より大学入試の円滑な実施及びその工夫，改善に多大なご尽力をいただき，この場をお借りして御礼を申し上げます。

昨年度実施をされた令和 3 年度大学入学者選抜につきましては，初めての大学入学共通テストに加えまして，新型コロナウイルス感染症の拡大というような事態に対して，例年とは異なる対応が求められまして，各大学において非常にご苦労が多かったものと存じます。また，2 月には東北地方で大きな地震も発生し，急遽その対応に当たっていただいた関係者の方々も多かったのではないかと推察をいたします。

このような困難な状況下であるにもかかわらず，関係者の皆様におかれましては受験生第一の立場に立って受験機会を確保いただくとともに，感染症対策を徹底し，万全の体制で受験生を迎えることが重要であるという考え方の下，一丸となって適切に対応していただいた結果，特段大きな混乱もなく，概ね無事に終了できたと承知をしております。しかしながら，全国的にいまだ感染の収束の見通しが立たない状況でありまして，大学入学者選抜においては感染症対策を含めて引き続き例年とは異なった対応をしていただく必要が出てくると考えております。特に昨年度，コロナ禍での入学者選抜を経験し，県境を超え

* 2021年5月現在

ない試験場で実施する大学入学共通テストの果たす重要性が改めて認識された一方で，面接試験におけるオンライン化など，新たな課題が見えてきたところでもあります。

そのような中，今回，東北大学が中心となり，コロナ禍での大学入試という形で本フォーラムを開催していただいたことは，非常にタイムリーで，大変意義深く，ふだん受験生に一番近い現場で入試関係業務に従事をされている高校，大学の関係者の皆様からお話をいただくことは貴重な機会であり，活発なご議論につなげていただくことを大いに期待をしております。なお，文部科学省といたしましても，現在，文部科学大臣の下に設置をされた「大学入試のあり方に関する検討会議」におきまして，ウィズコロナ・ポストコロナ時代の大学入試の在り方について検討いただいているところであります。この検討会議での結論も踏まえまして，国民の皆様が納得でき，受験生が安心して受験できるよりよい制度を構築できるように，尽力してまいりたいというふうに考えております。

最後に，本フォーラムを契機とし，コロナ禍における大学入試の在り方について高校・大学関係者間の共通理解を深め，各大学が実施する入試改革の一層の推進につなげていただくとともに，本日のフォーラムのご盛会及びご参加されている皆様方の今後のご発展を祈念いたしまして，私からのご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

（拍手）

船橋伸一特命教授（司会）：

ありがとうございました。ここでお知らせとお願いがございます。

まず，本日の進行についてのお知らせです。来場参加の皆様はお手元の封筒に，オンライン参加の皆様は事前にメールでご案内させていただきましたオンライン参加者用ページに配付資料がございます。配付資料のプログラムをご覧ください。また，会場のスクリーンに関してですが，Zoom を経由するため，多少のぼやけが生じております。この点をご了承いただければ幸いです。

本日は 3 部構成となっており，第 1 部の基調講演では九州大学の立脇先生，東北大学の久保先生からそれぞれ 40 分程度お話をいただきます。第 2 部は，現状報告として近藤先生，多田先生，鈴木先生よりそれぞれ 20 分程度お話をいただきます。その後，第 3 部では 5 人の先生方に再びご登壇いただき，基調講演，現状報告を踏まえての討議を行います。第 1 部終了後に 15 分程度，第 2 部終了後におよそ 20 分の休憩を挟み，本フォーラムの終了は 17 時 30 分頃を予定しております。なお，基調講演，現状報告でお話しいただきます先生方の詳しいプロフィールにつきましては，配付資料に含まれておりますので，ご覧いただければと思います。次に，皆様へのお願いです。このたびのフォーラムでは，討議のための質問票及び事後アンケートをウェブ上でご記入いただくようご用意いたしました。まず，討議のための質問票についてご説明させていただきます。来場参加の皆様は，第 34 回東北大学高等教育フォーラム　討議質問用と

いう配付資料に記載されている QR コードを読み取り，当該ウェブページにアクセスしてください。オンライン参加の皆様は，事前にご案内させていただいたオンライン参加者用ページより「討議質問票へ」，これを選択してください。現在投影されているスライドに表示されている QR コードからも質問票のウェブページへアクセスしていただくことができます。第 3 部の討議に反映させていただきますので，ご記入は第 2 部終了時の 16 時までに行っていただきますようお願いいたします。なお，基調講演，現状報告に対するご質問やご意見は，16 時までであればお一人につき何度でもご記入いただくことが可能です。二度目以降続けて入力する場合には，「別の回答を送信」と表示されることがありますが，そちらを選択していただいても構いません。また，大変恐れ入りますが，討議のためのご質問，ご意見の受付は，今回はウェブからのみとなりますので，ご理解のほどお願い申し上げます。

続いて，フォーラム終了後のアンケートへのご協力のお願いです。来場参加の皆様は，QR コードを読み取り，ウェブ上でご回答いただく方法と，用紙に直接ご記入いただく方法のいずれかをご選択いただけます。用紙にご記入いただいた場合には，受付に回収箱を設置しておりますので，お帰りの際に提出ください。オンライン参加の皆様は，事前にご案内させていただきましたオンライン参加者用ページより「アンケートへ」を選択してください。アンケートへのご回答は，フォーラム終了後にお願いいたします。

なお，今年も本フォーラムの内容等を記載した報告書を参加された皆様に後ほどお送りすることにしております。皆様のご協力をいただき，本日は有意義な会となりますよう努めさせていただきますので，どうぞよろしくお願いいたします。

第Ⅰ部　　基調講演

基調講演者紹介

基調講演者 1

立脇 洋介（たてわき ようすけ）氏

1978 年新潟県生まれ

〔教員歴〕
東京学芸大学教育学部特任講師（1 年間）
独立行政法人大学入試センター入学者選抜研究機構特任助教（3 年間）
独立行政法人大学入試センター研究開発部助教（4 年間）
九州大学基幹教育院准教授（1 年間）
九州大学アドミッションセンター准教授（3 年間）

〔主な研究歴〕
専門は教育心理学（発達障害、大学入試）

〔主な著書、研究業績〕
山村滋・濱中淳子・立脇洋介（2019）. 大学入試改革は高校生の学習行動を変えるか　ミネルヴァ書房.
立脇洋介・山村滋・濱中淳子・鈴木規夫（2016）. 高校生の進学準備行動と学内外の友人関係, 大学入試研究ジャーナル, 26, 97-102.
立脇洋介・山村滋・濱中淳子・鈴木規夫（2015）. アドミッション・ポリシーをめぐる学生と教員の意識, 大学入試研究ジャーナル, 25, 57-62.
立脇洋介（2016）. 共通一次及びセンター試験における障害者特別措置の変遷, 大学入試研究ジャーナル, 24, 243-249.
立脇洋介（2012）. 時間延長がテストの得点に及ぼす影響, 大学入試研究ジャーナル, 22, 193-198.

〔学会活動等〕
日本 LD 学会常任編集委員（7 年間）

基調講演者 2

久保　沙織（くぼ　さおり）氏

1984 年青森県生まれ

〔教員歴〕
早稲田大学教育・総合科学学術院助手（２年間）
早稲田大学グローバルエデュケーションセンター助教（３年５ヶ月間）
東京女子医科大学医学部助教（２年７ヶ月間）
東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授（２年目，現職）

〔主な研究歴〕
専門は心理統計学（測定の信頼性・妥当性，テスト理論，共分散構造分析）

〔主な著書、研究業績〕
宮本友弘・久保沙織（編）(2021). 大学入試を設計する　金子書房
久保沙織・南紅玉・樫田豪利・宮本友弘 (2021). オンラインによる入試広報の展開―「オンライン進学説明会・相談会」の実践を通して―　東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要, 7, 57-65.
久保沙織・南紅玉・樫田豪利・宮本友弘 (2021). オンラインによる高校教員向け入試説明会の実践と評価　大学入試研究ジャーナル, 31, 394-400.
倉元直樹・宮本友弘・久保沙織・南紅玉 (2020). 東北大学における入試広報活動の「これまで」と「これから」―頂点への軌跡からオンライン展開への挑戦へ―　教育情報学研究, 19, 55-69.
Onoshima, T., Shiina, K., Ueda, T., & Kubo, S. (2019). Decline of Pearson's r with categorization of variables: a large-scale simulation. *Behaviormetrika*, 46, 389-399.
久保沙織・豊田秀樹・福中公輔 (2014). 多面観察評価における信頼性係数と妥当性係数の導出―評定者の違いを考慮した項目数決定のために―　人材育成研究, 9 (1), 19-31.
久保沙織・豊田秀樹 (2013). 多特性多方法行列に対する確認的因子分析モデルにおいて信頼性および妥当性の解釈を一通りに定める方法―方法因子の因子得点の和が 0 になるという制約の下で―　パーソナリティ研究, 22 (2), 93-107.

〔学会活動等〕
日本テスト学会，日本心理学会，日本教育心理学会 他
日本教育心理学会「教育心理学研究」編集委員（１年目）
公益社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構試験信頼性向上検討委員会委員（２年目）

基調講演１：コロナ禍における個別大学の入学者選抜
――令和３年度選抜を振り返って――

九州大学アドミッションセンター
立脇　洋介　准教授

［講師紹介］

船橋伸一特命教授（司会）：

それでは，早速第１部の基調講演に移らせていただきます。基調講演 1，演題は「コロナ禍における個別大学の入学者選抜―令和 3 年度選抜を振り返って―」です。九州大学准教授，立脇洋介先生，よろしくお願いいたします。

（拍手）

立脇洋介准教授：

ただいまご紹介にあずかりました九州大学の立脇と申します。本日は貴重な機会をいただきまして，誠にありがとうございます。また，会場に来場できなくて申し訳ございません。

それでは，スライドのほうを画面に映させていただきます。

本日は，「コロナ禍における個別大学の入学者選抜―令和３年度選抜を振り返って―」ということで，昨年行いました入試に関して，どういう経緯で何を配慮しながら行っていったかということについてお話しさせていただきます。

今回お話しする内容は，国立大学の，アドミッションセンターの教員として，つまり大学全体の入試を考える立場から振り返っていくことになります。学部の先生，高校の先生，受験生など，それぞれの立場によって，コロナ禍での入試というのは当然違うと思います。大学全体の立場からは，どういうことをしていったかということについてお話しさせていただきます。

最初に，前提として，福岡県の感染状況についてお話しいたします。福岡県は，現在もそうですが，長い期間感染拡大地域となっており，全ての緊急事態宣言の対象となっています。このことが九州大学の入学者選抜を考えるときに非常に大きな影響を及ぼしております。

例えば 5 月 12 日時点での，福岡県と宮城県の感染者を見ますと，宮城県に比べておよそ 3 倍の人数となっております。

このことが具体的にどういうところで影響を及ぼしたかといいますと，九州大学は福岡県福岡市の受験生も多いですが，九州の各県からの受験生も非常に多くなっております。ところが，緊急事態宣言が九州の中で福岡県だけに出されている状況ですと，ほかの都道府県から福岡県に行くことを禁止される，福岡県に行かないようにというような事態が生

じてきます。このような事態が受験の時期に起こる可能性を想定しながら，検討を進めました。

当然各地域の感染状況によって，この前提の部分は違うと思います。福岡県の九州大学はこのような状況からスタートしているという前提を共有して，話を進めたいと思います。

続きまして，昨年１年間で大まかに検討した内容，検討した時期，さらに入学者選抜を行った時期等を時系列に沿って示したものがこちらになります。

九州大学では，第１回目の緊急事態宣言の解除等で，大学自体の活動が始まったのが 5 月からと，例年に比べて１か月遅れました。6 月に「コロナウイルス対応のための入試のあり方検討ワーキンググループ」を学内に設置し，検討を進め，答申を出しました。なぜ 6 月に行ったかといいますと，大学は 7 月にその年の入学者選抜の概要を公表する必要があります。7 月に公表するためには，6 月の段階でも遅いぐらいですが，大まかなものを決めなければいけないということで，ワーキンググループを立ち上げました。

8 月の夏休みの期間に，3 年時編入試験と，大学院入試が行われました。私たちの大学では，アドミッションセンターと入試課が主に関わるのは学部の入試で，大学院の入試等に関しては基本的に研究科単位で行っております。しかし，大学院入試での経験が学部入試にも大きな影響を及ぼしたということを後ほどお話しいたします。10 月に新たなワーキンググループを立ち上げ，オンライン面接実施のためのガイドラインを作成いたしました。これは 10 月以降に具体的な入試が始まる前に，大学としてオンライン面接に関する基準を共有しようということで，検討を行いました。1 月には大学入学共通テスト，さらには共通テストを利用した総合型選抜と学校推薦型選抜，2 月には一般選抜の前期，3 月には一般選抜の後期と，本年度に関しては追試験が行われております。

ここからは、時系列に沿ってそれぞれの時期にどういうことを行ったかを少し具体的にお話ししていきたいと思います。

まず，6 月に入試における方針の検討を行いました。この時点で，本学でどういうことを特に考慮しながら検討を行ったかということをここに挙げておりますが，一つは第１回緊急事態宣言時の状況です。これは感染状況であったりとか，あと禁止される内容，大学での活動であったりとか，いろんなことがどこまで制限されるのかということを，当然 6 月の時点では１回目の緊急事態宣言しか参考になるものがございませんので，それを手がかりに検討を行いました。

一番ひどい状況としては，大学が利用できない，大学に集まって入試ができないというだけではなくて，大学の事務活動もできませんので，最悪の状況ではオンライン入試すら困難であるということが想定されます。さらには，先ほども言いましたように都道府県を超えての移動の制限，福岡県への移動の禁止ということを想定しています。あと，高等学校の状況としては，1 か月間の休校によって，授業や部活動等へ影響がございますので，その点も考慮しなければいけません。

6 月の時点で，もし遠隔で入試を行うなら，オンライン入試しかないということは何となく大学の教員も想定はしておりましたが，より具体的に高校生がオンライン入試をできるネットワーク環境等を持っているかどうかという課題も当然考慮しました。

また，文部科学省が 6 月に出した，令和 3 年度の大学入学者選抜の実施要項も，当然参考にしました。その中で大学にとって特に影響が大きかったのは，一般選抜，前期・後期の追試験が盛り込まれていたことです。そのため，追試験を行うことを前提にして学内で検討する必要がありました。

さらに，大学全体の行動指針も参考にしま

した。こちらは九州大学の「新型コロナウイルス感染拡大防止のための行動指針」のうち，入試に最も関わりのある授業の行動指針です。実際には，授業だけではなくて，研究活動など，それぞれの活動に関して指針が出されておりますが，授業のものと，それに対応して入試で何ができるかということを図示したものを示しております。

大学としましては，段階として 0～5 まで設定しております。0 は通常の活動ができる状況，5 は原則停止ということで，これは遠隔・対面問わず原則として全ての授業の開講を中止するという状態です。原則授業が中止されている状態では，入試を行うということは不可能ですので，この状況になったら延期・中止になります。段階の 1～4 は，それぞれ制限がある中で授業を行います。具体的には，対面と遠隔を併用して授業を行うという段階です。対面と遠隔を併用するといっても，程度があります。対面中心で，遠隔も少し行っているぐらいでしたら，対面での入試ということも可能だとは思いますけれど，ほとんどの授業が遠隔で行われているという状況で入試のみを対面で，集合型で行うということは，問題も起きてきます。この 1～4 段階，何らかの形で授業の制限が行われている状況では，入試に関しても対策や代替手段が必要となります。何も制限がない状況と，非常に制限が厳しい状況は除外して，やり方によっては入試ができる，授業ができるという状況を想定して，検討を進めていくことにしました。

もう一つ前提となる事項がございます。それは何かといいますと，九州大学の入学者選抜の特徴です。九州大学は，一般だけでなく総合型選抜，学校推薦型選抜も，ほとんどが共通テストを利用しております。共通テストを全く利用しないのは全学部で三つの入試区分のみで，定員でいいますと 2,544 人のうちの 35 人だけです。ですので，九州大学にとっては共通テストが中止になったり延期になったりした場合というのは影響が非常に大きいです。特に中止になった際には，選抜自体が非常に困難になります。

ところが，共通テストが中止とか延期になった状況を想定して，6 月の時点から方針を決めていくということも最初は考えようとしました。しかし，国立大学で共通テストが中止になった場合，志望校をどうするかというところであったりとか，様々な形で一大学での判断を超えているということで，共通テストが中止になったり延期になる事態に関しては，6 月の時点では検討しないことに決めました。ですので，共通テスト以外の部分で選抜の変更等が必要なら，そこを検討しようということで進めております。検討した結果，どういうことが明らかになっていったかといいますと，まず 1 点目ですけれど，「厳格さ・公正性」「安全性」「受験生（大学）の負担」のバランスが非常に重要ということです。理屈的にはオンライン入試で筆記試験に近い形のものを実施することは可能かもしれませんが，それはバランスが悪いということを最初に議論しました。例えば，受験生 1 名に対してカメラ 5 台用意してもらって，その 5 台のカメラで受験生の動きを，例えば右手，左手，顔，全身など，カメラ 5 台で録画するということを行えば，オンラインの筆記試験で公正性を担保しながら実施することは可能かもしれません。安全面に関しても，集合して対面式で行うわけではありませんので，感染症に関しては安全性が担保されます。なおかつ厳格に実施することができるかもしれませんが，高校生，さらに大学にとっても非常に負担の大きい方法です。特に大学側というのは厳格さとか公正性というのを，入試なので非常に重視したくなりますが，ただそれによってそのほかの要素のバランスを著しく欠いてしまう状況では好ましくありません。この三つの観点のバランスが重要だということを

最初に検討しております。

それを受け，入試レベルの筆記試験を遠隔で実施するのはかなり困難であるということを6月の時点で共有しております。具体的にどこの部分で難しさがあるかといいますと，少人数で実施する試験や出題内容を工夫できる試験の場合，筆記試験を行うこともできなくはないだろうということはワーキンググループの中でも共有しました。しかし，大人数で，出題内容に関しても制約が多く，工夫がしづらい一般入試において，筆記試験を遠隔で行うとなると，何らかのリスクが発生する可能性が非常に高いです。全面的に導入することは難しいということを話しております。そのため，一般選抜を遠隔で実施することについての検討は，6 月の時点で捨てております。

その一方で，面接をオンラインで実施することに関しては，高校生のネットワーク環境等に配慮し，そのほかいくつか細かい手続き等をしっかりすれば，可能ではないかということを方針として出しております。

先ほどは方針を受けて，具体的に決めた内容として 5 点ほど出しております。1 点目は一般（前期・後期）で追試験を実施することです。本学では，一般の前期と後期両方で追試験を行う必要があり，日程的に両方の追試験を1日でしか行えない，かなりタイトな日程でした。そのため，教科テストの科目に関しては，数学と英語を合わせた総合問題を作成し，あとは小論文や面接から学部が選択をするという方法を取りました。理科や社会に関しては，教科に対して科目数が多いということ，さらにはそれらの科目を1日で実施するということが非常に困難であったために，それらの内容に関しては小論文等で学部が対応するということで，決定をしております。

2 点目の大学共通テストや一般の個別学力検査が実施できない場合は別途検討というのは，先ほどお話ししたとおりです。

3 点目，総合型・学校推薦型選抜に関しては，感染拡大状況において試験をオンラインなどに変更します。ただ，オンラインに変更するときに，一つだけ基準というか，留意する点として，「書類審査」「大学入学共通テスト」「学力検査・小論文」「面接」等から必ず二つ以上の試験を組み合わせて実施することを最低ラインとしております。これはどれか一つの試験のみですと，多面的に評価をするという総合型や学校推薦型の強みがなくなってしまいますので，必ず二つ以上を選択して実施するということにしております。

4 点目，コロナに罹患した等で受験できない人へは，追試験または受験料の返金を行います。一般試験に関しては追試験で対応し，学校推薦型と総合型に関しましては追試験を行うことが多くの学で困難であるということから，返金での対応ということを確認しております。

5 点目，実施にあたって感染症対策等を最大限に行うということも決めております。

それを受けまして，7 月に入学者選抜の概要を公表しました。ただ，実はこの時点ではコロナに対応したところをほとんど公表しておりません。なぜかといいますと，コロナによる変更というのは感染拡大時のバックアップという位置づけで，もともとその方法に変えていくということを想定しておりませんでした。拡大しなければ通常どおりの方法で実施の予定でした。ですので，混乱を避けるために，一般試験の追試験のみ記載しましたが，そのほかの入学者選抜に関しては「注」でコロナの感染拡大によって変更する可能性があるということを示唆するにとどめております。この点，高校生，受験生にとってはしっかりと早めに書いてくれたほうが嬉しいというのはわかるんですけれど，やはり大学としましてはできるんだったら通常どおりの方法でやりたいということで，このような形の対応になっております。

続いて8月には，大学院等の入試がありました。我々は直接関与していなかったんですが，意外な影響がありました。8 月は，第 2 波の最中でした。そのため，大学院の入試で，多くの研究科がオンラインでペーパー試験に近いようなものも実施しておりました。これはアドミッションセンターや入試課が関与しない状況で，それぞれの研究科が判断して行いました。なぜオンラインの筆記試験に至ったのかを考えますと，学部入試と違って共通テストがないため，学力テストが必要となります。あと，学部の入試に比べますと大学院の入試は，志願者等の規模が小さいです。さらに，大学院は大学の学部生が入試を受けるため，パソコンなどのオンライン入試の環境を既に持っているため，比較的導入しやすかったことです。このように，8 月の大学院入試等で各学部がそれぞれにオンライン入試のやり方のノウハウを蓄積していったということがわかっております。

大学全体としまして，学部入試に関して 10 月にオンライン面接の実施のためのガイドラインというものを作成いたしました。こちらは，受験時のトラブル防止や，不正対策のための検討を行っておりますが，学内の情報部門，ネットワーク環境等の情報部門とも連携をしながら，検討を行いました。オンライン面接のためのガイドラインということで，例えば入試の前日までに必ず事前接続テストを行うこと，トラブルが起きたときに備えて携帯電話などパソコン以外の非常用の連絡手段を確保すること，意図しない接続トラブル等で失格としないこと等をガイドラインとして設定しました。

実はこの検討を行う直前，10 月に全国の高等学校校長協会が文部科学省にオンライン入試に関する要望を出しております。大学側は厳密に試験をしたいということで，かなり高校生にとって負荷の高い方法で実施していたようで，高校から非常に厳しい意見が出ておりました。高校生が対応できるやり方，さらには複雑過ぎない方法で実施するということが必要だと判断しました。そこで，例えば事前接続テストを行うのは高校が終わる 4 時以降に行うことなど，高校側に配慮した内容もガイドラインの中に盛り込んでいきました。

続いて，実際の入試に関してです。1 月の緊急事態宣言時に多くの学部が総合型・学校推薦型選抜を実施しました。そのために，全部で 36 の入学者選抜がこの時期に行われたんですけれど，そのうち 19 の選抜で何らかの変更を行いました。その変更のうちの大半は，面接や口頭試問を対面からオンラインに変更するというものでした。

面接以外ではどのような対応をしたかといいますと，それぞれ少数の学部ですけれど，例えば，通常対面で集合して小論文を行うというやり方を本年度に関してはオンラインでの口頭試問や面接に変更したという学部もあります。

あとは，オンラインではなくて，課題図書を用いた郵送方式，これは事前に課題図書を受験生に送り，受験生はそれを読んで小論文を書いて郵送する方法にした学部もあります。その上で，郵送された小論文だけでは不十分だと思うところを口頭試問で追加的に質問を行うという方法を組み合わせています。

あとは，筆記の課題探究試験をオンラインで実施したという学部もございます。さらには，物を作成する課題をオンラインで実施したという学部もあります。

このように，大半は面接や口頭試問をオンラインで実施したということですが，かなり多様な方法を実施した学部もございます。

ただ，年末年始の感染拡大を受けて実施方法を最終的に決定した学部が多かったために，変更の最終的な発表は 1 月に入ってからとなっています。そのため，非常に大きく変更するということはないように，あくまで一部の変更や，似たような形で変更を行うというよ

うなことを各学部心がけております。

一般選抜に関してですけれど，まず感染症対策に関しては学内の専門家，さらには大学共通テストの要領等を踏まえまて，実施しました。医務室に関しては，例年以上の体制を設置しました。机を消毒したりということも実施しました。ただ，試験内容に関して，変更はございませんでした。あと，追試験に関してですけれど，受験者は全部で 7 名で，トラブルなく終了しております。

ここからは，3 枚ほど追加のスライドになっておりますので，画面のほうを見ながら話をお聞きください。実は先週から学内の各学部に対して，ヒアリング調査を行っております。昨年コロナ対応をした各学部に対して，実際にどうだったかというようなことをヒアリングを行いました。まだ中間的な位置づけですけど，その中でわかったことをスライド 3 枚ほどにまとめておりますので，そのことについてお話しいたします。

まず接続トラブルに関してですけれど，ほとんどの学部で接続トラブル等は生じておりませんでした。受験生向けの対策としまして，本学で設定したガイドラインに基づいて実施されておりました。特にその中で有効だったものは，受験生用の事前接続テストです。こちらに関しては，操作方法を確認するということもそうなんですけれど，もう一つ，特にご家庭で受ける受験生に関しては，例えばリビングではネットワークの接続状況がよくなかったけれど，寝室だったら接続状況がよかったというように，当日に受験する環境を確認することができて，受験生自身がどこの部屋だったら受けられるということを事前に確認することができました。ただ，授業時間の後にこの接続テスト，受験生一人一人個別に実施する必要があります。大規模な学部では非常に負担が大きかったということがわかっていますが，この接続テストを行うことで受験生のトラブルというのはかなり減らすことができま。そのほかにはインターネット以外の通信手段，あとは第三者が侵入しないようなパスワードの設定等を行っておりました。

このように，受験生向けの対策は概ね機能しているんですけれど，問題はそのほかの対策で，こちら「今後の課題」と書いてあります。これもトラブルは起きなかったんですけれど，例えば大学のネットワークがダウンした際にどう対応するかということです。教員個人の Wi-Fi を用意していた学部もありますけれど，ここが十分でなかった学部もございます。さらには，通信ソフトの大規模障害の可能性です。これは実際に試験の時期に，別な日ですけれどあるソフトが全面的にダウンをしてしまったということが発生しています。発生頻度というのは少ないですけれど，こちらのトラブルが発生してしまいますと，その日は試験ができないというようなことも起こり得ます。ここの部分は大きな課題として残っております。

不正対策に関して，こちらも大学のガイドラインに基づいて実施をされておりました。本人確認とか，あと試験時間は常にカメラの前にいること，さらには試験中の様子を録画するというようなことを行っておりました。試験の種類にもよりますけれど，知識問題をオンラインで出題する場合は，それぞれ何らかの形で追加の対策を行っておりました。例えばカメラ 1 台ではなくて，2 台のカメラで様子を見るというような工夫をしたところもありますし，あと時間の設定とか出題方法を工夫するというようなやり方もございました。ただ，こちらもトラブル等にはなっておりませんが，本人確認や悪意のある第三者の妨害など，入試の前提のところで不安が残るというような意見がありました。具体的にこれはどういうことかといいますと，何か不正をしたときに，通信ログであったりとか，カメラで映像を録画してるんだけど，それがどれぐらい証拠能力になるのか，それを理由に失格

等にできるのかということ，さらには本人の不正と第三者の妨害の違い等をどこまで言えるのかというようなところ，これはもう一大学とか一学部の話ではなくて，オンライン試験全体でこの辺はしっかりとした基準がいるのではないかというような意見もございました。

そのほかの声，こちらのほうはもともと想定していなかったことで，非常に生々しい声でしたけれど，初年度だったために担当した教員は精神的・肉体的に疲弊したことです。今回オンラインということで，比較的パソコン等に詳しい方が中心で行っているところが多かったために失敗が起きなかったんですけれど，その担当していた方は例年の2倍ほどの作業量があったりとか，あとテスト前後 1か月は血圧が非常に上昇していたというような声もありました。ここはもちろん大学だけではなくて受験生も負担が多かったと思いますけど，担当した，全体を統括した先生方は非常に負担が大きかったようです。

あと，技術的に可能であっても，トラブル回避のためにシンプルな方法で実施したほうがいいという声がありました。これはどういうことかといいますと，例えば，あるソフトのある機能を使おうと思っていたが，ソフトの仕様変更によって，試験直前にその機能がなくなっていたということがございました。ですので，あまりにもあるソフト特有の機能を前提にして試験を行おうとすると，このようなトラブルが起こり得るという話です。

さらには，受験生同士のディスカッションを設定している学部が，技術的にはそれは可能なんだけれど，ディスカッションを行う場合，1 名の受験者でも何らかのトラブルがあった場合，全員がやり直しになるということを考慮し，やり方を大きく変更していました。

あと，ここは少し意外だったんですけど，デバイスに関して，PC とスマートフォンを比較しますと，PC のほうがトラブルが起こり得るという話をいただきました。スマートフォンは，どのスマートフォンでもある程度似たような性能なのに対し，PC は性能にかなり幅があるため，通信でのトラブル等は PC のほうが意外と起こりやすかったという話もいただきました。

さらに，今回こういう形でそれぞれの学部等で担当して統括をしている方というのが，それぞれにノウハウを持っているんですけれど，それを大学全体で共有したいというような話がありました。ですので，今回私が行っているヒアリングというのを最終的には九州大学では各学部にフィードバックをしていく予定です。

こちらからはまたスライド，お手元にあるものです。

最後に，令和3年度選抜を振り返った感想ということで，書いております。受験生，高校生，大学，それぞれが例年以上の負担をしながら，何とか終えたというのが率直な感想です。本年度も感染状況がどうなるかわかりませんが，昨年の実績であったり，課題を踏まえて実施する必要があります。オンライン面接というのは，大規模なトラブルが起きなければ実施しやすいですし，遠方の受験生に対して積極的に利用するということも可能です。遠方の方にわざわざ来てもらわなくてもできるというメリットもございます。小論文を口頭試問とかオンラインに切り替えるということは，完全に代替できるのか，十分見ることができない能力等がないかというようなこととかを検討しながら決めていく必要があるかと思います。

このように，オンラインでの入学者選抜は，リスクを減らした実施方法はあるんですけれど，先ほどからお話ししていますように大規模なトラブルが起きたときにどうするかというものは全大学での共通した課題だと思います。

あと，「厳格さ・公正性」「安全性」「受験

生（大学）の負担」のバランスが重要だということを途中でもお話ししましたけれど，昨年の入試に関しては，非常事態だったために見逃されておりますけれど，本年度以降継続的に行う場合にはこの「負担」というのが非常に大きな観点になるかと思います。これは受験生の負担だけではなくて，大学，教員にとっての負担です。継続して実施していくためには，その負担も適切なものにしなければいけないですし，ここに図として書いておりますけれど，例えば対面の筆記試験は，この三つの要素でいいますと安全性だけがこの中では若干足りないです。それに対して，例えばオンライン筆記試験というのは，オンラインですので安全性は担保できますけれど，厳格さや公正性に関してはかなり対面の筆記試験に比べて劣ります。あとオンラインの面接ですと安全性と負担の少なさはそれなりに担保できますけれど，厳格さというのはやっぱりちょっと劣ります。このように，この三つの次元で評価をしていきますと，適切な選抜ができているかどうかというようなことが評価しやすいかなと思います。

最後，感想の三つ目ですけれど，これは完全に個人的な感想ですけれど，追試験の在り方に関しては再検討が必要だと思っております。なぜかといいますと，実は昨年，コロナで追試というのが行われましたけれど，これまでは新型インフルエンザの流行の年でさえ，個別選抜の追試験というのは実施されておりませんでした。今回は歴史的に見てもかなり，特別な対応と言えます。受験生にとっては必要なものですが，大学にとってはかなり問題も大きいです。例えば，今回の日程ですと，既に他大学の後期日程で合格していた人が前期日程の追試験で合格した場合，後期日程の合格を辞退するということが起こります。ここの部分は一大学ではなく国立大学全体で考えて，やり方をもう少し考える必要があるかなと思います。

また，選抜自体を見ましても，先ほど九州大学全体で追試験 7 名と言いましたけれど，受験者が非常に少ないために，合格判定等のやり方に非常に苦労しております。これは恐らく各大学ともそうだと思います。日本の大学入試は，いくつかの英語の民間試験等と違いまして，予備調査等を事前に行うということができませんので，いろいろと技術的な制約があります。その中で追試験を行ってやり方が昨年の方法でいいのかということは課題として挙げられます。さらに，問題作成の負担が非常に大きいです。それに，大学はこれまで総合型・学校推薦型を導入し，定員を増やしてきた理由の一つは，受験生に受験機会を複数回確保することも目的の一つです。ですので，総合型や学校推薦型も含めて既に何回か受験機会を確保しているということで，一般選抜だけ追試験を実施する必要があるかどうかということは再検討が要るかと思います。これに関しては，大学全体で議論していく必要があるかと思います。

ということで，私のほうからの発表は以上になります。ご清聴ありがとうございました。

（拍手）

船橋伸一特命教授（司会）：

立脇先生，ありがとうございました。
一部音声が途切れまして，お聞き苦しい点があったことをお詫びしたいと思います。また，オンライン入試におきまして，そのデバイスでパソコンよりもスマートフォンのほうがトラブルが少ないというのは新たな発見ではなかったかというふうに思います。

さて，冒頭で申し上げましたとおり，ご質問等につきましては，来場参加の皆様はお手元の QR コードから，オンライン参加の皆様はオンライン参加者用ページよりウェブ上での入力をお願いいたします。

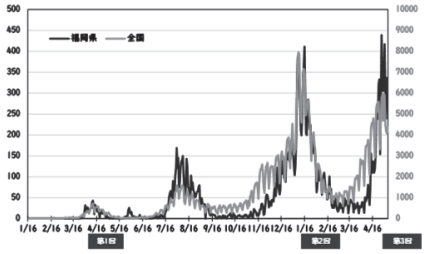
基調講演　立脇洋介（九州大学）

第34回東北大学高等教育フォーラム
「検証 コロナ禍の下での大学入試」

基調講演Ⅰ
コロナ禍における個別大学の入学者選抜
―令和３年度選抜を振り返って―

立脇洋介
（九州大学　アドミッションセンター）

福岡県の感染状況



・**全ての緊急事態宣言の対象**となっている。
⇒入学者選抜での対応に大きく影響

5/12時点感染者
福岡県　28243人
宮城県　8439人

九州大学での検討の経緯

６月　コロナウイルス対応のための入試のあり方検討WG⇒答申
７月　入学者選抜概要の公表
８月　（３年時編入試験、大学院入試）
10月　オンライン面接実施のガイドラインを作成
　　総合型選抜①
１月　大学入学共通テスト
　　総合型選抜②　学校推薦型選抜
２月　一般選抜（前期）　留学生入試
３月　一般選抜（後期）　追試験（一般選抜前期・後期）

入試における方針の検討（６月）

◆検討時に考慮した内容
第１回緊急事態宣言時の状況、高等学校の状況、令和３年度大学入学者選抜実施要項（文科省）、大学全体の行動指針等を踏まえて検討

緊急事態宣言　…**大学が利用できない**。
　　都道府県を超えての移動の制限。**福岡県への移動禁止**。
高等学校の状況…休校による**授業・部活動**などへの影響。
　　オンライン入試の環境。
大学入学者選抜実施要項（文科省）…**一般選抜の追試験**。

<新型コロナウイルス感染拡大防止のための九州大学の行動指針（授業のみ）>

段階	区分	授業
0	通常	
1	一部制限	感染拡大防止に十分な配慮をした上で、対面と遠隔を併用して、授業を行います。
1.5	一部制限	感染拡大防止に最大限の配慮をした上で、対面と遠隔を併用して、授業を行います。
2	制限（小）	感染拡大防止に最大限の配慮をした上で、対面と遠隔を併用して、授業を行います。
3	制限（中）	原則として、遠隔授業による科目の開講とします。ただし、部局長等の判断により一部の対面授業を可とします。
4	制限（大）	遠隔授業による科目のみの開講とし、対面授業によるものは開講しません。
5	原則停止	遠隔・対面を問わず、原則として全ての授業科目の開講を中止します。

入試
通常
対策や代替手段が必要
中止・延期

入試における方針の検討（６月）

◆九州大大学の入学者選抜
・一般だけでなく、総合、学校推薦もほとんどが共通テストを利用。
・**共通テストを利用しないのは3つの入試区分のみ（35/2544名）。**
⇒共通テストが中止になれば、選抜は非常に困難。
　ただし、**共通テストが中止の場合は、一大学の判断を超えているため、６月の時点では検討しない。**

基調講演　立脇洋介（九州大学）

入試における方針の検討（６月）

◆検討結果

・**「厳格さ・公正性」「安全性」「受験生（大学）の負担」のバランスが重要**。

例）カメラ5台で録画しながらオンライン筆記試験を実施

⇒厳格で安全かもしれないが、高校生の負担が非常に大きい

・入試レベルの筆記試験を遠隔で実施するのは困難。

（少人数、出題内容の工夫等でできなくはないがリスクが大きい）

⇒**一般選抜を遠隔で実施するのはほぼ不可能**

・オンライン面接は高校生のネットワーク環境に配慮すれば可能。

入試における方針の検討（６月）

◆検討結果

①**コロナに罹患した等の人**を対象に**一般（前期・後期）の追試験**を実施。

科目は「数学・英語の総合問題」「小論文」「面接」から学部が選択。

②大学入学共通テストや一般の個別学力検査が実施できない場合は別途検討。

③**総合・学校推薦**は、感染拡大状況に応じて**試験をオンラインなどに変更**。

※「書類審査」「大学入学共通テスト」「学力検査・小論文」「面接」等から2つ以上実施。

④コロナに罹患した等で受験できない人へは**追試験または受験料の返金**を行う。

⑤試験実施にあたり、感染症対策を最大限行う。例）試験室の人数など

⇒上記の方針にもとづき学部ごとに検討し、決定

入学者選抜概要の公表（７月）

・入試改革初年度で新しく総合・学校推薦を導入した学部は変更内容を記載。

・コロナによる変更は、**感染拡大時のバックアップ**という位置づけだった。

拡大しなければ通常通り実施予定

・混乱を避けるために、一般（前期・後期）の追試験のみ記載し、「注」でコロナの感染拡大による変更の可能性を示唆。

大学院等の入試（８月）

・8月の第2派の際に大学院等の入試

・学部と異なり大学院の入試は、

①アドミッションセンターや入試課が関与せず、大学院が判断

②共通テストがない（学力テストが必要）

③学部の入試より規模が小さい

④受験生がパソコンなどオンライン入試の環境を持っている

・**複数の大学院がオンライン入試を実施⇒ノウハウを蓄積**

オンライン面接実施のガイドライン（10月）

・受験時のトラブル防止、不正対策のために、学内の情報部門とともに**オンライン面接のガイドライン**を作成。

例）事前接続テストの実施

パソコン以外の非常用連絡手段の確保

意図しない接続トラブルで失格としない

・10月に全国高等学校長協会からオンライン入試に対する厳しい要望が出ており、**高校生が対応できる、複雑すぎない方法で実施することを求めた**。

実際の入試①　総合型・学校推薦型選抜

・1月の第2回緊急事態宣言時に多くの学部が総合型・学校推薦型を実施。

・**19/36の選抜で何らかの変更**を実施。

・**大半は面接・口頭試問等を対面からオンライン**に変更。

・面接以外では以下の様な対応をした選抜があった。

・小論文⇒オンライン口頭試問・面接

課題図書を用いた郵送方式にし、口頭試問を追加。

・筆記の課題探究試験⇒オンラインで実施

・作成課題⇒オンラインで実施

・年末年始の感染拡大により、**変更の発表は1月に入ってから**。

基調講演　立脇洋介（九州大学）

実際の入試②　一般選抜（前期・後期）

・感染症対策：学内の専門家や大学共通テストの要領等をもとに実施。

・医務室は例年以上の体制で設置。

・試験前に机の消毒を実施。

・試験内容の変更はなかった。

・追試験：**受験者7名**。トラブルなく終了。

令和３年度選抜を振り返った感想①

・**受験生、高校、大学、それぞれが例年以上の負担をしながら何とか終えた**。

・本年度も感染状況がどうなるか分からないが、**昨年の実績や課題を踏まえて実施する必要がある**。

例）オンライン面接…大規模なトラブルが起きなければ実施しやすい。

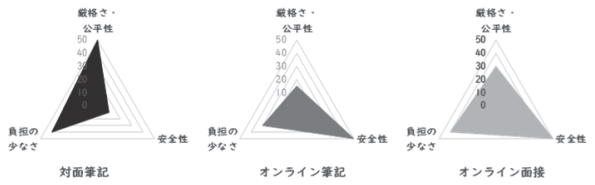
遠方の受験生への積極的利用も可能。

小論文から口頭試問…代替できるか？十分見ることができない能力は？

令和３年度選抜を振り返った感想②

・**「厳格さ・公正性」「安全性」「受験生（大学）の負担」のバランスが重要**。

⇒非常事態時には見逃されたが、**負担が大きすぎる方法では継続実施が困難**。



コロナ禍における選抜方法の評価例

令和３年度選抜を振り返った感想③

・追試験のあり方については再検討が必要。

・これまでは新型インフルエンザ流行時も含めて追試験はなし。

・**前期の追試験で合格した人は、他の国立大学の後期合格を辞退する可能性**。

・受験者が非常に少ないため、**合否判定でも例外的な扱い**。　入試では予備調査が不可能

・問題作成の負担が非常に大きい。

・大学が総合型、学校推薦型を導入してきた理由の一つは受験機会の複数化。

⇒**実施の有無、実施方法（共通テスト中心にするなど）など、大学全体で検討する必要がある。**

基調講演２：オンラインを活用した東北大学入試広報活動の新たな展開

東北大学高度教養養育・学生支援機構
久保　沙織　准教授

［講師紹介］

船橋伸一特命教授（司会）：

続いて，基調講演 2 に移らせていただきます。「オンラインを活用した東北大学入試広報活動の新たな展開」と題して，東北大学准教授，久保沙織先生，よろしくお願いいたします。

（拍手）

久保沙織准教授：

皆様，こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました東北大学高度教養教育・学生支援機構の久保と申します。

私のほうからは，「オンラインを活用した東北大学入試広報活動の新たな展開」と題しまして，昨年度，私たちが取組んでまいりましたオンラインによる入試広報活動の事例についてご紹介させていただきます。

本日の内容ですが，まず，入試広報活動とは，というお話をさせていただいた後，東北大学の入試広報活動について，その後，オンラインを活用した東北大学入試広報活動ということで三つ，オンライン入試説明会，オンライン進学説明会・相談会，そしてオンラインオープンキャンパス，このそれぞれについてどのような内容だったのか，また実施後の評価，振り返りについてお話しさせていただきます。そして，最後にまとめに代えて今後の展望に関して述べさせていただきます。

まず，入試広報活動とは，ということなんですけれども，大学側の視点ではいかにして良い学生，もっと言うとアドミッション・ポリシーに合致した学生に受験・入学してもらうかということで，そのような学生募集に関する活動が入試広報活動として位置づけられております。一方で，今回高校の先生方も多くご参加されていると思いますけれども，高校側の観点では，いかにして生徒一人一人の進路を実現させるかということで，進路指導の一環として，キャリア探究活動という位置付けで，例えばオープンキャンパスに参加しようであるとか，個別相談会等に参加しようというような働きかけをしていただいているかと思います。

大学側の観点のところに書いてございますように，18 歳人口の急激な人口減少に伴いまして，受験生獲得のための入試広報活動というのは重要な PR の機会となっております。ですが，一生懸命力を入れてやろうと思えば際限なく広がってしまうというところがまた

入試広報活動の難しさの一つでもあります。その一生懸命力を入れてということで，大学のエネルギー，資源を惜しげもなく投入して行うようなやり方のことを全力投球型というふうに私たちは呼んでおります。けれども，時間，人員，予算，全てが有限である以上，全力投球は良いことのようにも思うんですけれども，大学全体としての活動の妨げになる危険性も併せ持っております。そこで，東北大学では省エネ型の入試広報活動を目指しています。費用対効果を重視して，大学全体の活動の中で時間，人員，予算，それらを配分することによって，やはり先ほど試験そのものも継続性というのが大事だというお話がありましたけれども，持続可能性，継続可能性を重視するならば省エネ型によって効率的な入試広報活動につなげていけると考えております。

また，別の観点からの分類ですけれども，寺下・村松（2009）による分類では，入試広報活動をこちらに挙げた三つのカテゴリーに分類しています。一つ目が発信型広報ということで，これは印刷物やホームページ等を通して，こちらから一方的に情報を発信していくというやり方になります。そして対面型の広報，これは受験者と直接的交流を持つやり方のことです。三つ目に学内型広報というものを挙げておりまして，こちらはオープンキャンパスに代表されるように，学内に受験者を招き入れる形の広報のやり方を指しております。

東北大学でこれまで行ってきた入試広報活動は，先ほどの三分類の中では対面型，学内型の入試広報活動を主として展開してまいりました。東北大学がこれまで行ってきた広報活動，こちらに大きく５種類挙げておりますけれども，上から高校訪問，入試説明会，そして進学説明会・相談会というのが対面型の入試広報活動となっております。そして，オープンキャンパスは学内型で，こちらは大規模な私立大学をしのぐような参加者数を誇っておりました。こちらについては，後からも少しご紹介させていただきます。

また，東北大学では，学内の委員会で明確な基本方針というものを定めまして，入試広報活動を展開しております。まず特色化，焦点化，広域化，これらの三つは継続して掲げてきているものです。そして近年掲げていた方針の一つに AO 入試 30%方針の推進というものがあったんですが，こちらに関しては令和 3 年度入試ですね，今年 4 月に入ってきた入学生の入試で 30%超えを既に達成しております。今後は，この 30%への拡大によって，どういう学生が実際に採れているのか，アドミッション・ポリシーに合致した意欲ある学生をきちんと選抜できているのかということを検証していくフェーズに入っていくと考えております。

入試広報活動は，なかなか客観的な評価は難しい側面もございまして，その中で一つの指標になるのが外部からの評価です。朝日新聞出版が出しております「大学ランキング」というものがございます。この 2022 年版が一番最新のデータになりますけれども，その中で全国の国公私立大学の学長・総長へのアンケートというものがあり，その中で東北大学は「コロナ禍で優れた対応を行っていると思う大学」の第１位に，早稲田大学と並んで選ばれておりました。

また，一つ前の年のもの，2021 年版になりますけれども，こちらの中では「高校からの総合評価」でナンバーワンをいただいておりました。最新の 2022 年版では，この総合評価という項目はなくなってしまったので，一つ前の年のものを出させていただきましたけれども，この総合評価で，東北大学は 2004 年から 11 年連続で第１位をいただいておりまして，2015 年には一度東京大学にトップを譲りましたが，その翌年から再びこの 2021 年まで１位を守り続けていた項目となります。また，こ

ちらも最新のものではなくなってしまっている項目ですけれども，「情報開示に熱心」でも1 位でした。これはまさに私どもの入試広報活動の成果を評価していただいてのこのランキングであると，私どもも励みにしておりました。

また，「オープンキャンパスの参加者数」ですが，先ほど総長のご挨拶の中でもございましたが，2019 年度の参加者数は 6 万 8,228 人ということで，早稲田大学や日本大学といった大規模私立大学の参加者数を上回って，1 位という結果になっておりました。

さて，このように東北大学では，省エネ型と申し上げながらも，非常に活発に入試広報活動を行ってまいりました。しかしながら，2019 年 12 月に中国・武漢で発生した新型コロナウイルス感染症，これが年が明けて 1 月，2 月，3 月となるにつれて感染が拡大していったことによって，東北大学が得意とする対面型，学内型の入試広報活動が方向転換を余儀なくされました。また，東北大学ではコロナ禍において，ニューノーマルを見据えて社会変革を先導する大学を目指して，ということで，2020 年 7 月に「東北大学ビジョン 2030（アップデート版）」というものを発表いたしました。この中で，「教育の改革」という項目の具体的な施策の一つとして，オンラインを活用して国内外を対象とする高大接続プログラムやオープンキャンパス等を機動的に展開することが明確に掲げられました。このような理由と目標によりまして，2020 年度よりオンラインを活用した入試広報活動が本格的に始動したわけでございます。新年度が始まって間もなく，全学の委員会内の組織として入試センターの教員 4 名からなるオンライン広報作業部会というものが発足いたしまして，私もその 4 名の中の 1 人であったことから，今回こうしてお話させていただいております。そして，先ほど挙げた五つの広報活動の中の入試説明会，進学説明会・相談会，オープンキャンパスの三つがオンラインで行われることとなりました。これらオンラインで取り組んだ広報活動の一つ一つについて，概要の説明と実施後の評価を述べさせていただきます。

まず，オンライン入試説明会ですが，東北大学入試センターのホームページの直下に，オンライン入試説明会の特設サイトを開設いたしました。

実施期間は，2020 年 7 月 13 日から 8 月 7 日まで，申込みの開始は 7 月 1 日といたしました。全国を 11 のブロックに分けて，計 41 回の説明会を用意いたしました。1 回の説明会のことはセッションと呼びましたが，1 セッションは 60 分，定員は 20 名，そして時間はご覧のとおりに設定いたしました。ツールは，ビデオ会議システム Zoom を使用いたしました。

11 のブロックの詳細については，こちらの表のとおりとなっております。北海道から九州・沖縄まで 11 のブロックです。あわせて各ブロックで行ったセッションの数についてもお示ししております。一番下のところに全国という表記があるのですが，これは日程的には後から追加して設けたものでございます。というのも，国大協による入学者選抜についての実施要領の発表が 7 月 13 日と例年より大幅に遅れたことに伴いまして，本学の入学者選抜要項の発表も 7 月末にずれ込みました。そこで，日程の前半のほうで行ったセッションに関しましては，まだ入学者選抜要項ができ上がっていない状況で，それでもやはり高校に対してこちらから情報を，その時点で公表できる内容に制限がある中ではありますが，いち早く届けたいという思いから始めたのですが，8 月に入って入学者選抜要項の内容が固まった時点で追加で行ったものが全国の 8 セッションです。

実施結果になります。参加者数は 226 名，194 校からご参加いただきました。各ブロックの申込者数や参加数については，お手元の

資料をご覧いただければと思います。

また，実際に志願者の多いところから参加してきてくれているのかなということを確認するために，令和 2 年度入試の志願者数を横軸に，昨年度行ったオンライン入試説明会への参加者を縦軸に，ブロックごとに集計した値を示した散布図が右側のプロットになります。相関係数の値も非常に高く，やはり志願者数をたくさん送り込んでくれているブロックほど今回の入試説明会への参加意欲も高く，実際に参加していただいたということがわかります。事前にブロックを定めるときにも，多く参加してくれそうな地域では多くのセッション数を設けるように工夫していたのですが，この結果はそのことがある程度適切であったという証拠にもなると考えております。

続いて，事後アンケートの結果です。参加者には，任意で事後アンケートへの回答を求めました。回収率は67.3%でした。Q3の「時期」というところから見てまいります。真ん中の円グラフですね。時期に関して，「ちょうどよい」という回答が 90%，そして「早すぎる」と答えた方の中には，時期そのものが早すぎるというよりは，先ほど申し上げたように入学者選抜要項等の情報が完全にフィックスしていない状況での説明会であったということで，その内容がきちんと固まってからのほうがよかったという意味で早すぎるというご意見がほとんどでした。また，「遅すぎる」に関しては，例年どおりの 6 月～7 月上旬を希望というご意見でした。次に，右側の「曜日・日時」に関して，特段の「不都合はなかった」という回答が 91%で，先ほどお示ししたように，設定した時間帯に少し偏りがあったこともあり，平日の遅い時間や土曜日を希望する声もございました。

次に，こちらの「説明会の内容」，「配付資料」はどうだったか，そして「進め方・プレゼンテーション」はどうだったかということに関してですけれども，「説明会の内容」については「よくわかった」「大体わかった」合わせて 97%でしたが，この中にも入学者選抜要項の発表前で不確定な情報が多かったことに関して，「情報が不十分だ」と感じられた方もいらっしゃいました。「配付資料」や「進め方・プレゼンテーション」については，概ね「十分な内容だ」，「わかりやすかった」という声がほとんどでした。

自由記述項目への回答はこちらにまとめておりますが，詳しくはお手元の資料をご覧ください。主にオンラインへのメリットに言及していただいた声，そして内容に関しては，例えば「学部からの説明がないのが残念だった」とありますが，これは対面では台会場でのみ学部からの説明も行っていたので，おそらく仙台会場に参加経験のある先生からこのようなご意見をいただいたものと思われます。その他といたしましては，PC のスペックであるとか，いろいろな使ったツールの操作上のつまずき等の声もいくつか見られました。

オンライン入試説明会のまとめです。アンケートでは，いずれの項目でも肯定的な回答が 9 割以上でした。新型コロナウイルス感染症の影響で先の見通しが立たない状況でも，進路指導担当の先生方にできるだけ早く入試に関する情報を届けたいという東北大学としての思いは伝わったのではないかとアンケートの結果からもうかがえました。また，地域による参加者数の偏りや高校側のオンライン化への対応状況の違いに関して，7 月，8 月という早い時点で把握できたということも大きな収穫であったと考えております。

続きまして，オンライン進学説明会・相談会に関してです。こちらも特設サイトを 2020 年 6 月 1 日から年度いっぱい，3 月 31 日まで開設いたしました。内容については追って説明いたしますが，私どもが一つ大事なコンセプトとしましたのが，リンクがいっぱい貼ってあって，それをポチポチするだけでは，見に来てくれた生徒さんたちにとってつまらな

いものになるだろうということで，できる限り動画のコンテンツを充実させようということを一つの方針といたしました。また，国際展開，国際対応のため，一部のコンテンツについては中国語版及び韓国語版も作成いたしました。

一つ一つのコンテンツについてご説明いたします。「オンライン進学説明会・相談会特別コンテンツ」というものの中身は，まず，東北大学を志すみなさんへ，ということで総長からのメッセージ動画を掲載いたしました。そして，大学説明＆入試解説の中には，文字どおり大学説明，入試解説のほかに，教育・学生支援担当理事からのご挨拶の動画や海外留学に関する説明も掲載しました。また，質問BOXというものを置きまして，ここでは大学生活や入試に関する様々な質問を随時受け付けるコーナーを設けました。また，ライブイベントでは，リアルタイムで参加するオンラインのイベントに関して周知，告知を行っておりました。

次に，「学部紹介」ですけれども，10 の学部，ただし医学部に関しては医学科と保健学科は別とし，それぞれに 11 のページを用意しました。各学部には，学部説明の動画とそのPDF 版資料，学部ホームページへのリンクは必須とし，それ以外のコンテンツについては各学部で工夫して，作成，提出していただくように依頼しました。入学後の生活に関しては，この部分は記載の内容についてリンクを掲載するのみの部分となっております。入試に関する資料の部分もリンク掲載のみなんですが，主に東北大学入試センターのサイトに置いてあるご覧のような情報に一発のクリックで飛ぶような形で設定しておりました。

そして，「よくある質問 Q&A」では，先ほどご説明した質問BOXに寄せられた質問に対する回答をこちらで作成して，質問と回答のセットを随時掲載していくという方法を取りました。

アクセス数のまとめがこちらになります。Google アナリティクスというものを利用してアクセス数のデータを取っております。開設直後と，8 月のあたりなので夏休みぐらい，そしてこの次の三つ目の山に関しては，9 月21 日，22 日で，これはオープンキャンパスのほうで説明しますが，オープンキャンパスのライブイベントが集中的に行われたところでアクセス数が伸びておりました。PV 数は，サイト内のいずれかのページが閲覧された回数を指しています。訪問者数に関してはサイトに訪問した人ということなんですが，正確にはブラウザの数ですので，同じ人でも別なブラウザを使っていれば重複カウントはありますが，延べ数で PV 数が 15 万 3,000，そして訪問者数は 5 万 2,000 という結果になっておりました。

ページごとのページビュー数の上位トップ10 がこちらになります。トップページは必ず経由するページですので，どうしても上位に来てしまうんですけれども，次に来ているのが大学説明＆入試解説，また各学部の説明でいうと工学部や理学部，医学部医学科，文学部がトップ 10 に入っておりました。総長からのメッセージも 6 位に入っておりますし，よくある質問Q&Aもよく見られているページに含まれておりました。

また，海外からのアクセス数についてもこちらにまとめてございます。アメリカ，中国が上位となっておりました。ご参考といたしまして，東北大学の留学生数ですね，2020 年度入試，すなわち令和 2 年度入試の留学生数の上位 7 か国をこちらに挙げております。1 位中国，2 位インドネシア，3 位韓国，1 位と3 位に中国と韓国が入っておりますので，このように本学にたくさん留学生を送り込んでくれている国に向けてという意味で，進学説明会・相談会の中でも中国語版と韓国語版のコンテンツをご用意した理由，エビデンスの一つがこちらになっております。

また，質問 BOX と Q&A ですが，寄せられた質問は 111 件だったんですが，そこから取捨選択を行いまして，できるだけ皆さんに対して有益な情報をということで，事実として回答できる質問のみを取り上げております。結果，よくある質問 Q&A には 48 組の質問と回答を掲載いたしました。

また，オンライン進学説明会・相談会のページの一番下に，実はアンケートを用意しておりました。ただ，こちらに関しては直接閲覧者に働きかける機会がございませんでしたので，本当に任意で，ご協力を依頼するといったこともできないまま置いておいたところ，36 名からの回答がありました。数としては大変少ないんですけれども，非常に熱心な方からのご意見というふうに私どもは捉えております。属性についてはお手元の資料をご確認していただきまして，あくまでその 36 名の回答結果ということになるんですが，先ほどの閲覧数やページビュー数に比べると，その中のほんの一部であることは否めないんですけれども，このような結果になっておりましたということで，ご紹介させていただきます。

志望学部は，理系の学部が上位を占めておりました。

また，サイトを何で知ったかということに関しては，「東北大学のウェブサイト」を選択した人が 32 名でした。このスライドに示した項目に関しては，複数選択可能な項目でしたので，それぞれの選択肢が選ばれた回数をこちらではまとめてございます。なので，すべての選択肢の度数を足してもトータルの 36 にはならないです。サイトを何で視聴したかに関しては，「スマートフォン」を 21 名の方が選んでいた，「PC」を 13 名の方が選んでいたという結果になっています。どこでという質問に関しては，「自宅」という回答が圧倒的に多かったです。

さらに，特に参考になったコンテンツ，こちらは三つまで選んでくださいというような質問だったんですけれども，選ばれたものをソーティングして並べた結果がこちらになります。入試解説，そして総長からのメッセージが共に 1 位になっておりました。学部に関するところでいうと工学部や理学部，文学部，医学部医学科といった，先ほどのページビュー数のランキングに入っていたようなところが，少数ではありますがこちらのアンケートに答えてくれた人の参考になったコンテンツとしても選ばれていました。この中にも，理事挨拶もございますし，よくある質問 Q&A，あとは学部紹介，そして入学後の生活も，大学での学びや入試以外では気になるポイントであるということが見て取れます。

また，サイト全体についてどうでしたかという質問なんですが，「求める情報が十分に提供されていた」ということに対して，「とてもそう思う」「そう思う」という回答で 100%を占めておりました。また，「サイトの構成が見やすかった」，「本サイトを見てよかった」ということに関しても，「とてもそう思う」という選択肢を 70～80%の方が選んでくださっていました。「友人・知人にすすめたいと思った」に関しては，「そう思わない」という意見も含まれておりました。

自由記述項目への回答をこちらにまとめてございます。好意的な意見の中には，一番最初に申し上げた動画を豊富に入れようという私どもの方針を評価してくださった意見が複数見られて，企画者側としては非常に嬉しかったです。また，改善点の指摘といたしましては，大学の先生方に直接質問できる機会の提供が少ないであるとか，オンライン進学説明会・相談会と言っていながら，直接相談の機会がなかなかないよというような意見もいただいておりました。

それを受けまして，オンライン上での双方向のやり取りによる相談会としての機能が少し乏しかったということが自由記述からも明らかになりましたので，年が明けて 2021 年の

1 月 9 日に入試センター教員によるオンライン進学説明会をウェビナーで開催いたしました。こちらには 250〜300 名弱ぐらいの参加がございました。また，その土日，1月9日・10 日の 2 日間で相談会も行ったところ，十数名の方に参加していただきました。人数は少なかったんですが，本気で東北大学への志望を考えている真面目な生徒さんが多かったという印象でございます。

アンケートへの回答結果から，スマートフォンでの視聴がやはり高校生だと特に多いということで，スマートフォンでの見やすさであるとか，データ通信量への配慮が必要だということが示唆されました。また，アンケートは，どうしてもページの下に置いておくだけだと答えてくれる人が少なくなってしまいますので，事後の評価というものをどうやって行うか，本当にこのアンケートのままでいいのか，あるいはアンケートだとしたらどうやったら回収率が上がるのかといったことも考えていかなくてはいけないかなと思っています。また，海外からの受験生を対象としたコンテンツの整備と拡充，今回は韓国語版と中国語版だったんですが，さらに内容，そして言語ともに充実させていきたいなと考えております。

最後に，オンラインオープンキャンパスに関する振り返りです。東北大学オンラインオープンキャンパスのサイトを 2020 年の 7 月 29 日から，こちらも年度いっぱい開けておりました。各部局には，①独自のウェブサイトを立ち上げる方式と，②入試センターが外部委託した共通デザインのウェブサイトにコンテンツを提供，掲載する方法のいずれかを選択していただきました。その結果，理学部，工学部，薬学部，農学部では①の独自ウェブサイトを選択していただきました。そのほかの学部は②の方式で，コンテンツを提供していただいて，こちらが用意したページに掲載するという形を取りました。

先ほど進学説明会・相談会のアクセス数の話のときに少し触れましたが，本来オープンキャンパスを実施する予定であった 9 月 21 日，22 日には，多数のライブイベント，リアルタイムの参加型のオンラインイベントを実施いたしました。その結果，9 月 21 日，22 日のアクセス数が非常に増えていました。オープンキャンパスのほうが相対的にページビュー数，訪問者数ともに多く，ページビュー数 27 万 1,613，訪問者数 7 万 6,278 という結果になりました。海外からのアクセス数は，こちらもアメリカ，中国からの閲覧者が多かったです。

このオープンキャンパスをどのように数値的に評価するかというところなんですけれども，私どもは毎年新入学者を対象として入試や入試広報に関するアンケートを実施しております。その中で，ここに書いてあるようにオープンキャンパスに関することも聞いていますので，その結果を少し見ていきたいと思います。また，昨年度までは質問紙による調査，本年度は質問紙とウェブを併用して行っております。過去 3 年と比べてみようということで，回収率はこちらに記載しておりますが，この調査，非常に回収率が高いというところが一つ特徴となっております。また，2021 年度の最新のデータに関して，今回ウェブと質問紙を併用いたしましたので，紙の結果はまだ回答を入力中のため，5 月 5 日時点でのウェブによる回答者数がこちらに記入されていて，このデータを使った結果になっております。

昨年，前年度のオープンキャンパスに参加した者の割合を地域別に比較したグラフがこちらになります。東北は，去年のオンラインのものを見たと答えた人がそこまで急激に増えたわけではないんですけれども，例えば中部地方，黄色のところであるとか，近畿地方ですね，水色ですね，このあたりはこれまでよりもかなり明確な増加傾向が見られておりまして，これまでオープンキャンパスに参加

が難しかったような地域の皆さんも閲覧していただいていたという結果になっていました。

また，オープンキャンパスへの参加が入学した学部・学科への志望の決定にどの程度意味があったかという項目なんですけれども，こちらに関しては例年，前年度参加，直前の年度に参加して「決め手になった」と答えるのが 30%以上で，「参考になった」と合わせると９割くらいに上るような調査項目になっているんですが，特にオープンキャンパスに関しては実際に来て体験することに意味があるイベントだと思いますので，今回のオンラインに関する結果は，体験ができない分，どうしても「決め手になった」という回答は少なくなってしまいました。一方で「参考になった」という回答が 75%を上回っているというところで，オンラインであっても志望決定に資する情報を提供できていたと私どもは考えております。

先ほど地域ごとの折れ線グラフでお示ししたように，オンライン化によってこれまで参加が難しかった地域の高校生・受験生にもアクセスが容易になったということが明らかになりました。課題といたしましては，実施後の評価をどうするか，あるいはコンテンツに関しては高校生・受験生にとって有用なコンテンツ，魅力的なコンテンツというものはどんなものなのかというのは今後も考え続けなければいけないところでありますし，海外からのアクセスに関してもさらなる対応が必要と実感しております。

まとめに入らせていただきます。東北大学における入試広報活動の今後の展望です。最初の二つは振り返りですが，令和 2 年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響を受けまして，東北大学における入試広報活動のオンライン化が急速に推進されました。この中で，他大学に先行していち早く受験生や高校生，高校教員に入試に関する情報，東北大学に関する情報を届けたいという我々の思いは伝わっていたのではないかと考えております。

本年度は，従来どおりの対面型，学内型とオンラインのそれぞれのメリットを生かしつつ，ベストミックスによる入試広報活動を計画していきたいと考えております。また，広域化というところがやはり今後も継続した課題になると思っております。オンラインを利用することのメリットといたしましては，これまでなかなか来ることが難しかった方たちにも情報を届けられるということで，国内であれば地理的にオープンキャンパスに参加するのが難しかった志願者層にアプローチするであるとか，あるいは海外に向けた情報発信というところで，広域化が一つのキーワードとなるのではないかと考えております。

本年度の予定に関して，こちらにまとめました。入試説明会は，主としてオンラインで行います。進学説明会・相談会は，オンラインオープンキャンパスと統合した上でオンラインで行う予定です。オープンキャンパスは，オンラインと対面の両方で展開していく予定でございます。ただし，新型コロナウイルス感染症の感染状況や，それに伴う政府や行政の方針に従い，変更の可能性はございますので，その点ご了承いただけますと幸いです。

以上で私からの基調講演を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

（拍手）

船橋伸一特命教授（司会）：

久保先生，ありがとうございました。ご質問等につきましては，ウェブ上での入力をお願いいたします。

ここで休憩とさせていただきたいと思います。皆様方から見ますと右側の時計，右上に時計がございますが，今 14 時 38 分でございます。今から 10 分強の休憩を挟みまして，14 時 50 分から第 2 部を開始させていただきたい

と思います。なお，お手洗いをご利用の際には，密集，密接を避けるようご配慮いただき，ソーシャルディスタンスを保ってのご休憩をお願いいたします。ありがとうございました。

［休憩］

基調講演　久保沙織（東北大学）

2021年5月17日　**第34回東北大学高等教育フォーラム**

基調講演２

オンラインを活用した
東北大学入試広報活動の新たな展開

東北大学 高度教養教育・学生支援機構
准教授　久保 沙織

本日の内容

➢入試広報活動とは
➢東北大学の入試広報活動
➢オンラインを活用した東北大学入試広報活動
1. オンライン入試説明会
2. オンライン進学説明会・相談会
3. オンラインオープンキャンパス
➢東北大学における入試広報活動の今後の展望

2

入試広報活動とは

●大学側の観点
・学生募集：いかにして「良い学生」に受験・入学してもらうか
・入試広報活動としての位置づけ
・18歳人口の急激な減少に伴い，受験生獲得のためのPRが重要に

●高校側の観点
・進路指導の一環：いかにして進路を実現させるか
・進路（キャリア）探究活動としての位置づけ

3

入試広報活動の類型①

1. 全力投球型
・大学のエネルギー・資源を惜しげもなく投入
→ 大学全体としての活動の妨げになる危険性
→ 継続性の欠如
2. 省エネ型
・費用対効果を重視
→ 大学全体の活動の中での労力配分
→ 継続可能性

●東北大学では「省エネ型」の入試広報活動を展開

4

入試広報活動の類型②

●寺下・村松（2009）による分類
1. 発信型広報
・大学の教育・研究内容や入試情報等を印刷物やホームページを通して受験者に伝える
2. 対面型広報
・受験者と直接的交流を持つ
3. 学内型広報
・学内に受験者を招き入れる
・オープンキャンパス

5

東北大学における入試広報活動

●東北大学では対面型・学内型の入試広報活動を得意とする

種類	対象	開始年	目的・内容	類型
高校訪問	高校教員（主に進路指導担当）	1999年(H11)	進路指導担当教員との情報交換と，生徒に対する進学説明会及び相談会	対面型
入試説明会	高校教員	2000年(H12)	東北大学の入試（特に東北大学型AO入試）に関する情報提供 2019年度は全国21都市で実施	対面型
進学説明会・相談会	高校生・受験生・保護者	2006年(H18)	大学紹介，入試説明と個別相談 2019年度は全国6都市で実施	対面型
オープンキャンパス	高校生・受験生	1999年※(H11)	学部単位で研究紹介，模擬授業等のイベント実施	学内型
印刷物・入試センターHPを通じた情報発信	高校教員・高校生・受験生・保護者	–	大学案内，AO入試パンフレット等の作成，その他入試に関する情報をHPで周知	発信型

※1982年に工学部の金属系3学科が学科公開を行ったのが起源と考えられる。1999年より「東北大学オープンキャンパス」として全学実施。

6

基調講演　久保沙織（東北大学）

東北大学の入試広報活動の基本方針

- **特色化**：特色ある活動
  - 国立大学最大規模のオープンキャンパス
  - 高校との意思疎通を円滑にするきめ細やかな高校訪問
- **焦点化**：対象地域や対象者層，説明内容等について焦点を明確に
  - 入試説明会，進学説明会・相談会では各地域の特色に応じた資料作成
  - 入試データの分析から得られる知見を活用
- **広域化**：広域型活動の充実
  - 入試説明会は全国21都市で実施
  - 進学説明会・相談会は全国6都市で実施
  - 高校訪問等の対象地域の拡大を検討
- **AO入試30%方針の推進**
  - AO入試志願者の少ない地域への広報活動の強化
  - 2021年度（令和3年度）入試で達成

7

東北大学の入試広報活動に対する評価①

- 「大学ランキング2022年版」（朝日新聞出版）

全国の国公私立大学の学長・総長が選ぶ

コロナ禍で優れた対応を行っていると思う大学

1	**東北大**
	早稲田大
3	東京大
4	千葉工業大
5	山梨大

8

東北大学の入試広報活動に対する評価②

- 「大学ランキング2021年版」（朝日新聞出版）

高校からの総合評価

1	**東北大**
2	東京大
3	明治大
4	早稲田大
5	国際教養大
6	金沢工業大
7	立命館大
8	京都大
9	中央大
10	近畿大

2004年から11年連続で第１位，2015年には東京大にトップを譲るも，その翌年から再び１位を守り続けていた！

9

東北大学の入試広報活動に対する評価③

情報開示に熱心

1	**東北大**
2	早稲田大
3	近畿大
4	立命館大
5	東京大
6	京都大
7	中央大
8	明治大
9	山形大
10	筑波大

オープンキャンパス参加者数

1	**東北大**
2	早稲田大
3	東洋大
4	日本大
5	近畿大
6	明治大
7	上智大
8	法政大
9	中央大
10	関西大

2019年度の参加者数 68,228人

10

東北大学における入試広報活動のオンライン化

- 新型コロナウイルス感染拡大防止のため
  - 対面型・学内型の入試広報は三密状態が不可避
- 東北大学ビジョン2030（アップデート版）実現のため
  - 「距離・時間・国・文化等の壁を超えた多様な学生の受入れ推進」→「オンラインを活用して国内外を対象とする高大接続プログラムやオープンキャンパス等を機動的に展開」と明示

↓

- 2020年度より，オンラインを活用した入試広報活動が本格始動
- 全学の委員会内の組織としてオンライン広報作業部会が発足
- 「オンライン入試説明会」，「オンライン進学説明会・相談会」，「オンラインオープンキャンパス」を実施

11

2020年度の東北大学の入試広報活動

種類	対象	開始年	目的・内容	2020年度
高校訪問	高校教員（主に進路指導担当）	1999年(H11)	進路指導担当教員との情報交換と，生徒に対する進学説明会及び相談会	見合わせ
入試説明会	高校教員	2000年(H12)	東北大学の入試（特に東北大学型AO入試）に関する情報提供 2019年度は全国21都市で実施	**オンライン**
進学説明会・相談会	高校生・受験生・保護者	2006年(H18)	大学紹介，入試説明と個別相談 2019年度は全国6都市で実施	**オンライン**
オープンキャンパス	高校生・受験生	1999年※(H11)	学部単位で研究紹介，模擬授業等のイベント実施	**オンライン**
印刷物・入試センターHPを通じた情報発信	高校教員・高校生・受験生・保護者	–	大学案内，AO入試パンフレット等の作成，その他入試に関する情報をHPで周知	継続

12

基調講演　久保沙織（東北大学）

1. オンライン入試説明会

●「東北大学オンライン入試説明会」の特設サイトを開設
http://www.tnc.tohoku.ac.jp/online-nyushi_setsumei/

13

オンライン入試説明会の概要

●実施期間：2020年7月13日～8月7日（参加申込の開始は7月1日）
●全国を11ブロックに分け，計41回の説明会を開催
●１セッション（＝１回の説明会）60分，定員は20名
●時間帯は，①13:00-14:00（3回）②14:15-15:15（1回）③15:30-16:30（33回）④16:45-17:45（4回）
●ビデオ会議システム Zoom を利用

14

ブロック区分とセッション数

ブロック	都道府県	セッション数
北海道	北海道	2
北東北	青森県，秋田県，岩手県	4
宮城	宮城県	6
南東北	山形県，福島県	3
北関東	茨城県，栃木県，群馬県，埼玉県	4
南関東	東京都，千葉県，神奈川県，山梨県	4
北信越	新潟県，長野県，富山県，石川県，福井県	3
東海	静岡県，愛知県，岐阜県，三重県	3
近畿	滋賀県，京都府，大阪府，兵庫県，奈良県，和歌山県	2
中国四国	鳥取県，島根県，岡山県，広島県，山口県，徳島県，香川県，愛媛県，高知県	1
九州沖縄	福岡県，佐賀県，長崎県，熊本県，大分県，宮崎県，鹿児島県，沖縄県	1
全国	全国どの都道府県からでも参加可能	8

15

申込者数と参加者数

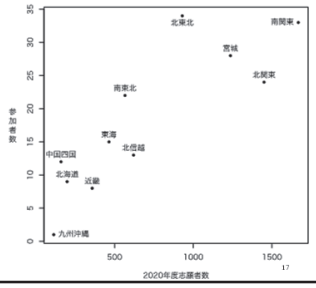
●39回のセッションを実施
・2つのセッションで申込者が0名だった
●申込者数273名，参加者数226名（194校），参加率82.8%
・参考：2019年度の参加者数557名，うち仙台会場232名

ブロック	申込者数	充足率	参加者数	参加率
北海道	10	25.0%	9	90.0%
北東北	38	47.5%	34	89.5%
宮城	30	25.0%	28	93.3%
南東北	22	36.7%	22	100.0%
北関東	33	41.3%	24	72.7%
南関東	43	53.8%	33	76.7%
北信越	15	25.0%	13	86.7%
東海	17	28.3%	15	88.2%
近畿	10	25.0%	8	80.0%
中国四国	16	80.0%	12	75.0%
九州沖縄	2	10.0%	1	50.0%
全国	37	23.1%	27	73.0%

16

地域ごとの志願者数と参加者数との相関

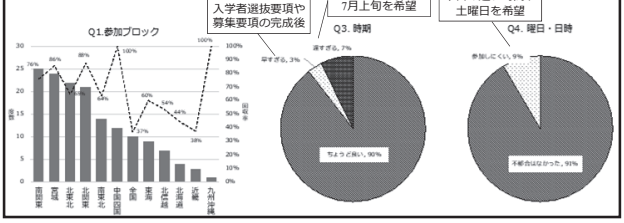
●スピアマンの順位相関係数 0.87（$p < .001$）
●2020年度（令和2年度）入試の志願者数とオンライン入試説明会の参加者数との間には，強い正の相関あり



17

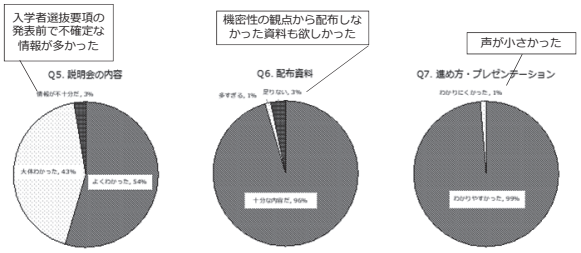
事後アンケートの結果①

●参加者には任意で事後アンケートへの回答を求めた
●回答者数152名，回収率67.3%



基調講演　久保沙織（東北大学）

事後アンケートの結果②



事後アンケートの結果③

●自由記述項目への回答

(1) オンラインのメリットに言及
- 遠方に出張せずとも，説明会に参加できて，会場への移動時間や時間割変更処理などの労力が大幅に省けました。
- オンラインの説明会は参加しやすいので，新型コロナウイルスが収束した後も開催して頂けると助かります。

(2) 内容について
- 東北大学全体としての入試選抜に対するスタンス・方針について大変理解を深めることができました。
- 学部からの説明がないのは仕方のないことですが，少々残念でした。

(3) その他
- 資料を上げているページが分からなかった。
- 校務用PCにカメラがないので，映像を映し出すことができなかった。

20

オンライン入試説明会　まとめ

●アンケートでは，いずれの項目でも肯定的な回答が9割以上

●新型コロナウイルス感染症の影響で先の見通しが難しい状況であっても，進路指導担当の高校教員にできるだけ早く入試に関する情報を届けたいという思いは伝わった

●地域による参加者数の偏りや，高校側のオンライン化への対応状況の違い等を把握することができた

●より多くの高校から参加してもらうため，実施時期や実施時間帯の見直しを行う必要性が示唆された

21

2. オンライン進学説明会・相談会

●「東北大学オンライン進学説明会・相談会」の特設サイトを開設
http://www.tnc.tohoku.ac.jp/online-singaku_setsumei/

22

オンライン進学説明会・相談会の概要

●期間：2020年6月1日～2021年3月31日

●「オンライン進学説明会・相談会特別コンテンツ」，「学部紹介」，「入学後の生活」，「入試に関する資料」，「よくある質問Q&A」，「アンケート」の大きく6つのコンテンツから構成

●豊富な動画コンテンツ

●一部のコンテンツについては，中国語・韓国語版コンテンツも作成

23

コンテンツ詳細①

オンライン進学説明会・相談会特別コンテンツ

●東北大学を志すみなさんへ「東北大学総長からのメッセージ」（中国語・韓国語の字幕版有）

●大学説明&入試解説
- 教育・学生支援担当理事挨拶（中国語・韓国語の字幕版有）
- 大学説明（中国語・韓国語版有）
- 入試解説
- 海外留学説明

●質問BOX

●ライブイベント

24

基調講演　久保沙織（東北大学）

コンテンツ詳細②

学部紹介

●10学部（医学部は医学科と保健学科別）それぞれに1つのページを用意

●学部説明動画（中国語・韓国語の字幕版有）とそのPDF版資料，学部HPへのリンク＋α

入学後の生活（リンク掲載）

- 奨学金
- 寄宿舎（ユニバーシティ・ハウス）
- 食堂・購買
- 図書館
- 保健管理センター
- 学生相談・特別支援センター
- 留学
- ボランティア
- 学友会・サークル
- アルバイト
- 就職・進路

25

コンテンツ詳細③

入試に関する資料（リンク掲載）

- 東北大学案内
- 入学者選抜要項
- AO入試パンフレット
- AO入試過去問題
- 出題の意図
- 募集要項

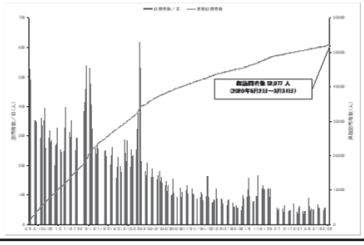
よくある質問Q&A

●質問BOXに寄せられた質問に対する回答を随時掲載

26

アクセス数①

●ページビュー（PV）数と訪問者数（6/2～3/31）



指標	延べ	1日平均
PV数	153,162	505.5
訪問者数	52,077	171.9

27

アクセス数②

●PV数上位トップ10

順位	ページ	PV数	訪問者数
1	トップページ	74,584	48,088
2	大学説明&入試解説	10,063	8,184
3	トップページ（メニューより選択）	7,713	5,310
4	学部紹介：工学部	7,557	6,486
5	よくある質問Q&A	4,621	4,184
6	東北大学総長からのメッセージ	4,450	3,926
7	学部紹介：理学部	4,430	3,765
8	学部紹介：医学部医学科	3,895	3,241
9	学部紹介：文学部	3,740	3,047
10	大学説明&入試解説（ページ内リンクより選択）	3,704	3,252

28

海外からのアクセス数

●訪問者数が10以上の国・地域

順位	国・地域	訪問者数
1	アメリカ	149
2	中国	118
3	台湾	23
4	香港	17
	シンガポール	17
6	韓国	14
7	ドイツ	12

【参考】東北大学の留学生数
上位7ヶ国（2020年度）

順位	国	人数
1	中国	1,282
2	インドネシア	132
3	韓国	92
4	台湾	70
5	タイ	49
6	フランス	42
7	インド	38

29

質問BOXとQ&A

●質問BOX

- 高校生90名，保護者20名，その他1名から計111件の質問
- 事実として回答できる質問のみを取捨選択
- 入試開発室の教員の他，学部・センター等の担当者にも回答作成を依頼

●よくある質問Q&A

- 48組の質問と回答を掲載

内容	Q&Aの数
学部・学科について	30
入学後の生活について	9
入試について	9

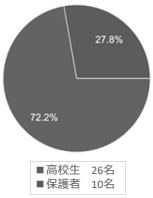
30

基調講演　久保沙織（東北大学）

アンケートの結果①

●回答者数36名（男性13名，女性22名，無回答1名）

●回答者の属性

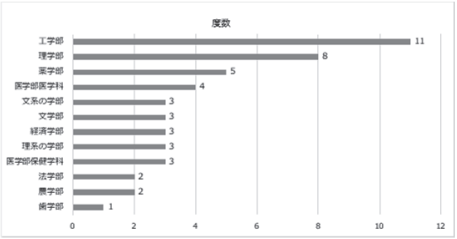


	1年生	2年生	3年生	既卒	無回答	計
公立	4	7	10	1	1	23
私立	4	4	5	0	0	13
計	8	11	15	1	1	36

31

アンケートの結果②

●東北大志望の場合の志望学部



32

アンケートの結果③

●サイトを何で知ったか？

選択肢	度数
東北大学のウェブサイト	32
在籍している学校または予備校の先生から紹介された	4
家族・親戚から紹介された	1
その他：進学説明会を探していたとき	1

●サイトを何で試聴したか？

選択肢	度数
スマートフォン	21
PC	13
タブレット	9

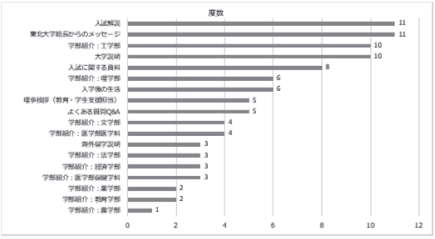
●サイトをどこで試聴したか？

選択肢	度数
自宅	35
学校	2
予備校・塾	1

33

アンケートの結果④

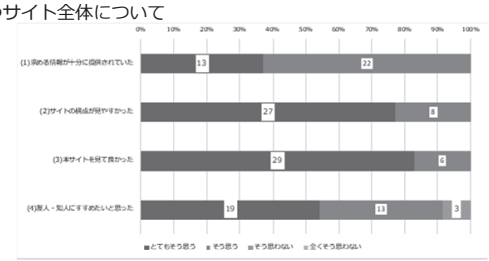
●特に参考になったコンテンツ



34

アンケートの結果⑤

●サイト全体について



35

アンケートの結果⑥

●自由記述項目への回答

(1) 好意的意見
- サイトのデザインが洗練されていて，サイト内に動作があり，とても見やすかったです。
- 自分が見たいコンテンツを直ぐに見つけられる，わかりやすいサイト構成でした。
- 資料だけでは理解しにくいような情報を動画で解説されていて，サイトを見て良かったと感じました。

(2) 改善点
- 大学の先生方に直接質問できる機会の提供があると助かります。
- オンライン相談と言いながら，質問の回答を得られる方法が非常に乏しい。

36

基調講演　久保沙織（東北大学）

オンライン進学説明会・相談会　まとめ

- ●オンライン上での双方向のやり取りによる相談会としての機能強化が課題
  - ・2021年1月9日（土）に入試センター教員によるオンライン進学説明会，2021年1月9日（土）・10日（日）に同じく進学相談会を実施
- ●スマートフォンでの見やすさや，データ通信量への配慮の必要性が示唆された
- ●実施後の評価方法に検討の余地あり
  - ・アンケートの回収率をいかに上げるか
- ●海外からの受験生を対象としたコンテンツの整備と拡充を目指す

37

3. オンラインオープンキャンパス

- ●「東北大学オンラインオープンキャンパス」のサイトを開設
  http://www.tnc.tohoku.ac.jp/online-opencampus/

38

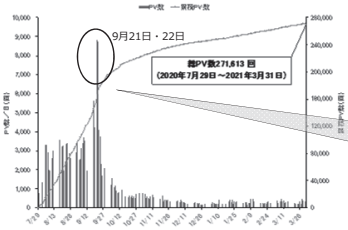
オンラインオープンキャンパスの概要

- ●期間：2020年7月29日～2021年3月31日
- ●各部局の自由裁量を尊重し，部局ごとのページを用意
- ●川内キャンパスから14部局，青葉山キャンパスから11部局，星陵キャンパスから4部局，片平キャンパスから6部局が参加
- ●各部局は①独自のウェブサイトを立ち上げる方式と，②入試センターが外部委託した共通デザインのウェブサイトにコンテンツを提供・掲載する方式のいずれかを選択
  → 理学部，工学部，薬学部，農学部では①を選択
- ●本来のオープンキャンパス実施予定日であった9月21日・22日には多数のライブイベントを実施
- ●コンテンツは随時更新

39

アクセス数

- ●ページビュー（PV）数と訪問者数（7/29～3/31）



指標	延べ	1日平均
PV数	271,613	1104.1
訪問者数	76,278	310.1

9月21日・22日には，「東北大学オンラインオープンキャンパス特別イベント」と称して多数のリアルタイムイベントを実施

40

海外からのアクセス数

- ●訪問者数上位の国・地域

順位	国・地域	訪問者数
1	アメリカ	410
2	中国	211
3	台湾	46
4	シンガポール	29
5	韓国	28
6	香港	21
7	イギリス	20
8	オーストラリア	16
9	タイ	14
10	ベトナム	12

41

東北大学新入学者対象アンケート

- ●東北大学高度教養教育・学生支援機構入試開発室では，毎年，**新入学者を対象**として，**入試**，**オープンキャンパス**，**入試広報**に関するアンケートを実施
- ●オープンキャンパスや進学説明会・相談会への参加経験の有無，またそれらへの参加が志望決定にとってどの程度意味があったか，等の質問項目が含まれる
- ●昨年度までは質問紙による調査，本年度は質問紙とWebを併用

	2018 (H30)	2019 (H31)	2020 (R2)	2021 (R3)※
回答者数	2,413	2,406	2,372	859
回収率	98.7%	97.8%	98.2%	–

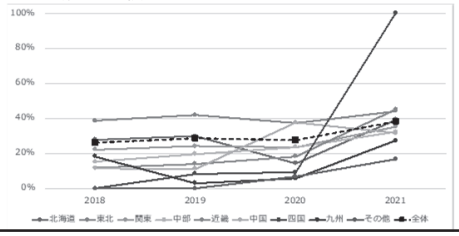
※2021年度（令和3年度）入学者については回答回収中のため，2021年5月5日時点でのWebによる回答者数

42

基調講演　久保沙織（東北大学）

新入学者対象アンケートの結果①

●新入学者のうち，前年度のオープンキャンパスに参加した者の割合を地域別に比較



43

新入学者対象アンケートの結果②

●オープンキャンパスへの参加は，入学した学部・学科への志望の決定にどの程度の意味があったか？（参加者比）

		決め手となった	参考になった	あまり関係なかった	全く無関係
2018	前年	35.5%	53.4%	9.4%	1.8%
	それ以前	18.3%	59.1%	14.8%	7.8%
2019	前年	33.8%	54.6%	8.6%	3.0%
	それ以前	18.1%	65.8%	12.9%	3.2%
2020	前年	39.2%	51.1%	7.4%	2.3%
	それ以前	21.4%	61.4%	12.6%	4.6%
2021	前年	8.0%	75.9%	13.0%	3.1%
	それ以前	23.6%	54.7%	17.3%	4.3%

44

オンラインオープンキャンパス　まとめ

●オンラインであっても，志望決定に資する情報を提供できていた

●オンライン化により，これまで参加が難しかった地域の受験生もアクセスが容易に

●実施後の評価をどのように行うかが課題の一つ
- アクセス数には，方式②を選択した部局の情報しか含まれない
- 新入学者対象アンケートは継続して実施

●高校生・受験生にとって有用かつ魅力的なコンテンツ作成
- 従来のオープンキャンパスに比べて学生主体の企画が少ない
- 海外からのアクセスへの対応

45

東北大学における入試広報活動の今後の展望

●2020年度（令和2年度）は，新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響を受けて，東北大学における入試広報活動のオンライン化が急速に推進された

●他大学に先行して，いち早く受験生や高校教員に東北大学および入試に関する情報を届けることに成功

●本年度は，従来通りの対面型・学内型とオンラインそれぞれのメリットを活かしつつ，双方のベストミックスによる入試広報活動を計画

●入試広報活動の**広域化**
国内外の志願者層を対象としたボーダレスかつインクルーシブな入試広報活動の展開

46

本年度の入試広報活動の予定

種類	2020年度	2021年度の予定
入試説明会	オンライン	**主としてオンライン** • 6月中旬から下旬にかけて実施予定 • 仙台会場（6月29日）のみ対面
進学説明会・相談会	オンライン	**オンライン（オンラインオープンキャンパスと統合）** • 6月下旬を目処にサイトオープン予定
オープンキャンパス	オンライン	**オンラインと対面** • 6月下旬を目処にサイトオープン予定 • 対面は7月28日・29日を予定

●新型コロナウイルス感染症の感染状況とそれに伴う政府や行政の方針に伴い，変更の可能性あり

47

2021年5月17日　**第34回東北大学高等教育フォーラム**

ご清聴ありがとうございました

48

参考文献

- 久保沙織・南紅玉・樫田豪利・宮本友弘 (2021). オンラインによる入試広報の展開―「オンライン進学説明会・相談会」の実践を通して―　東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要, 7, 57-65.
- 久保沙織・南紅玉・樫田豪利・宮本友弘 (2021). オンラインによる高校教員向け入試説明会の実践と評価　大学入試研究ジャーナル, 31, 394-400.
- 倉元直樹・宮本友弘・久保沙織・南紅玉 (2020). 東北大学における入試広報活動の「これまで」と「これから」―頂点への軌跡からオンライン展開への挑戦へ―　教育情報学研究, 19, 55-69.
- 寺下榮・村松毅(2009). 東海・北陸地区–国立大学入試広報の取組②―エリア別志願者の受験行動に関する調査―　大学入試研究ジャーナル, 19, 145-150.

49

第Ⅱ部　　現状報告

現状報告者紹介

現状報告者１

近藤　明夫（こんどう　あきお）氏

1961 年東京都生まれ

〔教員歴〕
東京都に入都後、都立中高一貫校などを経て、現任校で６校目。
現在、東京都立戸山高等学校において６年連続の進路主任を勤めている。

〔担当教科〕
地理歴史科　専門は日本史

〔その他の特記事項〕
・進路指導の経験が長く、全国の進路の先生方との交流がある。
・授業では、新学習指導要領での新科目「歴史総合」も見据えて、KP 法などを用いた“深い学び”の授業の試行錯誤を繰り返している。

現状報告者 2

多田 鉄人（ただ てつと）氏

1983 年兵庫県生まれ

〔教員歴〕
私立須磨学園高等学校教諭（現職）（１４年目）

〔主な教育活動〕
高校１年学年部長、数学部長

現状報告者 3

鈴木 雅之（すずき まさゆき）氏

1986 年東京都生まれ

〔教員歴〕
昭和女子大学人間社会学部心理学科　助教（1 年間）
横浜国立大学教育学部　講師（2 年間）
横浜国立大学教育学部　准教授（3 年間）

〔主な研究歴〕
専門は教育心理学（教授・学習）

〔主な著書、研究業績〕
鈴木雅之（2019）. 教育心理学から見た「主体性」―自己調整学習の観点から―　東北大学高度教養教育・学生支援機構（編）　大学入試における「主体性」の評価―その理念と現実―（pp.31-48）. 東北大学出版会
鈴木雅之（2019）. 数学力構成要素の測定と指導法開発　市川伸一（編）　教育心理学の実践ベース・アプローチ―実践しつつ研究を創出する―（pp.185-197）. 東京大学出版会
Suzuki, M., & Akasaka, K. (2018). Do emotions after receiving test results predict review activities? An intra-individual analysis. Japanese Psychological Research, 60(1), 1-12.
鈴木雅之・西村多久磨・孫媛（2015）. 中学生の学習動機づけの変化とテスト観の関係　教育心理学研究, 63(4), 372-385.
鈴木雅之（2014）. 受験競争観と学習動機，受験不安，学習態度の関連　教育心理学研究, 62(3), 226-239.

〔学会活動等〕
日本教育心理学会　常任編集委員（2017 年～2019 年）
日本テスト学会　理事（2017 年より）
日本行動計量学会　和文誌編集委員（2018 年より）

〔その他の特記事項〕
日本教育心理学会「城戸奨励賞」（2012 年）
日本教育心理学会「優秀論文賞」（2013 年）
日本教育心理学会「優秀論文賞」（2016 年）

現状報告 1：臨時休校・分散登校の下での「学習の遅れ」の回復

東京都立戸山高等学校
近藤　明夫　主幹教諭

［講師紹介］

船橋伸一特命教授（司会）：

それでは，お時間になりましたので，これより第 2 部，現状報告に入らせていただきます。現状報告 1「臨時休校・分散登校の下での『学習の遅れ』の回復」，東京都立戸山高等学校主幹教諭，近藤明夫先生，よろしくお願いいたします。

（拍手）

近藤明夫教諭：

失礼いたします。東京都立戸山高等学校の進路主任をしております近藤と申します。本日はよろしくお願いいたします。

私が勤めております東京都立戸山高等学校，これは東京の新宿にございます。このコロナのことではなかなか新宿が話題になる場面も多うございましたけれども，学校としては創立は 1888 年ということで，もう 130 年という長い歴史を誇っている学校でございます。文科省のほうの SSH の指定ですとか，それから東京都が独自に行っておりますチームメディカルということで，医学部の支援などを行っている学校ということです。学校としましては，国際社会に貢献するトップリーダーの育成ということで，やっている学校です。

今回は，全国一律の一斉休校，その後の分散登校，昨年度高校の，特に私どものような公立の普通の高校がどんなふうに対応していたのか，それを今日はお話をさせていただきたいと思います。

まず，戸山高校の臨時休校・分散登校の状況を少しおさらいしていきたいと思います。

ご案内のとおり，全国一律の一斉休校が突然発表されて，全国の小学校，中学校，高校，みんな戸惑ったと思います。私どもも，その直後から本来であれば定期考査が予定されている，学年末の考査が予定されている中で，臨時休校だということで，試験もできないまま，その後 3 月 24 日に 1 回だけ生徒を来させて，通知表などを渡して，その後春休み，この間部活動もできないというような状態になりました。その後，4 月 6 日に始業式は実施できました。ただ，ご案内のように緊急事態宣言ということで，その後 4 月 7 日の日からも休校ということで，ですのでこの年の 1 年生は入学式もできないまま，担任の先生もクラスメイトの顔も一切わからないまま，臨時休校ということになってしまいました。

最初の話では，ゴールデンウィークが明けるまでということだったわけです。その間に関しては，東京都のほうも登校日の設定はできませんよと，完全に休校という形でした。ただ，ゴールデンウィークが始まってみても，なかなか感染者が減らないと。結果的には，緊急事態宣言が延長されていきます。東京は

最後まで残ってしまいましたので，5 月 26 日まで，気づいてみたらば 3 月，4 月，5 月とずっと休校という事態になってしまったということです。その後，東京都の場合には分散登校という形になりましたが，後ほど少し説明をさせていただきますけれども，まずは 5 月 27 日，28 日，29 日，ここは 1 日ずつ登校させて，再開の準備をすると。その後の分散登校についてはこの後少しご説明をしていきたいと思います。

6 月の前半ですね，分散登校のⅡ期というのは二つポイントがありました。一つ目は，登校する人数自体を制限したいと。実は東京はまた分散登校を今やっています。今はとにかく人流を抑えるんだということで，登校する人数を 3 分の 2 に制限する，このときとその点では同じです。ただ，今とこのときが違うのは，このときは教室の人数のほうも抑制するんだということで，40 人の生徒を半分に分けて，例えば午前中は出席番号偶数の生徒，午後は奇数の生徒，ですから 1 日を単位で見ると，我々教員の側は 4 時間授業を 2 回行うと。午前と午後，同じ話をすると。さらには，3 分の 2 に抑制が入っていますので，1 年生と 3 年生は月曜日来るけれども 2 年生は自宅学習よと。こういう形が約 2 週間続きました。

分散登校のⅢ期になると，今度は登校させるのは 3 学年とも来させていいですよと。いいですよと言ったんだけれども，結局来ていいのは教室の人数の抑制のほうが優先されたために，半分ですよと。そうしますと，例えば分散登校のⅢ期の場合には 1 年生も 2 年生も 3 年生も来ています。来ていますが，月曜日は出席番号偶数の生徒，奇数の生徒は自宅で学習すると。そうすると，授業を普通に偶数の子たちにやっているわけですから，その間じゃあ奇数の子たちはどうすんのという問題も出てきてしまったということです。

そんな中で，当然学習の遅れ，こういったことが大きな問題になっていきます。じゃあどう対応していくのかということで，この後ご報告をされる須磨学園様のようなオンラインなどが整っているところに比べると，本当にバタバタの様子をご報告するのでお恥ずかしいのですが，実態をご覧いただいて，またいろいろご教示いただけたらと思っています。

最初の段階ですね，まず 3 月から春休みまでの最初の全国一律の一斉休校のとき，このときは生徒のほうも私たち戸山高校の教職員のほうもちょっと油断していたと思います。というのは，年度末でちょうど授業も一区切り終わるところ。4 月になって，授業が始まればどうにかなるんじゃないかと。だから，2 年生に関しては英語と数学と国語，最後定期考査もなかったのでしっかりまとめておきなさいよと紙ベースで課題などを配って，新 3 年生のほうは翌年の教科の担当者などがやっぱり紙などを配って，春休み中ちゃんと勉強しておきなさいよと。

ところが，4 月 6 日，「いや，再開できないんじゃないか」と。緊急事態宣言というのが何か出るんじゃないかと。ちょうど 1 年前の 4 月ですね。ですので，本校においても「あれ，これはこのまま紙ベースで課題だけ配っててもダメなんじゃないか」という心配が生まれてきました。

そんな中で，本校では 4 月 3 日の日ですね，郁文館高校の高橋先生という先生に本校に来ていただいて，郁文館はこんなふうにやっていますよと，校内の研修会を行いました。Zoom を使って，こんなふうにホームルームをやっていますと。ただ，はっきり言ってこの段階では先生方の意識も「いや～，そんなオンラインなんて言われても，なかなか無理でしょう」と，正直あまり意識は高まりませんでした。ですから，相変わらず紙で印刷したものをレターパックですかね，入れて，全生徒に郵送するなんていうことをやっていました。

ところが，3 番目のところですけれども，

「いや，これゴールデンウィーク終わっても学校始まんないんじゃないの？」と。このあたりから，だいぶ先生方のほうも危機感が高まっていったというのが正直なところだと思います。本校は，その当時ベネッセさんのClassi を導入していましたので，こちらを使って連絡を取る，または課題を発信する。ただ，これは生徒たちもですが私たち教職員のほうもまだまだ慣れていなかった点があって，だいぶ混乱も来したかと思います。一部の授業の担当の先生方では，「これはもうまずい」と，「オンラインを活用していかなければいけない」と，そんな危機感が本格化したのがちょうどゴールデンウィーク前後というあたりですかね。東京などは宣言が延長されると。これは大変だということで，ゴールデンウィーク明けあたりから，例えばホームルームはZoom を使ってやりましょうとか，一部の授業は Zoom を使ってインタラクティブな授業をやっていくとか，またはオンデマンド型の教材を YouTube などにアップして，生徒に学習させていくと。さらには，Classi なんかを使ってウェブテストをやるというようなことが起こっていったのは，本校ではゴールデンウィーク明けあたりだったと思います。

それで，分散登校になりました。生徒たちが少し来出しました。実際には生徒たちは例えば 1 日置きに登校したりするわけですけれども，自宅にいる期間が長いんですけれども，逆に生徒たちが来出してしまうと，どちらかというと紙でやっぱり配ったほうが早いねというようなことで，少し後戻りしてしまった。もちろん 3 年生の受験に向けた授業などではオンデマンド型の補講なんかも行われていた。ここが私の話のポイントかと思うんですけれども，戸山高校も，それから東京都の公立高校全体としても，とにかく休んでいた間をオンラインの授業で補おうというコンセプトではなくて，休んだ部分を取り返すんだという考え方でした。ですから，例えば本校でも文化祭，ふだんだったら 1 週間ぐらい準備から含めると授業がないわけですけれども，それがなくなるためにそこを全部授業にする。修学旅行もなくなったので授業にする。土曜授業や，祝日も本校の場合は海の日とか秋分の日とかみんな授業でした。さらに，これはもう知事のほうでも言ってましたけれども，夏休みは2週間に短縮すると。冬休みは12月26日から 1 月 3 日まで。1 月 4 日から全部の都立高校で授業を開始する。本校でもこのようなことをやったために，12 月の段階で実は失われていた授業日数をほぼ全部回復できました。

じゃあその結果どうなったのかということをここで見ていっていただきたいと思うんですけれども，まず先ほど来の基調講演の中にもありましたが，昨年の学年，新テストでした。彼らは大変でした。英語 4 技能があるんじゃないか，ポートフォリオどうのこうの，記述式もとかと言われて，バタバタした学年でした。そんな中でコロナ禍でしたから，志望が安定志向に走るんじゃないか，一般受験じゃなくて例えば総合型選抜や推薦型に流れるんじゃないかという危惧がありましたが，実際には本校の場合にはあまり変わりませんでした。指定校で行った生徒の数，その前の年は12名指定校で行きましたけれども，昨年は 9 名と。実際に模試のときに書いてもらう志望校などを見ても，コロナが始まる前の 2 年生の 2 月の模試で書いた志望校と最終的に 3 年の最後の共通テストプレの模試動向はほとんど変わりませんでした。

じゃあ結果はどうだったか。センター試験に比べて大学入学共通テストになると難しくなるんじゃないかという話もありましたが，本校の場合はほぼ例年並み，またはちょっとよかったぐらいです。例えば文系，900 点型で受けた生徒ですね，平均点が約 700 点，理系のほうは 700 点にちょっと本校は届きませんでしたけれども，まあ前年のセンターより

もちょっとよかったです。国公立大学の合格も 145 名ということで，ほぼ例年並み。ここに書いたいくつかの大学さんの現役合格の数を見ていただいても，まあまあほぼ例年並み，またはちょっとよかったかなと。

まとめて見ますと，新テスト，さらにはコロナ禍という中で，結果的に生徒たちは志望も下がることなく，共通テストもうまく乗り切れましたし，前年よりもある程度，少しよかったのかもしれません。じゃあどうしてそうなったのと。だったら別に臨時休校しても大丈夫じゃないという話になってしまうと思うんですが，実はここにはいくつかのポイントがあると思います。

一つ目は，本校の場合を見ていると，例年ですと高校 3 年生の 4 月，5 月，さあ自分がやってきた部活の引退に向けて，関東予選で頑張る，インターハイ予選で頑張る，もう部活一生懸命で，勉強なんかあんまりしてないという子も多いということがあったんですけれども，実際にはその間全て臨時休校，部活もない，もう勉強するしかないということで，結果的にこの基礎固めが後に役に立ったのかなと思います。

さらに，休校中，ある意味でオンライン授業などが進められなかったということもありますが，まず進度で新しいところを進めるよりも基礎固めをしっかりしようよと，これが結果的には後で成果に結びついたかなと。ただし，これは去年，そういう言い方はよくないですけれども，ちょうどよかったんですね。あれ以上休校期間が長かったら，たぶんこの対応は取れません。そして，最終的に生徒も頑張りました。私たち教員も，もうへとへとです。もう結局土曜日も授業，祝日も授業，正月は 1 月 4 日からまた授業をやれと言われて，でも授業時数を何とか確保できたと。

実際の生徒の声をご紹介しようと思います。まず，先ほどの分散登校，今も実は都立は分散登校をやっていますけど，また違う形なんですけれども，先ほどご紹介した中だと，生徒はやっぱり第Ⅲ期はすごい嫌だったって言ってました。1 日置きに登校と。生活のリズムがぐちゃぐちゃになる。もうすごく疲れたと言っている生徒がいました。もう一つ，これはもう私たちの反省点ですけれども，どうしても授業が遅れる，授業が授業がって，どちらかというとそちらに目が行ってしまったんですが，終わった後，3 年生たちに聞いてみると，やっぱりいろんな不安感，ストレス，ですからそういったものをもっとケアする，または進路の情報などを発信する，そういった取組が不足していたなと思います。

また，当然生徒にとっては慣れないオンライン授業，つらい部分もあったようです。特にやっぱり生徒が言っていたのは家庭の環境ですね。ある生徒は，家がそんなに広くない，広くないのにお父さんまでテレワークとかで家にいると。そうすると，家族の前でオンラインで，例えば Zoom で授業をやれ，それはすごく自分にとってはストレスだったというふうに言ってました。

逆にオンデマンド型の授業というものはすごくよかったよと言ってくれた生徒がいました。必要に応じて，例えば 1.2 倍速とか早回しもできるし，場合によっては繰り返し学習もできるし。

そんな中で，「ああ，そうなのか」と思ったのは，どうしても私たちはコロナ禍のマイナスの要素ばかりを話しますけれども，生徒たちに聞き取ってみると，「いや先生，結局行事もなかった，部活もなかった。でも，そんな中でクラスの絆とか，戸山高校の生徒であるっていうことのアイデンティティーとか，ふだんあんまり考えてみなかったけど，今回のこのコロナ禍で考えることができた」と，そんなふうに話してくれた生徒もいます。なるほど，そういう意味では貴重な体験になった，そんなふうに言える高校生，すばらしいなと私なんかは思ってしまいました。

さあ，「最後に」です。このお話をいただいて，資料を作っているときには，もう二度とこんなコロナのことは嫌だな，分散登校とかやりたくないななんて思ってましたが，残念ながら東京はまた緊急事態宣言，分散登校が続いています。4 月の 26 日，27 日，28 日は分散登校。さらには，4 月の 30 日，5 月の 6 日，7 日は知事のほうで人流を止めるんだということで，全都立高校，生徒も教職員も全員在宅，テレワークでオンライン授業をやりなさいと。私は生まれて初めて家から家族の前でオンラインで授業をやりました。現在も分散登校が続いています。どういう形でこの後やっていくのか，早く終わってはほしいですけれども，まだしばらくこのような形，続いていきそうです。逆に，こんなときですからこそ，ぜひたくさんの学校の先生方，多くの皆様で情報を共有し，連携することが大事なのかなと。ですから，ぜひ今日ご参加の先生方にご助言，ご指導をいただきたいと，そんなふうに思っております。

また，今回このような機会をくださいました東北大学の皆様，さらには関係の皆様に心から感謝を申し上げます。私からのご説明は以上となります。本日はありがとうございました。

（拍手）

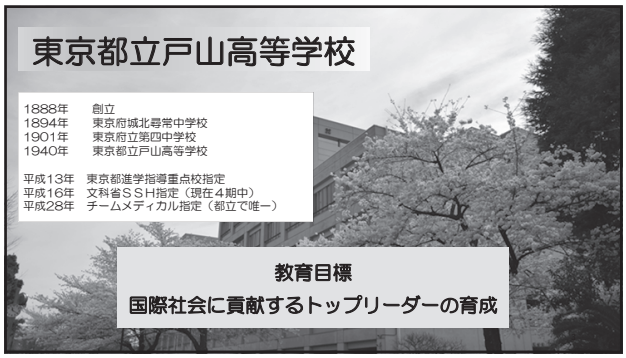
船橋伸一特命教授（司会）：

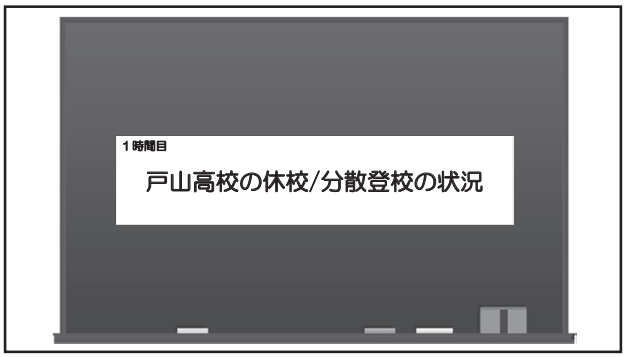
近藤先生，ありがとうございました。ご質問等につきましては、ウェブ上での入力をお願いいたします。

現状報告　近藤明夫（戸山高等学校）

臨時休校・分散登校の下での「学習の遅れ」の回復

東京都立戸山高等学校主幹教諭
進路主任　近藤明夫





令和２年３月
- 3月2日から春季休業期間終了まで、臨時休校となる
- 学年末考査の開始を予定していたが、実施できず。
- 3月24日のみ登校させて、修了式

令和２年４月
- 4月6日始業式のみ行い、その直後から臨時休校
- 入学式も実施できない（１年生と担任は顔を合わせていない）状況で、4月8日～5月6日まで臨時休校（登校日の設定はできない）

令和２年５月
- 緊急事態宣言の延長に伴い、臨時休校は5月26日まで続く（授業日数：38日を失う）
- 27～29日：分散登校Ⅰ期実施（学年別に1日ずつ登校。再開の準備）

令和２年６月
- 1～13日　分散登校Ⅱ実施
- 14～27日　分散登校Ⅲ期実施（詳細は次のスライド）

5

【分散登校Ⅱ期】
- 登校する人数の抑制 → 登校するのは２つの学年
- 教室の人数の抑制 → 登校を午前と午後で分け、教室の人数を半分にする

☆：偶数
★：奇数

曜日	学年	授業時間							
		1	2	3	4	5	6	7	8
月	1・3	☆月1	☆月2	☆月3	☆月4	★月1	★月2	★月3	★月4
	2	自宅学習							
火	2・3	☆火1	☆火2	☆火3	☆火4	★火1	★火2	★火3	★火4
	1	自宅学習							
水	1・2	★水1	★水2	★水3	★水4	☆水1	☆水2	☆水3	☆水4
	3	自宅学習							
木	1・3	★木1	★木2	★木3	★木4	☆木1	☆木2	☆木3	☆木4
	2	自宅学習							
金	1・2	☆金1	☆金2	☆金3	☆金4	★金1	★金2	★金3	★金4
	3	自宅学習							
土	2・3	★土1	★土2	★土3	★土4	☆土1	☆土2	☆土3	☆土4
	1	自宅学習							

6

現状報告　近藤明夫（戸山高等学校）

【分散登校Ⅲ期】
・当校は３学年とも登校可
・教室の人数の抑制 → 半分ずつ登校させ、教室の人数を半分にする

☆：偶数
★：奇数

曜日	学年	授業時間					
		1	2	3	4	5	6
月	全	☆	☆	☆	☆	☆	☆
火	全	★	★	★	★	★	★
水	全	☆	☆	☆	☆	☆	☆
木	全	★	★	★	★	★	★
金	全	☆	☆	☆	☆	☆	☆
土	全	★	★	★	★		

7

2時間目

「学習の遅れ」への対応

8

【休校・分散登校中】

第１クール（３月から春休み）
・新２年生：英数国が新ペースでの課題を3月24日に配布
・新３年生：英数国に加え、3年次の選択科目の担当ごとに 新ペースでの学習の指示

第２クール（４月）
・4月3日、都立戸山高校の高橋先生に来校いただき、Zoom活用の研究会を実施
・オンラインはあまり進ます、新ペースの指示が多かった。

第３クール（GW前後）
・Classiを活用した連絡体制を基本とするが、慣れないこともあり、やや混乱
・オンラインの活用に向けた動きが本格化

第４クール（GW明け）
・Zoomでインタラクティブな形で、HRや一部の授業が行われる
・Youtubeに、オンデマンド型の授業をアップ
・Classiを使ったｗｅｂテスト配信やアンケート機能での質問のやり取り

第５クール（分散登校中）
・３年生を中心に、進度の遅れを取戻すため、オンデマンド型の補講教材を発信
・全体は登校時を利用した新ペースの課題が増える傾向に戻る。

9

【学校再開後】

授業時数の回復

土曜授業の実施
当初予定は年間20回
→ 再開後ほぼすべての土曜に実施

祝日の授業
毎の日や秋分の日など祝日にも授業を実施

休業期間の短縮
夏季休業は8月9日から23日
冬季休業は12月26日から1月3日

行事の中止に伴う授業日の増加
文化祭や宿泊行事などの中止により、授業日が増加

これらにより、
12月にはほぼ例年並みの授業数を回復できた。

10

3時間目

受験結果と生徒の声

【受験結果】

志望動向
・指定校など学校推薦型や総合型選抜
→ほぼ例年なみ。指定校は12→9とやや減少
・志望校の変化
→難関大への志望者数は、2年2月模試から3年共通テストプレ模試までほぼ変化なし

共通テスト
・平均点
5教科型文系　82名受験　平均約700（前年比約20点UP）
5教科型理系 164名受験　平均約690（前年比約18点up）

合格数
・国公立大　145名合格（前年比+6）

＊現役のみ

	北大	東北	東大	一橋	東工	名大	京都	大阪	九州	医学
今春	8	6	8	8	9	1	2	3	1	6
前年	6	6	9	7	4	1	5	1	0	5

12

現状報告　近藤明夫（戸山高等学校）

【受験結果の分析】

新テスト，コロナ禍などあったが、
志望も下がることなく、結果も前年より良かった

① 例年：3年の春→部活動などに熱中し、勉強の開始が６月以降になる生徒が多い

⬇

臨時休校・部活動の停止により、自学自習の時間が取れた
→ 基礎固めがしっかりできた。（これが共通テスト、国立２次対策のペースを作った）

② 休校中は「進度の確保」よりも「既習事項の復習」に足場を置いたことが、
夏以降の学習につながった。
（ただし、あれ以上休校期間が長いとこの作戦では対応できなかった）

③ 学校再開後は、授業時数の回復につとめ、結果的には例年通りの授業時数を確保できた。

13

【生徒の声】

色んなタイプの登校日があったが、分散登校Ⅲ期の隔日は生活のペースが乱れ、一番疲れたし、学習も進まなかった。

塾に行っている人たちは、学習が進んでいるのかなぁ、と不安になることもあった。
教科の学習だけに限らず、進路情報やストレスの解消方法などの発信が欲しかった。

休校中の家庭の環境（経済格差）が大きいと思った。
家族の前でのZoomが一番ストレスになった。

オンデマンド型の学習教材は、自己のペースに合わせて活用
（時に早回し）できるし、繰り返し見られて良かった。

クラスの絆、戸山高校の生徒であるアイデンティティについて、考える機会になった。
「学びの遅れ」とは別の意味で、貴重な体験をしたと思っている。

14

こんな経験はもうしたくないなぁ。と思いつつ、
今回のフォーラムの準備をする中、
都立高校では4月26・27・28日が分散登校。
4月30日・5月6日・7日は生徒も教職員も全員、在宅でのリモート授業。

まだしばらくの間、このような経験が積み増していかれるようです。
困難な中だからこそ、学校間の連携、情報の共有が大切だと思います。

ぜひ、ご助言やご指導をお願いいたします。

また、
このような機会をくださった東北大学様や関係の皆さまに感謝いたします。

16

ご清聴ありがとうございました

17

現状報告２：オンラインの現場から
―Web 授業のメリット・デメリット―

須磨学園高等学校
多田　鉄人　教諭

［講師紹介］

船橋伸一特命教授（司会）：

引き続きまして，現状報告 2「オンラインの現場から－Web 授業のメリット・デメリット－」，須磨学園高等学校教諭，多田鉄人先生，よろしくお願いいたします。

（拍手）

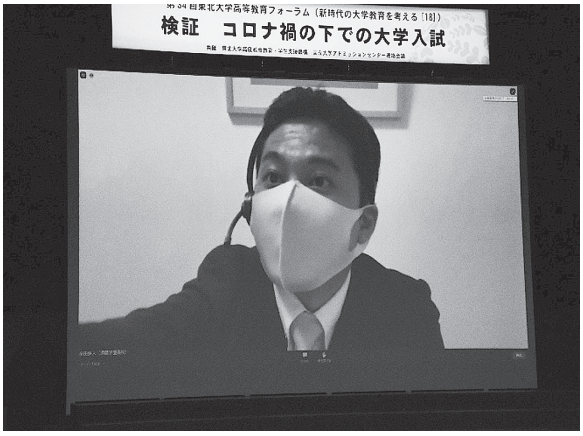
多田鉄人教諭：

ご紹介にあずかりました須磨学園高等学校の多田と申します。よろしくお願いいたします。

申し訳ありません，先ほどの東北大学の先生のほうからお電話をいただきまして，二つのアカウントで入ってますよということなんですが，すみません，実は学校支給のパソコンのほうにカメラがついていなくて，今これ外付けのカメラ，別の iPad でカメラとして Zoom に参加させてもらっています。で，パソコンのほうでパワーポイントの共有のほうをさせていただこうと思います。この私の講演が終わりましたら，パソコンのほうはすぐ抜けますので，この時間までご容赦いただければと思います。申し訳ありません。

それでは，早速始めさせていただきたいと思います。須磨学園高校の多田です。改めまして「オンラインの現場から」ということで，Web 授業のメリットとデメリットを僭越ながらお話しさせていただければと思います。

先ほど近藤先生のほうから，須磨学園は何かもうすごいウェブやってんじゃないのみたいな感じのお話をいただいたんですけれども，



これにはいろいろ理由がございます。まず，本校の学園長に当たる方が西和彦先生でいらっしゃいまして，ASCII の創業者の先生に当たります。また，マイクロソフト社で働いていたというような実績もございまして，本校はコロナとか何だとかそんなことは関係なしに，そもそもかなり ICT の教育のほうに力を入れている学校でございます。そんな関係で，生徒は全員一人 1 台ずつのスマートフォンとパソコンを学校入学時に買ってもらうことになっています。教員のほうも，全員同じスマートフォンを支給されていますし，パソコンも全員同じパソコンを学校のほうから支給されています。

そんな中で始まったオンラインなんですが，本校における新型コロナとの戦いの歴史，私昨年度まで高校 3 年生を担当しておりましたので，高校 3 年生がどうだったかということなんですが，2020 年 3 月 3 日から 14 日まで，この期間は兵庫県知事，井戸敏三さんのほうから，もうとにかく一斉休校だということで，学校に来ることができない，自習のみの期間

だったんです。ですから，休校すなわちオンラインというわけではなくて，当初 2 週間ほどは何もできなかったというのが現実のところです。ですけれども，もう 3 月も後半になってまいりまして，このまま授業がずっとできないというのは困るなということで，録画を撮って配信しようということで現場のほうでは試みておりまして，そこではマイクロソフトのドリームであったりとか YouTube などを活用して，録画の配信のほうを行っておりました。ちなみに，すみません，生徒も教職員も全員 Office365 のアカウントを持っておりまして，Teams や Forms，Word などといったものを一通り全員使いこなせるというか，アプリケーションとしてアクセスが随時可能だという状態にあります。

そんな中，揚々と「これは何とかなるんじゃないか」ということで，3 年生はやっていたんですが，忘れもしません，30 日の職員会議で学園長の西和彦先生が「録画ではダメだ」と。何でかって言ったら，それは双方向じゃないからだと。双方向でやるには，今経済産業省が推している Zoom というのを使ってやるしかないだろうということで，「明日から録画をやめて，全員 Zoom でやれ」というふうになったんですね。でも，現場は正直大混乱でした。何にもデバイスが揃ってないわけですから，どうやってやるんやろうと思っていたんですが，やらざるを得ないと。で，実際やりました。

4 月の入学式や始業式は，こちらは YouTube でオンライン配信したんですが，緊急事態宣言下はずっと 5 月 23 日までライブ配信を行っていました。そのときは，そんなにデバイスが揃ってないので，最初はみんなスマートフォンで始めたんです。支給されているスマートフォンに Zoom をインストールして，それを教室で机とか椅子とかをガチャガチャガチャガチャ組み立てて，こうやったら画角がいいんじゃないかとかいうことをみんなで工夫しながら，それを映して，「みんな聞こえてるかー！」みたいな感じでやっていったと。そんな感じでございます。

そろそろ Zoom のライブ配信も慣れてきたかなというところで緊急事態宣言のほうが終了になりまして，そこからは分散登校といった形になりました。先ほどの近藤先生の学校でも同様なんだなというふうに思いましたが，今週は週 1 日だけ登校しましょう，来週は週 2 日間登校しましょう，その次の週は 3 日間登校しましょうというような形で，少しずつ少しずつ対面授業に切り替えていったというような形になっています。

その後は，6 月 22 日から 3 月 11 日までハイブリッド登校といたしまして，もしかしたらまたいつこういったオンラインが必要とされる状況が来るかもしれないといって，対面に切り替えられた後，全部を対面のみにしてしまうのではなくて，1 日だけウェブ，そのほかの週 5 日間は対面ということで，確かに本校はいち早く Web 授業，オンライン授業のほうに取組んでいったんですが，昨年度中ずっとオンラインだったというわけではないということはお知りおきいただければと思います。

ようやくオンラインともおさらばできるのかなと思っていたら，先月の 4 月 25 日に緊急事態宣言がまた出されまして，別に休校しろとかオンラインでやれとかいう指示は来ていないんですけれども，ここはということで，実は 1 か月ほど，現在もフルオンラインで本校は運用しております。

コロナで変化した受験勉強ということなんですけれども，本校はとにかく「学びを止めない」というスローガンの下，オンライン授業に取組んでまいりました。高 3 の 4 月から Web 授業になって，授業の仕方は教科担当者ごとで異なり，講義時間を減らして演習時間を増やして，課題の量を増やして，受けられる模試は全部受けたというふうになっていま

す。それの理由であるとか結果であるとかなんですけれども，確かに「学びを止めない」というスローガンの下，高 3 の 4 月から Web 授業，オンライン授業をやってきたんですけれども，真の意味でといいますか，受験に耐え得るような学力を養成，それだけで養成できたかと言われると，やはり大変難しかったかなと思います。定着はよくなくて，結局対面でやり直したような部分も多いですね。

授業の仕方が異なったというのは，淡々と進められる先生や，あるいはここぞとばかりに実験を映像で見せられた先生などもいるんですが，そもそも手持ちのデバイスが皆違うので，黒板をそのまま映すという先生もいれば，せっかくだからここはパワーポイントを入念に作って，それを見せていこうとか，あるいはもう自分で iPad 持ってるからそれを画面共有してやっていくのが一番いいかなみたいなんで，いろいろな先生がいろいろな工夫をして，やっていきました。

現在のフルオンラインの状況は，各教室に 1 台 iPad がありますので，大体全部で 40 台あるんですかね，もっとですね，60 台くらいを各教室に 1 台ずつ立てまして，大体それが去年の夏以降くらいに各教室のほうに導入されまして，今はそこでやっているという感じです。

三つ目の講義時間を減らして演習時間を増やした理由は，やはり一番は定着率，頭に残っていないなというのは，確認テストなりなんなりを見ていると，やっぱり出来が悪い，いつもに比べて定着していないなというのがよくわかりましたし，その上，やっぱり目への負担がかなりあるというのがどうしても解決できない問題として残っているのかなというふうに思います。本校は 7 時間授業なんですけど，間に 10 分，15 分休憩を挟むとはいえ，7 時間連続で動画を見続けるというのはやっぱりしんどいんです，目が。さすがにずーっと 7 時間しゃべりっぱなしはダメだろうということで，演習時間を増やすような工夫を行ったということです。課題の量を意図的に増やしましたのも，できるだけ受験生のペースメイクをしたかったから増やしたわけなんですが，提出をさせたりとか，どうやって添削をして返したろうというのは，課題に残っています。模試を全部受けたというのも，4 月の模試も 5 月の模試も全部やったんですね。それは先ほどの先生もおっしゃっていましたが，各家庭に郵送して，各生徒に Zoom でつないでもらって，こちらは Zoom を見ながら不正やってないかなと。100％防ぐのは無理だと思うんですけれども，時間を計って，「始めてください」「終わってください」などと言って，「今から返信用の封筒に宛名を書いてください」というようなところから全部指示して，やったというような感じです。

これは意図的にそこまでやったわけなんですが，学校は予定どおり動いているということをとにかく印象づけたかった。先行きの不安は私たちにもありましたが，それよりも生徒たちのほうに多かったかなと思うので，どんな状況下でもその計画していることをどんどんどんどん進めていくぞというようなことをアピールしたいために，やっていました。

高校 3 年生において，受験への見通しがどうなったかということですが，コロナによって入試が大きく変わることはきっとないだろうなと私は個人的には考えていました。一時は 9 月入学などがもてはやされたような時期もあったかとは思うんですけれども，現実的に考えてそれはやっぱり難しいんじゃないかななどと考えていました。ただ，新入試によって共通テストはこれは変わるだろうと。だけど，新入試によって二次試験まで変わることはそうないだろうというふうに考えていました。この辺が見通しですね。

あと，推薦はもう国公立で増えていくということはわかっていますので，どんどん活用していこうと。ですので，コロナと新入試の

ことを考えれば，いつもどおりプラスα共通テストの対策ということでいいんじゃないかというふうに思っていました。その「いつもどおり」をやるのがめちゃめちゃ難しいということなんですが，受験へはそのような見通しで進んでまいりました。

どのような変化があったのかというのは，ほかの予備校さんなどがやっているサイトなどを見ていただくのが早いかなと思いましたので，ここでは駿台の石原さんの記事をこちらにウェブとして挙げているんですが，要するにどうだったかというと，コロナによって入試は大学側では 6 つに変わったんですね。一つは「全然変わらなかった」と，もう一つは範囲を絞ったりとか，あるいは注釈をつけたりと。もう一つが「二次試験をしない」という選択，この三つだったということで，受験生にとってみればそう大きな影響ではなかったんじゃないかなというふうに思います。

一方で，地方の，地方という言い方がいいかどうかわかりませんが，その辺の倍率がどんどん高くなった。要するにコロナが蔓延している地域への受験を控えるような動きというのが全国的にあった。それから，学部選びですね。国際系とか外国語系とかは倍率が低くなったとかというようなことがこの石原さんの振り返りから見ていました。

それと，受験生にとって実はかなり大きな痛手だったとそこでおっしゃられているのは，オープンキャンパスが対面によって実施できないというのは，情報量という意味においては受験生にとってはやっぱりかなりマイナスに響いたのではないかというふうに石原さん，駿台の方は振り返ってらっしゃいます。本校においても，実際にやっぱり各大学が現地でのオープンキャンパスというのをやれない中で，ウェブのオープンキャンパスにもいろいろ取組んでいた学校さんがあるというのはもちろん知っていますし，それを活用させてもらったんですけれども，じゃあ現地に行くほどの情報量があったかとか，そもそもウェブでオープンキャンパスに参加したかと言われると，例年に比べればやっぱりものすごい少なかったというふうに思います。

推薦のほうは，要項が各大学さんで出るのがどうしても遅くなるのは仕方ないとは思うんですけれども，それでも高校 3 年生，400 人中 200 人くらいが何らかの国公立推薦を受験しました。これは学校型推薦のみだけではなくて総合型選抜，いわゆる AO のほうも入っておりますので，それにしてもかなりたくさんの生徒が推薦を活用したなというふうに思います。

コロナによって振り回されている，新入試によって振り回されているというか，もう大変になるというのはもうわかっていたので，とにかく我々としてはどんと構えようと。調査書も早く作ろうじゃないかというような感じで，できるだけ周りに振り回されないように，生徒に不安を与えないようにということで，やっていました。

ここまでが受験の見通しだったり，コロナが与えた受験勉強への影響，これは現場からの主観ということでした。ここからはアンケートの結果になります。大学のほうがきっとオンライン授業期間というのは長いと思いますし，似たようなアンケートというのはやってらっしゃると思いますので，釈迦に説法みたいな形にはなると思うんですけれども，生徒アンケート，2020 年 7 月 31 日に実施いたしました。有効回答数 1,631 です。

生徒に聞いてみました。「オンライン授業のメリットは何ですか」と。実に 70～80%の生徒が，1,261 名，1,105 名の生徒が「通学時間がなく，それを活用できる」という，当然だよねというようなところを回答しています。本校は山の上にあるので，駅で降りてから 20 分間くらい，ちょっと登山をするような形，坂も多いし階段も多いんですが，その辺に関する体力を使わないで済むという切実な意見

をもらっています。それから，「周りを気にせずに落ち着いてやれる」というのが 40%くらい，637 名。そして 7 番，「画面を共有してもらえるので，手元で先生がどこのことをしゃべっているのかというのがわかりやすい」というのが 667 名，40%程度の生徒がこれらがメリットであるというふうに答えています。

一方で，「デメリットは何だと思いますか」に対して，これは結構意見が分かれているんですが，一番多いのは 4 番の「体を動かさないから体力が衰える」ということ，そして 8 番の「目や耳に負担がかかる」ということ，ここら辺が 50%～60%くらいの生徒がデメリットだと答えているところです。あと，やっぱり 2 番の「周囲の様子がわからなくて勉強のペースがつかめない」というのが 40%くらいの生徒がそういうふうに答えていましたし，9 番，これは意外と大事なものですが，「友人や先生との何気ない会話の機会がない」というのをデメリットだと捉えている生徒が 750 名，40%強ですね，いました。

オンラインが始まった頃に比べての通信環境です。「もともと何の問題もなかった」，3 番と答えている生徒が 80%ですが，残り 20%くらいの生徒のうち 10%くらいはルーターを新たに購入したり，あるいは通信会社を変更したりして，改善をしたと。残りの 10%くらい，184 名がまだ何もできていないという状態であったと。これは昨年の 7 月末時点の話ですが，こうであるということでした。「オンライン授業が始まった頃に比べて視聴機材が充実し，受講環境がよくなりましたか」という問いに対しては，2 番，3 番，4 番の「PC に変更して見やすくなった」，当初スマホで見ていた生徒もいたということで，「スマホから PC に変更して見やすくなった」「大画面の PC を使うようになって見やすくなった」とか「テレビにつなぐことによって見やすくなった」とかと答えた生徒が 37%程度います。「ヘッドホン，イヤホンで音が聞き取りやすくなった」のが 318 名，それから「マイクを使い始めてコミュニケーションが取りやすくなった」というのが 61 名いました。そんな感じでございます。

ここからは分散登校がどんな感じだったかという話で，「登校日が増えることで心の変化はありましたか」という問いに対しては，1 番「もっと通学したい」，2 番「友達と会えたことで気が晴れた」，これが 1,000 人を超えていますので，合わせて 87%ぐらいの生徒がやっぱり対面で一番期待するというか，心の変化といいますか，友達と会えるというのがやっぱり彼らにとってものすごい大きな影響なんだなというふうに感じます。さらに 6 番，7 番あたりも見どころです。「通学しないことに慣れてしまったので，通学することが逆に億劫に感じる」であるとか，来たら来たで今度これ行事やるんかみたいな，旅行やるんかみたいなので，どうするんやろうという先の不安というのが目に見えてきたというのが挙げられていました。

ですので，分散登校の 1 週目，2 週目あたり，週 1，週 2 登校のあたりは，実は私たちの学校では登校はさせたんですけれども，全く授業はせずに，むしろ雑談をするということに心血を注いだと言ったら変かもしれないですけれども，周りが見えないことによるストレスがめちゃくちゃあるということは，Zoom を通して個人面談をしている中でもちょっとわかっていましたので，できれば登校をするんであれば友達と話をしてほしい，先生と面と向かって会話をしてほしいということで，密を避けるために，体育館に机と椅子を並べて，通常の面積の倍から 3 倍くらいを取って，できるだけ 2m以上離れてというのを保った上で，どうやったら会話ができるんかなみたいなのを考えて，やっていました。

「登校する日とオンライン授業の日で学習時間や学習習慣への影響があるか」という問いに対しては，2 番の 730 名が「通学時間が

かかる分だけ減ってしまう」と答えています。

それから，「登校に際して今まで以上に学校に期待することは何ですか」ということに対しては，8番の「十分な換気」というのが787名に上りました。7月30日時点での回答ですので，ちょうどエアコンをガンガン回しているときです。ちょっと油断すると，やっぱり生徒たちはドアを閉めようとすると。ですから，私たちが口を酸っぱくして「ドアをちょっと開けなさい。10センチ以上開けるんだよ」というようなことで，換気指導に当たっていました。

生徒のアンケートからわかることですが，いくら本校がオンライン授業に積極的に取組んでいるといっても，やはりウェブで集中できない生徒876名，できる生徒637名ということで，向き不向きが生徒の側にあるというのは，これは絶対的な事実だと思います。それと，ウェブの通信環境に問題がある生徒が400名，目や耳に負担があるという生徒が924名おりますので，改善の余地はあるかなというふうに思います。これらの生徒については，ある程度密を避けて，分散でということが可能なのであれば登校させたほうがいいんちゃうかなと個人的には思います。

コロナでの先行きが不安だと答えた生徒は509名います。これはやっぱり最も大きい不安だったんではないかなと思います。この期間中，バタバタもバタバタで，来週の時間割がわからないとか，下手すると明日の時間割がわからないとかいうようなこともざらでした。それはそれは生徒たちは不安だっただろうなというふうに思います。「友達と会えて気が晴れた」1,006名，「何気ない会話がないことがデメリットだった」といった生徒が750名おりますので，人と人とのつながりをオンラインでどう作っていくかということはこれからものすごく課題になるかなと思います。

個人的な意見を言わせていただくのであれば，週1回くらいは半分くらいの生徒が登校して，なんも授業なんかせんと半日ぐらい雑談して帰るというのでもいいんじゃないかなというふうに思いますが，この辺はどのように解決していくべきかということはぜひお知恵をお借りしたいなというふうに思います。

教員のほうにもアンケートを取っております。8月に1回取りました。約100名程度の本校の教員が対象です。オンライン授業のメリット（教員側）は何でしたかということで，一番はやっぱり生徒の安全が確保されるということです。2番目には，全クラス一斉に授業ができるからコマが減るとか，ありますし，実はオンライン授業にかまけてと言うとあれなんですが，警報など登校できない日にも本校ではオンライン授業を現在実施しています。警報中にそんなことしてていいのかというのはありますが，もちろん安全を確保した上でということですね，そういったところにも活用できるというのは，何か一つの未来なのではないかなというふうに思います。

それと，「リアルタイムでの意見共有がしやすい」，それからプリントを印刷するコストがかなり，紙の節約になるのはこちら側のメリットではあったということですね。あと，「パワーポイントやPDFなど，あらかじめ板書を準備できるので，授業の時間が短縮できる」というところがメリットなのかなというふうに思います。その二つ下ですね，「説明する際の効率が板書よりもよい」，手元で見れるからということと，その下ですね，「不登校傾向の生徒が授業を受けやすいようだった」，これは非常に大きなメリットの一つなのではないかなというふうに思います。

一方，デメリットは何なのかということですが，「対面なので緊張感がない。知識の定着度合いが悪い」，この意見が圧倒的に多いです。もちろん体育，球技とかはできないですし，ネットのトラブルで参加できないという，どうしても家庭環境に依存する問題というのが，こちらのほうからは積極的には解決しにくい

という部分があります。それと，その下の赤のところですね，やっぱり生徒間の何気ない会話，何気ない話は，難しいなと，これを大事にしたいなと思います。あと，デメリットとして一番下のところです，「授業準備にも答案のチェックにも，対面授業時の少なくとも4〜5 倍の時間がかかる」ということで，これはやっぱりどうにかしないといけない問題だなというふうに感じます。

オンライン授業を行う上で最も意識した点は何ですかということですが，せっかくオンライン授業をやっているのだから，一方通行にならないように，双方向にできるだけやりたいねということで，やっています。あと，とにかく時間を短くする，50 分の授業時間ですけれども，50 分間しゃべり続けるんじゃなくて，せいぜいこっちがしゃべっているのは15分，20分ぐらいにしたほうがいいんじゃないかみたいな，各先生方が意識してやっている点でした。

4 番目，オンライン授業を続ける中で最も苦労した点ですが，資料作り，あるいはトラブルの対処，それから何度も何度も同じことをやらないと，定着するまでやるというのは非常に苦労しましたということでした。

5 番目ですね，最も改善できた点ですが，夏以降，iPad が各教室に導入されましたので，それによって音声，画質が安定したということです。あとは，パワーポイントを使っているので，情報量を増やすことができるといったものも改善できたという点に挙げられています。

Q6 ですね，自宅からのオンライン授業，教員側も在宅ワークをやりまして，自宅からもやっていましたが，それのメリットは「教員側が感染リスクを下げられる」と，それからスライド共有タイプの授業なんかはもう全然家からでもできますよというような意見がありましたが，一方で自宅からのオンライン授業で困った点というのはかなりありまして，「学年の立ち回りが把握しにくく，何か業務があった際に反応しにくい」とか，「授業の実施そのものでは特になかったが，些細な情報のやり取りがない」と。トラブル発生時に限らず何か一人孤独感，不安感みたいなものがあると。何か忘れてたらどうしようかな，もしつながらなかったらどうしようかなみたいなのがあったということで，ここではやはり職員室における打ち合わせもそうなんですが，ふだんの何気ない先生方同士の会話であるとか，先生方同士の雑談みたいなものがやはりすごく，仕事に影響するといったらあれですけど，大事なポイントなんだろうなというふうに感じました。それまでは全然，そこまで意識するようなことはなかったですけれども，ふだんの先生方の何気ない会話が耳に入ってこないというのは，すごくやりにくいんだなというふうに感じました。

Q8 は，在宅勤務でオンライン授業を配信する際に自宅で必要だと思われる備品です。別にこれは全部が全部必要だというわけじゃないんですが，せいぜい iPad とタブレット用のペンと，あと Wi-Fi 環境なんかがあったらもうそれで十分だと思いますが，クオリティーを上げたいのであればビデオカメラや三脚，キャプチャーボードなどがあるといいですよというような話であります。

教員アンケートからわかることは，やっぱり何を取っても授業内容を定着させるのはかなり難しいということで，何度も繰り返したりとか，対面で確認することが必要だということです。機器，環境の不安が 5 割もありますので，不得手な教員のフォローであったりとか，設備の拡充というのは今からどんどんやっていかなきゃいけないかなと思います。

目の負担の軽減方法ですね，授業時間を減らしたりとか，あるいはやっぱり黒板を見るというのはかなりつらいようなので，できれば iPad などの機能を活用したほうがよいのかなというふうに思います。

「友達と会えない，周りの様子がわからない」は，先ほど申し上げましたように「話すだけの日」があったほうがいいんじゃないかなというふうには思っています。

本校ではこれからどのような展望を持っているかということなんですけれども，新型コロナだけが脅威ではありませんし，脅威に対応することだけが別に目的でもないかなと思います。学校の新たな価値をつくるため，例えば先ほどメリットのところに出ていましたが，不登校生徒が登校しやすいように見えるとか，別に特に災害でもないのに警報が出ているというようなときに授業を提供してあげる機会を，気軽にやれるように，いつでも「全然できますよ」ぐらいの感じで，「今からじゃあオンラインやりましょうか」みたいな感じでいけるような心の準備を我々が持っていくということがすごく大事だと思いますし，オンライン授業では学校教職員，生徒だけでなくて保護者の方にもかなり迷惑をかけてしまいますので，保護者の方にも「うちはいつでもオンラインをやるよ」と，「急にでもオンラインをやるよ」ぐらいのことを準備をしておいていただくというのが一番大事なんじゃないかなと思います。そうしたことがこれからの学校の新たな価値の創造につながるのではないかなというふうに考えています。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

（拍手）

船橋伸一特命教授（司会）：

多田先生，ありがとうございました。ご質問等につきましては，ウェブ上での入力をお願いいたします。

現状報告　多田鉄人（須磨学園高等学校）

オンラインの現場から

－Web授業のメリット・デメリット－

2021年5月17日（月）
須磨学園高等学校　多田鉄人

本校における新型コロナとの戦いの歴史（高3学年）

- 3月3日~14日（一斉休校）➡自習のみ
- 3月16日～30日（春休み）➡録画配信（Microsoft Stream、Youtube）
- 4月1日～5月23日（緊急事態宣言）➡ライブ配信（Zoom）
- 5月25日～6月20日（宣言解除）➡分散登校（０対１０～８対２）
- 6月22日～3月11日　➡ハイブリッド登校（８対２～１０対０）

2

コロナで変化した受験勉強

- 高３の４月からWeb授業になり、学びは止まらなかった
- 授業の仕方は、教科担当者ごとで異なった
- 講義時間を減らし、演習時間を増やした
- 課題の量は増やした
- 受けられる模試はすべて受けた

3

コロナで変化した受験勉強

- 高３の４月からWeb授業になり、学びは止まらなかった
  ➡定着は良くなく、対面でやり直した部分も多い
- 授業の仕方は、教科担当者ごとで異なった
  ➡淡々と進める、演習中心にする、実験を映像で見せる
- 講義時間を減らし、演習時間を増やした
  ➡定着率と目への負担を考慮
- 課題の量は増やした
  ➡ペースメークをしたかった。提出・添削は課題となった
- 計画していた模試はすべて受けた
  ➡「学校は予定通り動いている」ことを印象付けたかった

4

受験への見通し

- コロナによって入試が大きく変わることはないだろう
- 新入試によって共通テストは変わるだろう
- 新入試によって２次試験が変わることはないだろう
- 推薦は活用しよう
- いつも通り＋αでいこう

5

受験への見通し

- コロナによって入試が大きく変わることはないだろう
- 新入試によって共通テストは変わるだろう
- 新入試によって２次試験が変わることはないだろう
  ➡学部選びに変化？異例続きだった大学入試を駿台・石原さんが振り返る
  https://www.asahi.com/edua/article/14273672
- 推薦は活用しよう
  ➡４００人中２００人ほどが、国公立推薦を受験
- いつも通り＋αでいこう
  ➡振り回されないように。去年の実績を超えられるように

6

現状報告　多田鉄人（須磨学園高等学校）

ここからはアンケートの結果

7

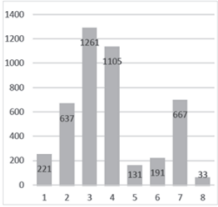
生徒アンケート結果

- 実施日　2020年7月31日
- 実施対象　1696名（本校生徒全員）
- 有効回答　1631名

8

通学での対面授業の回数が増えてきました。対面とオンラインの両方の授業を併用していることで感じる、オンライン授業のメリットは何だと思いますか。（複数回答可）

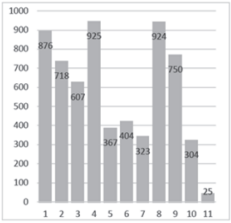
1	集中できること	221
2	周囲の環境を気にせず落ち着いて取り組めること	637
3	通学の時間がなく時間を有効活用できること	1261
4	通学する体力を使わないで済むこと	1105
5	学校よりも学習環境が良いこと	131
6	視覚効果を活かした分かりやすい授業が受けられること	191
7	資料を画面共有してもらえることで、ラインを引く場所などが分かりやすいこと	667
8	その他	33



9

逆に、オンライン授業のデメリットは何だと思いますか。（複数回答可）

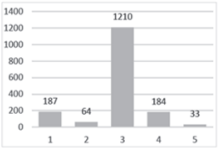
1	自宅だと集中できないこと	876
2	周囲の様子が分からず勉強のペースが掴みづらいこと	718
3	通学しないとオンとオフの切り替えが難しいこと	607
4	体を動かさないので体力が衰えること	925
5	学校よりも学習環境が悪いこと	367
6	板書が見えにくいこと	404
7	音が聞こえにくいこと	323
8	目や耳に負担がかかること	924
9	友人や先生との何気ない会話の機会がないこと	750
10	授業後の質問がしにくいこと	304
11	その他	25



10

オンライン授業が始まった頃に比べて、家庭での通信環境は改善されていますか。（複数回答可）

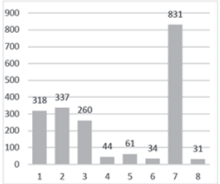
1	ルーターを新たに購入し、通信環境は改善された	187
2	通信事業会社を変更した（または新たに契約した）ため、通信環境は改善された	64
3	初めから改善の必要はなかった	1210
4	改善の必要があると感じるが、何も出来て	184
5	その他	33



11

オンライン授業が始まった頃に比べて、視聴機材が充実し、受講環境が良くなりましたか。（複数回答可）

1	ヘッドホンやイヤホンを使用し始めて音が聴きやすくなった。	318
2	スマホからPCに変更して見やすくなった	337
3	大画面のPCを使うようになって見やすくなった	260
4	テレビで見るようになって見やすくなった	44
5	マイクを使用し始めてコミュニケーションがとりやすくなった	61
6	Webカメラを使用し始めて楽になった	34
7	初めから充実していた	831
8	その他	31

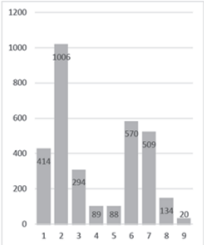


12

現状報告　多田鉄人（須磨学園高等学校）

登校日が増えることで、心の変化はありましたか。（複数回答可）

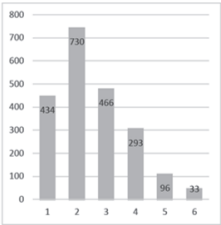
1	もっとたくさん通学したいという気持ちが高まった	414
2	友達と会えたことで気が晴れた	1006
3	周囲の目を気にするようになり気疲れする	294
4	友達と離れた期間が長く、今まで通り接することができない	89
5	家族と接する機会や会話が減ってしまった	88
6	通学しないことに慣れてしまったので、逆に通学することが億劫に感じる	570
7	行事や研修旅行がどうなるのかという不安が高まった	509
8	特にない	134
9	その他	20



13

登校する日と、オンライン授業のみの日で、学習時間や学習習慣への影響はありますか。（複数回答可）

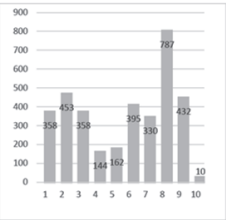
1	登校日でもオンライン授業のみの日でも学習時間には影響がない	434
2	登校日は通学時間の分だけ学習時間が減ってしまう	730
3	登校することで気分転換となり、登校日の方が集中して学習ができる	466
4	オンライン授業のみの日の方が集中して自宅学習ができる	293
5	自宅での学習習慣が定着しており、登校日でも自宅学習の時間が増えた	96
6	その他	33



14

安心して登校するために、今まで以上に学校に期待することは何ですか。（複数回答可）

1	登下校時や休憩時間のマスク着用義務の徹底指導	358
2	登校時の手指消毒の指導	453
3	こまめな手指洗浄の指導	358
4	ハンカチの携行指導	144
5	大声での会話の自粛指導	162
6	「密」の回避対策および指導	395
7	生徒および教職員の健康管理	330
8	十分な換気	787
9	特にない	432
10	その他	10



15

生徒アンケートから分かること

- Webで集中できない876名・できる637名
  ➡向き不向きあり
- Webの通信環境に問題ある400名・目や耳に負担924名
  ➡改善の余地あり
- コロナで先行き不安509名
  ➡最も大きい不安(？)　「進路に影響(高3)」…約40％
- 友達と会えて気が晴れた1006名・何気ない会話がない750名
  ➡人と人とのつながりを、オンラインでどう作るか

16

教員アンケート結果

- 実施日　2020年8月3日
- 実施対象　約100名（本校教員）

17

Q1 オンライン授業のメリット（教員側）
生徒の安全が確保される。
教室のキャパが関係なくなるので、全クラス一斉授業を実施することができる。
警報など、登校できない日でも実施できること。
リアルタイムでの意見共有がしやすい。例えば生徒の意見をformsで集め、その授業中にフィードバック可能なので、関心の高いうちに扱うことができる。
プリントを印刷するコストがかからない。（生徒の負担にはなりますが）
パワーポイントやPDFなど、あらかじめ板書を準備できるので、授業時間の短縮になる。
人数や場所を問わず授業講座質問対応ができる。
画面を共有することで，図などを用いて説明する際の効率が板書よりもよい。
不登校傾向の生徒が授業を受けやすいようだった。
自分のあいている時間に録画をすることが可能である。
録画を残すことで、欠席者も後から映像を繰り返し見られる。

18

現状報告　多田鉄人（須磨学園高等学校）

Q2 オンライン授業のデメリット（教員側）

対面ならではの緊張感はないので、知識の定着度合いが悪い印象を受ける。

球技などの対面でしか実施できない種目もある。

ネットのトラブルで参加できないことがある。

インタラクティブな取り組みや，成績の評価対象となる確認テストの実施が難しい。

生徒の様子や反応を細かく見ることが難しい。

生徒が他の生徒と切磋琢磨しながらという面が難しい。休み時間に何気なく話すことでわからない問題への焦燥感や孤独感が軽減されるものだが、そのあたりが難しい。

意志や思いが伝わることに制限があり。

生徒のプライバシー。どうしても他の生徒の家の様子などが見えてしまう。

授業準備にも、答案のチェックにも、対面授業時の少なくとも４～５倍の準備時間がかかる。

19

Q3 オンライン授業を行う上で最も意識した点（教員側）

一方通行になっていないか、生徒に伝わっているかどうかを常に意識しながら行った。

生徒たちの交流（意見共有）。

画面上でもわかりやすい教材の作成。目が疲れないような教材の工夫。

１本の動画を最大15分程度までとしたり、板書の時間をカットしたりして、生徒の集中力を持続できるようにする点。

ゆっくり、丁寧にしゃべる。ポイントは復唱する。

字の大きさ、しゃべり方、カメラ目線など。

Q4 オンライン授業を続ける中で、最も苦労した点（教員側）

資料作り、機材の準備、動画編集などの授業準備。

当初はWeb授業の途中で起きたトラブルの対処の仕方がわからず困った。

わかったつもりをなくすために、何度も同じ単元のプリントを作成した。

20

Q5 オンライン授業の経験を重ねる中で、最も改善できたと点（教員側）

iPadを導入して音声・画質等が安定した。

パワーポイントの授業を実施していたので、生徒へ伝える手段が増えたこと。また対面授業になっても、その時々でより良い方を選択し、併用して授業を実施するようになったこと。

最初は黒板を用いて授業を行いましたが、iPadを用いて板書をする授業に変えました。見やすさが格段に上がったと思います。

スペースが限られているため、部屋の中で効率よく体を動かすプログラムを作ることができた点。

回数を重ねるごとに、生徒との双方向のやりとりができるようになってきました。

要点を整理して教えないと相手に伝わらないので、より扱う教材を掘り下げることが出来た。

Q6 自宅からのオンライン授業で良かった点（教員側）

教員が感染リスクを避けつつ、学校で実施するのと変わらない授業を実施できました。

スライド共有タイプの授業などは、自宅からでも学校からでもあまり変わりはありません。

21

Q7 自宅からのオンライン授業で困った点（教員側）

学年の立ち回りが把握しにくく、何か業務があった際に反応しにくかったこと。

授業の実施そのものでは特になかった。授業以外の時間では，わざわざ電話やオンラインミーティングをするほどでもないが知っておいた方がいい些細な情報のやりとりが，職員室での対面勤務と違ってできないことがやや不便だった。

トラブル発生時に限らず、つねに取り残されているのではないかという不安感がありました。きっとWi-Fi接続状態の悪い生徒はこういう気持ちだったんだな、としみじみ感じました。

職員室の先生と気軽に連絡を取ることができず、「何か忘れていたら」「もしつながらなかったら」という不安が常にありました。 生活との境界

家庭での環境音が流れてしましました。（インターホンのチャイム）

どこから配信するかという点と、大きな声だと周りに響いてしまうのでその調整が必要な点。ネット環境

オンライン授業に耐えうるWifi環境が整っていないこと。

黒板が無いので、黒板型の授業を実施していた自分としては家では撮影などが出来ないのが大きな問題であった。そのため、完全自宅勤務ではオンライン授業はやり切れなかった。

22

Q8 在宅勤務でオンライン授業を配信される場合に、自宅に必要だと思われる備品（教員側）

安定した強い回線。

学校のサーバーとつながるPC。

ipad、タブレット用のペン、ビデオカメラ、三脚、キャプチャーボード、ホワイトボード、マイク、スキャナ、スマホクリップ、スマホ三脚、ワイヤレスイヤホン、ワイヤレスイヤホンがうまくつながらなかったときのための有線イヤホン、教材のスペア、実験器具

23

教員アンケートから分かること

- 授業内容を定着させるのは困難
  - ➡何度も繰り返すことや、対面での確認が必要
- 機器と環境の不安が学校側にもある
  - ➡不得手な教員のフォロー、設備の拡充
- 目の負担の軽減方法（生徒）
  - ➡授業時間を減らす、iPadの機能を活用する
- 友達と会えない、周りの様子が分からない
  - ➡週1日程度、「友達と話すだけの日」作るか

24

これからの展望

新型コロナだけが脅威ではない。
脅威に対抗することだけが目的でもない。
学校の新たな価値を作るため、いつでもオンライン授業が可能なように学校、教職員、保護者、生徒が心の準備をしておくことが何より重要。

25

ご清聴ありがとうございました。

26

現状報告 3：大学入試における教員としての資質・能力の評価

横浜国立大学
鈴木　雅之　准教授

［講師紹介］

船橋伸一特命教授（司会）：

それでは，最後の現状報告となります。現状報告 3「大学入試における教員としての資質・能力の評価」，横浜国立大学准教授，鈴木雅之先生，よろしくお願いいたします。

（拍手）

鈴木雅之准教授：

皆様，こんにちは。横浜国立大学の鈴木雅之と申します。三人目の現状報告ということで，お疲れとは思いますけれども，どうぞよろしくお願いいたします。

私のほうからは，非常に風呂敷を広げ過ぎてしまったタイトルで恐れ多いのですが，「大学入試において教員としての資質・能力をどう評価するのか」という観点からお話をさせていただきたいと思います。

最初にご紹介いただきましたけれども，横浜国立大学というのは昨年度の 7 月 31 日に入学者選抜要項を公開した段階でキャンパスでの個別試験を取りやめるという決定をいたしました。このように，いち早く独自の対応を打ち出したことから，本日はお声がかかったというふうに認識しておりますけれども，私自身は教育心理学の教授・学習と呼ばれる分野の中でも，動機づけですとか学習意欲に関する研究をしておりまして，入試の専門家というわけではございません。また，昨年度の入試において，私が何かイニシアチブを取って対応について考えたというわけでもございませんので，当然当事者ではございますけれども，本日は第三者目線で現状報告をさせていただければと思います。また，本日の発表内容は，私個人の見解に基づくものでして，大学の公式見解ではございませんので，この点，ご留意くださいますようよろしくお願いいたします。

さて，「横浜国立大学は個別学力検査を取りやめる」という決定は，決して小さなインパクトではなかったかと思います。一方で，私が所属している教育学部では，従来のキャンパスでの試験と同等となるような代替措置を検討し，課題の提出を課したといったことはあまり知られていないように思います。こうした代替措置を取った背景には，教育学部のアドミッション・ポリシーがあります。本日は，横浜国立大学教育学部が昨年度に実施した入試の概要についてご紹介をさせていただきます。

本題に入る前ですけれども，横浜国立大学教育学部について簡単に紹介をさせていただきます。5 年前までは教育人間科学部でしたが，いわゆるゼロ免課程が廃止されまして，

2017 年に学校教育課程のみの教育学部に改編されております。また，今年度から教育組織がまた改編されておりまして，課程名称が学校教員養成課程に変更されております。この組織改編は，教職大学院とも連動してのものです。

課程名称からも明らかなように，本学の教育学部は教員養成を目的としております。このことは，アドミッション・ポリシーにも明記されております。本学教育学部では，学校教育に関心が高く，教員として子供の学びへの支援の方法を能動的かつ協働的に創造していこうとする強い熱意を有する学生を求めています。こうしたアドミッション・ポリシーに鑑みますと，筆記試験のみで選抜するということは適切とは言い難く，ましてや大学入学共通テストのみで選抜することは適切とは言えないかと思います。そのため，従来の試験と同等となるような代替措置が検討されました。

代替措置の内容についてご説明する前に，本学教育学部の入学者選抜の枠組みについて簡単にご説明いたします。

一般選抜以外に総合型選抜と学校推薦型選抜を実施しています。また，このスライドには載せてありませんけれども，帰国生徒選抜も実施しています。なお，一般選抜は前期日程のみでして，後期日程はありません。それから，学校推薦型選抜には地域枠と全国枠というものがあります。地域枠自体は本学独自のものではありませんが，本学の教育学部の場合ですと神奈川県と横浜市，川崎市，そして相模原市の 4 つの教育委員会等と連携した地域密着型の教員養成課程として，地域の学校教員を養成する中心的役割を担うことを目的としていることから，学校推薦型選抜には地域枠というものを設定しています。

また，本日は詳しい説明はいたしませんが，募集枠が選抜方法によって異なるという形で，少し複雑になっております。例えば学校推薦型選抜の場合ですと，地域枠に関しましては特別支援教育を除いて学部全体で募集をしているのに対し，全国枠では専門領域ごとに募集をしております。地域枠で入学してきた学生に関しましては，入学後の第 1 学年の 10 月頃までにコース及び専門領域を決定することになります。

それでは，新型コロナウイルス感染症対策に伴う選抜方法等の変更について，簡単にご説明いたします。

先ほどお示ししました選抜方法の種類によって少し異なっておりますが，基本的には面接試験は面接試験に相当する内容の動画，小論文は小論文試験に相当する内容のレポート，実技検査は実技検査に相当する内容の写真，動画の提出を課すといった変更をいたしました。

総合型選抜の第一次選抜における小論文試験では，従来小学校の授業風景を撮影したビデオを視聴した上で，与えられた課題の論述を行うというものでしたが，昨年度についてはこの点は変更がされております。また，総合型選抜の第二次選抜では面接を実施していますが，従来は面接の中でプレゼンテーションも課しています。昨年度に関しましては，面接試験の内容に相当する動画を作成する過程で，その中にプレゼンテーションも含んでおりました。

次に，学校推薦型選抜になります。音楽専門領域では，聴音の実技試験というものを実施していましたが，こちらは聴音の試験に代わる実技検査，すなわち演奏動画の提出に変更しています。

最後に一般選抜になります。繰り返しになりますけれども，面接試験は面接試験に相当する内容の動画，小論文は小論文試験に相当する内容のレポート，実技検査は実技検査に相当する内容の写真，動画の提出を課すといった変更をいたしました。

こうした選抜方法の恐らく一番の特徴とし

ましては，どういった事態になってもこの方法だったら実施できる可能性が高いといった点にあるのではないかというふうに思います。大きな変更ですので，恐らく受験生は戸惑われたのではないかと思うんですけれども，例えば7月31日の時点で対面でやりますというふうに言ったとしても，「本当に対面での試験が実施されるのだろうか」「直前になって取りやめるということはないか」といったように，不安に思う受験生もいるかもしれません。また，オンラインで試験を行うという方法もあるかと思いますけれども，例えば「途中で通信が途切れてしまうんじゃないか」ですとか，例えば小論文試験を Word 等で作成する場合に「ファイルが試験中に壊れてしまったらどうなるのか」といったように，試験の実施に対して不安に思う受験生は出てくるかと思います。

一方で，こうした形で実施しますと，もちろん戸惑いはあるとは思うんですけれども，これならば恐らく確実に実施はされるだろうといったことで，「実施がされるかどうか」といった面での不安というものは排除された上で，受験に取組んでもらえるといった考えはできるのではないかと考えております。

また，一般選抜における試験科目設定の意図については，募集要項に以下のように記されております。「教員志望の熱意，コミュニケーションを想定した表現力・思考力の適性を確認し，教員になるという意志が強く，教員になる上での資質の高い学生を選抜するために，受験者全員に面接試験の内容に相当する動画作成を課します。読解力，文章作成力，論理的思考力などの教員になる上での基礎的な資質を評価するために，小論文試験の内容に相当するレポート作成を課します。実技検査の内容に相当する写真や動画の作成を課し，学校教員として必要となる実技能力を備えているかを評価します」といった具合です。

このように，一般選抜においては教員になる上での資質・能力として，コミュニケーションを想定した表現力・思考力の適性と教員に対する熱意及び読解力，文章作成力，論理的思考力，あるいは学校教員として必要となる実技能力を評価しようと意図しておりました。

それでは，そもそも教員に求められる資質・能力というのはどのようなものなのでしょうか。教員が備えるべき資質・能力については，2005 年の「今後の教員養成・免許制度の在り方について」ですとか，2012 年の「教職生活の全体を通じた教員の資質・能力の総合的な向上方策」などの答申等で繰り返し提言がなされてきました。2015 年の「これからの学校教育を担う教員の資質・能力の向上について」では，教員としての不易の資質・能力の例として，使命感や責任感，教育的愛情，教科や教職に対する専門的知識，実践的指導力，総合的人間力，コミュニケーション能力等が挙げられています。

また， 2010 年度に実施された教員採用選考試験の募集要項等に記載された「教育委員会が求める教員像」を文部科学省が調べたところ，教科等に関する優れた専門性と指導力，広く豊かな教養，教育者としての使命感，責任感，情熱，子供に対する深い愛情，豊かな人間性や社会人としての良識，保護者・地域からの信頼というものが多く挙げられておりました。

このように，教科や教職に関する専門性や指導力だけではなく，熱意や愛情，コミュニケーション能力，人間性というものが教員には求められているというふうに言えそうです。したがって，本学教育学部が評価しようとしている資質・能力と，教員に求められている資質・能力との間には，それほど大きな乖離はないと言えるかと思います。

こうした教員として求められる資質・能力自体に疑問を持たれるという方もいらっしゃるかもしれませんが，今回はそこにはあまり

深掘りはせずに，こうした資質・能力の評価をどう行うのかということについてもう少し考えてみたいと思います。そこで，教員採用選考試験の内容を見てみたいと思います。

教員採用選考試験は，筆記試験と面接試験，作文と小論文，模擬授業等の多様な方法を組み合わされて実施されていますが，現在では教育者としての使命感，豊かな人間性や社会性，指導力等を備えた優れた人材を確保することが求められ，人物評価が重視される傾向にあります。実際に教員採用選考試験では面接が重視されています。

文部科学省は毎年，67 都道府県・指定都市教育委員会及び大阪府豊能地区教職員人事協議会の計 68 県市が実施した教員採用選考試験を対象に，実施方法の調査を行っています。昨年度に関しましては，小学校と中学校教員採用選考試験において全ての県市で個人面接が実施され，多くの県市で集団面接も加えて実施されております。そこで，今回は面接による評価というものに焦点を当てて，教員としての資質・能力の評価についてもう少し考えてみたいと思います。

そもそも面接による評価にはどのような意義や特徴があるのでしょうか。面接では，筆記試験では評価が難しい特性をコミュニケーションを通じて評価することが可能というふうに考えられております。また，面接があることで，自分がこの大学・学部で何を学びたいのかを考えるきっかけになるなどの教育効果が期待できるほか，アドミッション・ポリシーを理解してもらう機会になるという利点があります。これは教員を志望する学生を求めているという本学教育学部にとっては，非常に重要になります。といいますのも，私は教育学部の中でも心理学専門領域というところに所属しているのですが，例えばオープンキャンパスなどでは「教員ではなくカウンセラーを目指しています」といった受験生と出会ったりします。その中には，心理学専門領域に所属した場合には教育実習に行ったりする必要はないですとか，教員免許を取得したりする必要がないといった誤解をしている学生も少なからずおります。こうしたことから，資質や能力ですとか，そもそも何を評価するのかといったことを置いておいたとしても，面接や動画提出を課すといった意義はあるのかなというふうに考えております。

次に，大学入試において面接を行う狙いに関しましては，志望分野に対する興味・関心ですとか，志望分野における適性などを確認することが挙げられております。実際に，国立の教員養成大学・学部というのは全部で 44 大学あるのですが，ざっと調べてみましたところ，何らかの形で面接を導入しているのは 40 大学にも及んでおります。これらのことから，適切に実施されるのであれば，大学入試において面接を行うことは教員になる上での資質・能力を評価するための有効な方法の一つではないかと考えられます。

それでは，実際に昨年度の本学の入試においてどのような課題を課したのかについてご紹介いたします。

学校推薦型選抜のみ，募集要項において面接試験の課題内容が公開されております。学校推薦型選抜というのは，最初のほうにお示ししましたが地域枠，全国枠とございまして，全国枠は専門領域ごとに募集をしており，専門領域によって課題内容が異なっております。そこで，ここでは地域枠の特別支援専門領域以外の専門領域枠がない学部全体の募集枠の課題内容について示しております。

まず，出身学校名と氏名をカメラの前で述べてもらい，続いて神奈川県内で教職を志望する理由について 2 分程度で話をしてもらいます。その後，学部入学後の学習計画とプレゼンテーションへと続いていきます。具体的には，「神奈川県内には様々な地域資源があります。あなたが学校教員で，これらを活用した授業を行う場合，どのような授業を実践し

たいですか。あなた自身がやってみたい授業の構想についてプレゼンテーションをしてください」といった課題内容でした。対面で実際に相手がいる状況で面接試験を行う場合と比較しますと，相手の人物の特徴について詳細に把握することはできませんが，教職に対する興味ですとか関心及び教員になる上での適性，学習習慣や行動力などを確認するための課題内容にはなっているのではないかと思います。

また，双方向的なやり取りをすることはできませんので，コミュニケーション能力そのものを評価することは難しいのですが，聞き手が目の前にいない状況下において聞き手のことを想定して適切に話をすることができる人というのは，聞き手が実際に目の前にいて，双方向的なやり取りをする場合においても適切な話ができるというふうに考えられますので，その意味では動画提出による評価には一定の有用性があるのではないかと考えられます。

また，撮影内容については次のように指示を出しておりました。最初に本人確認のために写真票と受験票を提示してもらい，次に志願者本人の顔を提示してもらいました。そのまま撮影を中断することなく，一つ前のスライドでお示しした課題内容についてそのまま続けて話をしてもらうといった流れになっておりました。さらに，動画撮影に関する留意事項については，このように示しておりました。例えば撮影の途中で機器を操作しないことや，編集等の加工をしないように注意を促していました。

では，対面での面接ではなく，こうした動画提出による評価にはどのようなメリットやデメリットが考えられるでしょうか。まず，先ほども話題にしましたように，細かい所作の確認ですとか，双方向のやり取りができないといったデメリットはあるかと思います。すなわち，受験者からの回答ですとか，提出された書類などに対して掘り下げた質問をすることはできませんし，予想外の質問を投げかけることによるそれに対する対応力などを見ることもできません。

一方で，対面で面接を行う場合というのは，面接者がしゃべり過ぎてしまい受験者に関する情報が十分に得られなかったり，関係のない質問をしてしまったりといったように，質問の展開における誤りといったものが生じるおそれがあると指摘されています。

一方で，動画提出によって評価を行う場合には，あらかじめ課題が定まっておりますので，こうした問題は生じにくいという利点はあるかもしれません。また，面接試験においては，待ち時間がストレスになったり，待ち時間が受験者によって異なるという公平さの問題があったりますけれども，こうした問題もありません。さらに，採点する順序によって結果が変動してしまうといった系列効果ですとか，直前に面接した人物の特徴と比較して評価しやすい対比効果というものの存在が知られておりますけれども，例えば動画提出を求める場合には，採点順序をランダムにするといったような対応をすることを考えることができるため，こうした問題への対処方法のバリエーションというものが広がっていきます。

このように，代替措置というのは一見すると問題が多いようにも見受けられるんですけれども，対面での面接における問題を克服できる可能性があるという点もありまして，メリットもあるというふうに言えるのではないかと考えております。

最後に，今後検証すべき課題について触れたいと思います。代替措置が適切であったかどうかについては，妥当性と信頼性という観点から検証することが望まれます。妥当性と信頼性というのは，簡単に申しますと，まず妥当性は評価したいと思っている特性を適切に評価できている程度のことでして，信頼性

というのは評価結果の一貫性ですとか安定性のことを意味しております。例えば提出課題の成績と大学入学後の成績の間には相関があるのかですとか，教員採用率が例年と比較してどの程度なのかといった観点から，試験の適切性について確認することが考えられます。

なお，妥当性と信頼性の問題は，キャンパスで実際に個別試験を行った場合にも重要になります。実際に本学教育学部において集団面接を実施したのは今の学部 4 年生が最初でして，集団面接を導入したことによって教員採用率が上がったかどうかとか，あるいは教員になった後の教員としての評価がどうなのかといったことは，これから検証されることになっております。このように，仮にキャンパスで試験を行ったとしてもこういった点は重要になるんですけれども，昨年度の取組みがどうだったのかということについては改めて当然今後検証していく必要があります。

また，この問題と関連しまして，対面での面接における評価と動画提出による評価というものがどの程度一致するのかといったことを検証することも考えられます。ただし，実際の選抜試験において動画提出と対面での面接の両方を課して，その成績の関連を見るといったことは現実的には難しいと考えられますので，例えばこうした問題に関しましては，実際の面接場面ではなく，心理学実験などで検証するといったことが考えられるかもしれません。

それから，もちろん受験者の受け止めも重要と言えます。すなわち，合否結果に対する納得性や，手続きの適切性をどう認識したのかといった受験者の観点からも昨年度の取組みがどうだったのかといったことについて検証していくことが求められます。

昨年度というのは，意図せずしてこうした対応策について考えることになったわけなんですけれども，選抜試験の在り方について考えるきっかけとなったと捉えることはできるかと思います。よりよい選抜試験の在り方ですとか，不測の事態への対応について理解を深めるためにも，昨年度の選抜試験を単なる昨年度だけの代替措置として終わらせるのではなく，成果や課題についてきちんと検証し，今後に生かしていくことが何よりも重要だと考えられます。ここに示させていただいたことは，まだ検証ができていない段階でして，大変申し訳ないんですけれども，これらの検証は今後の課題とさせていただきまして，私からの本日の現状報告を終わらせていただければと思います。本日はご清聴いただきまして誠にありがとうございました。

（拍手）

船橋伸一特命教授（司会）：

鈴木先生，ありがとうございました。

では，ここで休憩を取らせていただきたいと思います。再開は，前方，皆様から見て右上のデジタル時計で 16 時 20 分といたします。

なお，基調講演及び現状報告の 5 名の先生方への質問等の受付は，16 時 10 分で締め切らせていただきます。来場参加の皆様はお手元の QR コードから，オンライン参加の皆様はオンライン参加者用ページより，あるいはスクリーンに表示されている QR コードから，ウェブ上での入力をお願いいたします。お手洗いをご利用の際には，密集，密接を避けるようご配慮いただき，ソーシャルディスタンスを保ってのご休憩をお願いいたします。それでは，16 時 20 分まで休憩いただければ幸いです。

［休憩］

現状報告　鈴木雅之（横浜国立大学）

第34回東北大学高等教育フォーラム
（2021.5.17）

大学入試における
教員としての資質・能力の評価

鈴木 雅之
（横浜国立大学教育学部）

EduA　受験　子育て・知育　教育改革

横浜国立大、一般選抜の個別学力検査を取りやめ　「苦渋の決断」の背景は？

大学受験　大学入学共通テスト　新型コロナウイルス　大学選び　2020.08.19

上野　創　いいね！

https://www.asahi.com/edua/article/13645513

2

EduA　受験　子育て・知育　教育改革

横浜国立大は、例年2月と3月にキャンパスで実施していた一般選抜の個別試験（個別学力検査）を、来年は取りやめると公表しました。合否は大学入学共通テストの結果で決め、「自己推薦書」も判断材料とします。教育学部については、共通テストに加え、面接や実技試験のかわりに出願時に課題を提出させて合格者を決めます。受験生が横浜に集まることで新型コロナウイルスの感染が拡大するのを避けるため、「苦渋の決断」を下したとのことです。育景について、根上生也副学長・理事（教育・広報担当）と高木まさき副学長・理事（総務・危機管理担当）に話を聞きました。（写真は横浜国立大の正門）

他県からの受験生の多さを考慮、安全確保を最優先

◉キャンパスでの個別試験を取りやめるという判断は、他大学と比べて異例でした。

個別試験は前・後期合わせて、出願が約7500人で、受験するのは約5千人。これだけの受験生が同じキャンパスに来る。大事なことは、横浜周辺の生徒が来るセンター試験（来年度入試から大学入学共通テストに変更）と違い、県を越えて来るという点。横浜というある意味、繁華街で宿泊する

3

横浜国立大学教育学部の概要

- 2017年に「教育人間科学部」から学校教育課程のみの「教育学部」に改編
  - 2018年度入学者選抜から，一般選抜において集団面接を実施
- 2021年に課程名称を「学校教員養成課程」に変更
  - 教職大学院とも連動し，教育組織・カリキュラムを再編成
    - 3コース14専門領域で構成
  - 教育に関わる諸課題を総合的かつ多角的な見地から理解できる教員，実践的かつ先進的な資質や能力を身につけた教員を養成し，すべての学生たちを教員として世に送り出すことを目標
    - すべての学生が小学校教諭一種免許状取得を求められている
    - 教科の専門領域では中学校教諭一種免許状，特別支援教育専門領域では特別支援学校教諭一種免許状の取得が必須

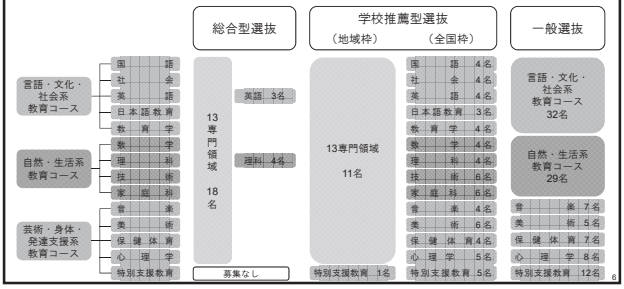
4

入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）

- 教育学部（学校教員養成課程）は，学校教育に関心が高く，教員として子どもの学びへの支援の方法を能動的かつ協働的に創造していこうとする強い熱意を有する人を求めている
  - 子どもとコミュニケーションをとりながら共に学び続けたい人
  - 学校教育の充実，創造に貢献したい人
  - 特別支援教育の充実，創造に貢献したい人
  - 現代的な教育課題に対して，他者と協働して広い視野に立った解決策を構想し実践したい人

5

横浜国立大学教育学部における各選抜の募集人員



6

現状報告　鈴木雅之（横浜国立大学）

新型コロナウイルス感染症対策に伴う選抜方法等の変更

総合型選抜・第1次選抜

変更前	変更後
自己推薦書，調査書，課題レポートの評価と併せて，小論文試験を課して，それらの結果を総合的に判断して第1次選抜合格者を決定します。小論文試験は，小学校の授業風景を撮影したビデオを視聴の上，与えられた課題の論述を行います。	自己推薦書，調査書，課題レポートの評価と併せて，小論文試験の内容に相当する課題を課して，それらの結果を総合的に判断して第1次選抜合格者を決定します。

「令和3年度（2021年度）入学者選抜要項」p.5より抜粋

7

新型コロナウイルス感染症対策に伴う選抜方法等の変更

総合型選抜・第2次選抜

変更前	変更後
提出書類の内容を基に，複数の面接員による個人面接を行います。個人面接では，その場で与えられた課題に対するプレゼンテーションを行います。また，これまでの継続的な体験活動や課題レポート等について説明していただき，教育の今日的課題等の質問を行います。	面接試験の内容に相当する課題について，動画での提出を課します。課題には，学校現場を想定したプレゼンテーションを含みます。

「令和3年度（2021年度）入学者選抜要項」p.5より抜粋

8

新型コロナウイルス感染症対策に伴う選抜方法等の変更

学校推薦型選抜

変更前	変更後
小論文及び個人面接による試験，推薦書，調査書，志願理由書，自己推薦書，英語専門領域を志願する者のみ外部試験，音楽専門領域を志願する者のみ聴音（2声の書き取り（大譜表，8小節程度））の実技試験	小論文及び個人面接による試験に相当する課題の提出物，推薦書，調査書，志願理由書，自己推薦書，英語専門領域を志願する者のみ外部試験，音楽専門領域を志願する者のみ聴音の試験に代る実技検査（志願者が選んだ任意の1曲の演奏録画による）

「令和3年度（2021年度）入学者選抜要項」p.5より抜粋

9

新型コロナウイルス感染症対策に伴う選抜方法等の変更

一般選抜（前期日程）・個別学力検査

言語・文化・社会系教育コース，自然・生活系教育コース，芸術・身体・発達支援系教育コース（心理学・特別支援教育専門領域）	
変更前	変更後
集団面接試験と小論文	面接試験と小論文試験に相当する内容の動画やレポート等の提出物

芸術・身体・発達支援系教育コース（音学・美術・保健体育専門領域）	
変更前	変更後
集団面接試験と，選択した専門領域の実技検査「音楽の実技」「美術の実技」「体育の実技」	面接試験と，選択した専門領域の実技検査「音楽の実技」「美術の実技」「体育の実技」に相当する内容の写真や動画等の提出物

「令和3年度（2021年度）一般選抜学生募集要項」p.2より抜粋

10

一般選抜における試験科目設定の意図

- 教員志望の熱意，コミュニケーションを想定した表現力・思考力の適性を確認し，教員になるという意志が強く，教員になる上での資質の高い学生を選抜するために，受験者全員に面接試験の内容に相当する動画作成を課します
- 「言語・文化・社会系教育コース」，「自然・生活系教育コース」，「芸術・身体・発達支援系教育コース（心理学・特別支援教育専門領域）」を受験する者には読解力・文章作成力・論理的思考力などの教員になる上での基礎的な資質を評価するために小論文（教育課題論文）試験の内容に相当するレポート作成を課します
- 音楽・美術・保健体育専門領域を受験する者には，音楽・美術・体育の実技検査の内容に相当する写真や動画の作成を課し，学校教員として必要となる実技能力を備えているか評価します

「令和3年度（2021年度）一般選抜学生募集要項」p.47

11

教員としての資質・能力とは？

- 教員として不易の資質・能力
  - 使命感や責任感，教育的愛情，教科や教職に関する専門的知識，実践的指導力，総合的人間力，コミュニケーション能力等
    （「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について（答申）」（中央教育審議会, 2015））
- 「教育委員会が求める教員像」（文部科学省, 2011）
  - 教科等に関する優れた専門性と指導力，広く豊かな教養
  - 教育者としての使命感・責任感・情熱，子どもに対する深い愛情
  - 豊かな人間性や社会人としての良識，保護者・地域からの信頼
- 教員採用選考試験
  - 教育者としての使命感，豊かな人間性や社会性，指導力等を備えた優れた人材を確保することが求められ，人物評価を重視する傾向（日野, 2014）

12

現状報告　鈴木雅之（横浜国立大学）

令和2年度公立学校教員採用選考試験の内容（文部科学省, 2020）

67都道府県・指定都市教育委員会，および大阪府豊能地区
教職員人事協議会（計68県市）の選考試験の内容

	小学校	中学校	高校
一般教養	47	47	41
教職教養	64	64	56
専門教科	67	67	59
作文・小論文試験	43	41	36
個人面接	68	68	60
集団面接	45	46	40
模擬授業	48	49	39
場面指導	25	25	21
指導案作成	11	12	9

13

面接による評価（西郡, 2020）

- 面接による評価の意義
  - 筆記試験では評価が難しい特性をコミュニケーションを通じて評価可能
  - 大学で何をしたいかを考えるきっかけとなるなどの教育的効果
  - アドミッション・ポリシーを理解してもらう機会となる
- 大学入試における面接の狙い
  - 志望分野に対する興味・関心の程度の確認
  - 志望分野における適性の確認
  - 学習習慣や行動力などに関する確認
  - 入学意思の確認
  - 受験者本人の人物特徴の確認

14

学校推薦型選抜（地域枠・専門領域枠なし）・面接試験の課題内容

- 出身学校名と氏名
- 神奈川県内で教職を志望する理由（2分程度）
- 本学部入学後の学修計画（3分程度）
  （入学後，どのようなことを，どのように学んでいきたいか）
- プレゼンテーション（6分程度）
  - 神奈川県内には様々な（人やもの，コトなどの）地域資源があります。
    あなたが学校教員（小学校あるいは中学校）でこれらを活用した授業を行う場合，どのような授業を実践したいですか。あなた自身がやってみたい授業の構想についてプレゼンテーションしてください。
    はじめに小学校もしくは中学校の対象学年，教科名，題材名を告げてから，授業構想について説明してください。プレゼンテーションの方法について特に制限はありません。

「令和3年度（2021年度）教育学部学校教員養成課程　学校推薦型選抜学生募集要項」p.14・15

15

動画の撮影内容

- 撮影は下記の①と②について連続して行い，1つのファイルに保存すること

① 志願者本人の顔と写真票・受験票
- 動画の冒頭に写真票・受験票を，次に志願者本人の顔（正面）をそれぞれ5秒程度，画面全体に収まるように撮影機器に近づいて撮影してください。続いて，撮影を中断・一時停止せずに②の内容を撮影してください

②「課題内容」に示された志願する専門領域等の内容
- ①の撮影を済ませたら，撮影を中断・一時停止することなく志願者は定位置に移動し，「課題内容」について撮影を継続してください。

「令和3年度（2021年度）教育学部学校教員養成課程　学校推薦型選抜学生募集要項」p.15・16

16

動画の撮影方法と動画作成に関する留意事項

- 撮影は，志願者にとってプレゼンテーション等に最適であるアングルを定めて行ってください。ただし，撮影の途中で撮影機器を操作（移動させる，倍率を変える等）してはいけません。
- 動画ファイルは，編集等の加工を一切してはいけません。加工が明らかに確認された場合，採点の対象とならないことがあるので十分に注意してください。
- 撮影は志願者以外の者が行っても構いませんが，撮影中にアドバイス等を受けることは一切禁止します。
- 志願者以外の者や試験に関係のない物，生活音（会話等）が録画，録音されないように注意すること。そのうえで，環境音（車の走行音や鳥の鳴き声など）が入っても聴き取りに影響がない限り，特に撮り直しする必要はありません。

「令和3年度（2021年度）教育学部学校教員養成課程　学校推薦型選抜学生募集要項」p.16・17

17

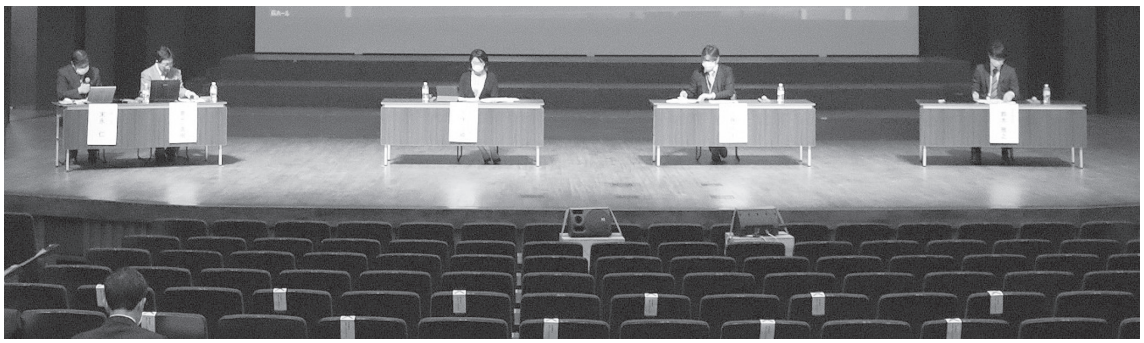
ご清聴ありがとうございました

18

第Ⅲ部　　討議

ーパネルディスカッションー

討議――パネルディスカッション――



船橋伸一特命教授（司会）：

皆様，大変お待たせいたしました。これより第３部，討議に入らせていただきます。ここからは討議司会の担当者にマイクを渡します。よろしくお願いいたします。

倉元直樹教授（討議司会）：

結構時間が長くなってきましたけれども，しばらくお付き合いください。討議の司会を担当いたします東北大学の倉元でございます。よろしくお願いいたします。

末永仁特任教授（討議司会）：

同じく入試センターの末永仁といいます。どうぞよろしくお願いいたします。それでは，まず最初に私のほうからご質問させていただきたいと思います。

まず，今日ご発表された先生方，最初に発表の補足，あるいはほかの方のお話を聞いた上で改めてお話ししたい点がございましたらお伺いしたいと思います。

ちょっと順番，たぶんオンラインとステージの上と混じるとやりにくいと思いますので，オンラインの先生から先にお願いします。それでは，立脇先生，お願いいたします。

立脇洋介准教授：

発表の途中でお聞き苦しいところがございまして，その点大変申し訳ございませんでした。

補足というか，本当に感想になってしまいますけど，やはり私の発表の中でも言いましたけど，昨年に関してはそれぞれの立場で高校，大学の先生方が何とかやって乗り切ったというのが本当に率直な感想だと思います。その点で，こういう場でお互いにこういう状況だったということが共有できれば，この４月以降実施していく入試は昨年よりよりよいものになるかなというふうに思っております。以上です。

末永仁特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

それでは，オンラインが先ということでしたので，須磨学園の多田先生，お願いいたします。

多田鉄人教諭：

すみません，先ほどは音が随分割れてしまっていたということで，申し訳ありませんでした。今は大丈夫でしょうか。今音のほうは割れていませんか。大丈夫ですかね。

末永仁特任教授（討議司会）：

はい，大丈夫です。

多田鉄人教諭：

すみませんでした。さらに，持ち時間を10 分オーバーしてしまいまして，本当に申し訳ありませんでした。すみません，お聞き苦しい時間としてしまいまして，本当に申し訳ありませんでした。

感想といいますか，各大学さんにおいての取組みというのをこんなふうに知るという機会は本当に全然ありませんので，すごく勉強になりましたというところです。これからもぜひまた勉強させていただければと思います。どうもありがとうございました。

末永仁特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

それでは，久保先生，お願いします。

久保沙織准教授：

スライドの量からしても内容が盛りだくさんでございましたので，どうしても早口でのご説明になってしまいましたことをお詫び申し上げます。

私も，大学側の取組みについてはある程度知る機会があるんですけれども，このフォーラムによって私ども大学の人間としましては高校側の状況，取組みについて知る大変よい機会になったと考えております。

あとは，立脇先生のご発表の中の最後の想のところで厳格さ・公正性，負担の少なさと安全性という，それらのバランスが大事というお話もあったんですが，それに加えて鈴木先生のご発表にあった実現可能性というところも，非常にやはり入試を考える上では大事なのではないかなということを改めて実感させられました。以上です。

末永仁特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

それでは，戸山高校，近藤先生，お願いいたします。

近藤明夫教諭：

つたない話にお付き合いいただいて，本当にありがとうございました。補足をというふうに言っていただきましたので，1 点だけ。

コロナ禍ということですけれども，例えば国全体としてはGIGAスクール構想とかそういったものをということで，やはり高校の現場が，コロナだから仕方なくということではなくて，本当の意味でのオンライン授業などにどうやって取組んでいったらいいのか，そういったところはぜひ大学の先生方のご教示もいただきたいなと思います。今日伺って，本当に大変勉強になりました。

そういう中で，久保先生のお話の中で，どういう形で情報を発信していくのか，特にエビデンスを取りながら，効果のあるもの，な

いもの，こういったあたりはぜひ高校の例えば授業改善とかそういったところにも生かせたらなと思うんですけれども，特にデータのエビデンスの取り方で注意されている点なんかがあったらばご教示いただけるとありがたいなと，そんなふうに思いました。

末永仁特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

それでは，最後に横浜国立大学の鈴木先生，お願いいたします。

鈴木雅之准教授：

私もつたない内容でしたけれども，どうもありがとうございました。補足説明というのは特にございませんので，感想になってしまうんですけれども，私もほかの大学の取組みですとか高校の取組みというのを今日改めてお聞きして，大変勉強になりました。

特に私の今日の話はどうしても大学からの視点でのお話になってしまったんですけれども，各高校はそれぞれが授業だったり学校行事だったりの対応に追われる中で，本学のように従来とは異なる形で入試をするというふうになりますと，それに対する対応というものもさらにしなくてはいけないと思いますので，本学の取組をどういうふうに受け止めたのか，率直なご意見や感想等，さらにお聞きできればなというふうに思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

末永仁特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

倉元直樹教授（討議司会）：

冒頭のところで，講演の補足をお願いしたわけですけれども，企画した側の意図に関して若干ご説明をさせていただきます。コロナ禍の下での大学入試というタイトルを付けたわけですが，入試の実施場面に限った話ではないということが一つポイントだと思っています。昨年，突如としてコロナという状況で，高校も大学も大わらわに対応に追われたわけですけれども，結局，高校での教育があり，またその教育の中で大学というものをどういうふうにして知っていくかという，いわゆるキャリア教育の場面があり，そして最後に入試の実施というふうにつながっている。そういう一連の活動を含めてこのテーマを選びました。

実は，ご質問の中で圧倒的に多かったのは，個別のご関心でオンラインのこと，特に技術的なことが多いかったのですけれども，その話はもし時間が許せば最後の方に取り上げさせていただきたいと思います。

まずは，ちょっと大きな話から行こうと思います。おそらく，我々もそうなんですけれども，とにかくいろんなことに追われながら何を考えていたかというと，この非常時にあって「一番大事なもの」は何なんだろう，ということです。それを保つために，他のものを犠牲にしていく，という選択を迫られたと思うのですね。その状況にあって，二つお願いしたいのですが，まず，高校側のお二人の先生にそれぞれお聞きしたいのですね。「何を大事にしようと思ったか」ということが 1 点目。一言で答えられないかもしれませんけど。その中で，「大学に対してどういった対応を求めていたのか」，どうしてほしかったのか。今の時点のお気持ちもあるでしょうけども，その時点に立ち返って，その辺のところをまずお聞きしたいと思っています。

大学側は，それぞれ今回お話しいただいたテーマがあったわけですけれども，それに限らず，高校側のコメントに答える形でも結構ですので，それぞれ自分たちで「何を考えて，

何を大事にして昨年対応したのか」ということをお話しいただければと思います。

まず，近藤先生からお願いします。

近藤明夫教諭：

それはもう私のちょうど1年前ぐらいの個人的な気持ちですけれども，一番大事にしたかったことは，今直面する子供たち，高校生たちが，穏やかな気持ちで臨んでほしい，それが私としては一番大事にしていたことです。ご案内のとおり，先ほど私の発表でも言いましたけれども，彼らはもうずっとドタバタさせられて，英検取らないと大学受けられないんじゃないかとか，共通テストが新しくなってとかという中で，ただでさえ翻弄されている中でコロナ禍という中で，彼らが穏やかに，不安が少しでも軽減されたらいいなと，そんなふうに思っていました。ですので，大学側に当時望んでいたこととしては，いろんなことをあんまり変えないでほしいってすごく思っていました。世の中的には9月入学にしたほうがいいんじゃないか，学びの遅れに対応して何とかとか，共通テストも1回じゃなくて2回，2回じゃなくて3回とか，どの時期に受けたいと思うか，文科省のほうから調査も入りました。でも，穏やかな気持ちで受けられる，安心して大丈夫だよというところを見せてほしい。ですから，先ほど東北大学様のオンラインでの相談会の話なんかもありましたけれども，やっぱり行かれなくなってどうしようという中でああいう取組みはすごくありがたかったなと，そんなふうに思っています。

倉元直樹教授（討議司会）：

ありがとうございます。

多田先生，いかがでしょうか。何を大事に思っていたか，大学にどんなことを要求したかったか・・・。

多田鉄人教諭：

先ほどのプレゼンの中身と少し重なってしまう部分もありますが，とにかく生徒に不安を与えないということを何よりも考えていました。ですので，いつもどおりプラスαという，いつもどおり学校はやってますよということを一番大事にしようというふうに考えていました。

大学に求めるものは，先ほどの近藤先生と全く，くしくも全く同じなんですけれども，とにかく早く情報が欲しかったというのと，できるだけ変わらないでほしいというのが，変な話こちらでの感想でした。オープンキャンパスがどうしてもできないものに対しての代替案というのは何かいただけたら，すごいありがたかったなというふうに思います。以上です。

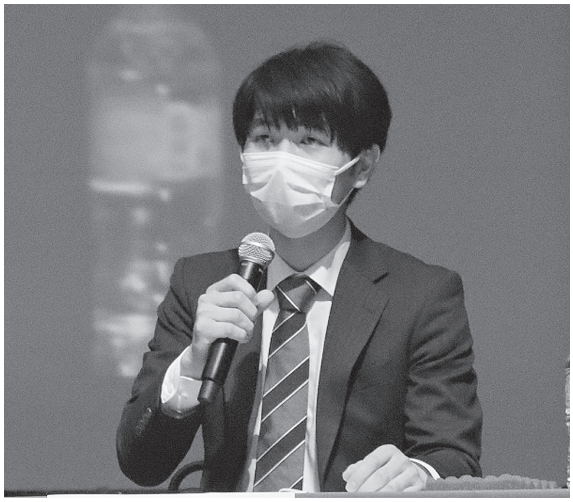
倉元直樹教授（討議司会）：

ありがとうございます。

それでは，大学側は答えにくい部分もあるのだろうと思うのですけれども，まず，鈴木先生，実は，おそらく多くの方が期待をしていたのは，横浜国立大学が早期に「個別試験を実施しない」という決定をされた，そのことに関してみんな知りたいと思っていると思うのです。今日のお話を伺っていると，少なくとも教育学部に関しては，大きく変えるというよりも，例年実施していることを変えないでいこうという発想で臨まれたのかな，と感じるわけです。そうすると，大学全体としてどういう議論があったかは別にして，世間一般に思われているイメージとはちょっと違った考えがあったのかな，というようなことも思ったところなんですが，どうでしょう。

鈴木雅之准教授：

あくまでも私個人の見解になるんですけれども，まず先ほどお話しされましたなるべく変わらないでほしいという点に言及させていただきますと，ころころ変わらないでほしいという考えをそのまま受け止めるのでしたら，従来のとおりキャンパスで個別試験を従来と全く同じ内容で行う，2 年前予告していた内容で行うというのが最もふさわしいのだと思うんですけれども，恐らく本学の考えとしましては，この先変わることを一番避けたかったというふうに思うんですね。つまり変わらないという点では，「今年はこういう対応をします」っていうふうに言わないことが一番望ましいんだと思うんですけれども，少なくとも昨年の 7 月末の段階で，その半年後の状況が全く読めない状況だったと思います。



もしかすると共通テストすらできないかもしれないといったような話もささやかれる中でしたので，どうすればこの先変わらずに，もうこれで行きますと 7 月末の時点で決めて，変わらずにいられるのかという観点でこういった決定がなされたのかなと。その点，受験生の安心・安全というのももちろんあります。移動しないことによる安心・安全というのもあると思いますけれども，そういったその先変えないといったことが重視されたのかなというふうに考えております。

今，倉元先生からいただきました教育学部の考え方としましては，ほかの教育学部の教員がどういう価値観，考えなのか私には十分にわかっておりませんけれども，やはり今日お話しさせていただきましたように，アドミッション・ポリシーを非常に大切にしております。横浜国立大学の教育学部は教員養成というイメージをあまり持たれていないようでして，これはもしかすると，今日，久保先生のお話を伺って，うちの広報不足が原因の一つなのかもしれないというふうにもちょっと思ったんですけれども，横浜国立大学は，何ていうんでしょう，立地という点ですとか，イメージ的に就職もいいとかということを持たれて，安易に受験するような受験生もいるということを問題意識として持っておりますので，アドミッション・ポリシーに準じて，従来と変わらない形で入試をしたいという考えを持っていた教員は少なくなかったのではないかというふうに考えております。以上とさせていただきます。

倉元直樹教授（討議司会）：

ありがとうございます。

立脇先生，よろしいでしょうか。感染状況の地域差というようなこともあって，九州大学では相当いろいろ検討されて，実際に動かれたということですけれども，いかがでしょう。

立脇洋介准教授：

まず，大学にとってのとか高校にとってのとか，それぞれの立場ごとに検討はいたしまして，まず大学にとってはとにかく 4 月に入学者が入っていること，そこが大前提，最も

大事にしていることです。その上で，発表の最後にもお話ししましたけれど，入試としての公正性とか厳格さということ，あと受験生にとっての安全性，それともう一つが，繰り返しになりますけれども受験生の負担というのをやっぱりバランスを取ってやらなければいけないということは常に心がけました。

高校側の要望で出てきた中で，非常に大学としての対応が難しかったところとしましては，早く発表してほしいということとできるだけ変えずにということが実は矛盾をしているといいますか，早く発表すればするほど，横浜国立大学のように安全策のものなら早く発表できますけど，それは大きく変えたものになってしまいます。

ですので，そのぎりぎりのところでというところで，高校側にご迷惑をかけたかなというのは思いますが，ただできるだけ変えずにというところで，実際にいくつかの学部から，例えば新しく教科試験を課すということは可能かということとか，ディスカッションの総合型を実施している学部が，ディスカッションを対面でやるのはリスクが高いので，もうそれは全部やめて，一般選抜に定員を振っていいかというようなことを内々に相談に来たときは，それは全てダメですと。高校に対するネガティブな影響が大き過ぎますので，あくまで現在やっているものの枠組みの中で変更するようにしてくださいというようなことは言っていますので，そこがもし高校側の考えているものよりも変更が多かったらそれは申し訳なかったと思います。以上です。

倉元直樹教授（討議司会）：

ありがとうございました。「三つのバランス」というところがキーワードになっていたかと思いますね。

久保先生は，実は，昨年度赴任されて，いきなりコロナだったんですよね。今の立場で大学入試を経験するのも初めてであったのですけれども，まず最初に，あまり事情を知らない形で来られて，1 年経験されて，どんなことを感じますか？今の視点でいうと。どんな話をしてきたっていうふうに自分で思われますか，東北大学で。

久保沙織准教授：

やはり東北大学の立場といたしましては，これまで受験に向けて努力をしてきた受験生を守ること，第一に受験生ですが，それから受験生に限らず志願者，高校生，そしてそれにかかわっていらっしゃる高校教員，あるいは保護者の皆さんの不安を解消することということが最優先だという前提の下に，この東北大学の入試あるいは入試広報活動が動いているということを心から実感して，その実現のために取組んでまいりました。

これまで勉強させていただく中で，実際に東北大学では高大接続改革等に関しましても大きく変えないという点は貫いてきたというふうに認識しております。その中で，広報という観点では，少しでも早く入試に関連する情報，あるいは大学の学習状況に関する情報を伝えようということを一番大事にして取組んでまいりました。

その観点の下で，まず 6 月の初めから進学

説明会・相談会，これは高校生や受験生に向けたサイトですが，それをオープンさせて，大学に関する情報，入試に関する情報を届けました。続いて，7 月 13 日からは入試説明会ということで，高校教員を対象にした広報活動を行って，先生の側からも生徒さんに少しでも安心を与えてほしいというようなことを，その説明会の中でも実際に訴えてきました。7 月末にはオンラインオープンキャンパスのサイトもオープンして，9 月にはライブイベントも，という形で進めてまいりました。

ただ，広報をやっていく中で，先ほど立脇先生からのお話にもあったと思うんですけれども，変えないで，でも少しでも早く，というところで言うと，実際に入試に関する様々な文科省からの情報や国大協からの情報も遅れていた情況がございますので，早くと思えば思うほど正確性や公表できる内容に制限が出てしまうという点に関しては，ジレンマだったなと振り返っております。

また，鈴木先生のお話で，東北大学の広報を見習いたいというありがたいお言葉をいただきましたけれども，東北大学に来てみて実際にわかったこととしては，事務系の職員さんはもちろんですけれども，東北大学の入試広報活動は，教員も相当な労力をかけて取組んでいるということが非常に特徴的だなと感じております。

倉元直樹教授（討議司会）：

ありがとうございます。

今のディスカッションは「なるべく変えない」というキーワードだったんですが，これは入試に向かっている受験生が今までやってきたことを無駄にさせてはいけないというところでの発想，それはもう共通だと思うんですけれども，もしかするとそれが誤解を生むかなと思ったところもありまして。それは何かというと，「この先一切変えない」という意味ではないんですよね。コロナという状況もあります。その中で，入試を「今までどう変えてきたか」ということも含めて，「どう変わっていくべきか」というところにおそらく考え方の違いが表れているんじゃないかなと思います。

全部しゃんしゃんで終わるとおもしろくないので，ちょっと違った点を浮き彫りにするために，まず鈴木先生，もともと教育学部では一般入試ですね，今の一般選抜の個別試験で学力検査を課していないですよね。それは一体どういう意図によるのかということと，それはこの先どうなっていくか，どうしていくというのは先生のお立場からは言えないだろうから，どうなっていってほしいと思われているかというようなことをちょっと伺っていいですか。

鈴木雅之准教授：

はい，ありがとうございます。

ちょっと無責任な回答になってしまうかもしれないんですけれども，私が横浜国立大学に来て今 6 年目でして，私が着任したときはいわゆる総合問題という形で個別学力検査は実施されていました。ただ，もう私が着任した当時には，ちょっと記憶が曖昧で申し訳ないんですけれども，小論文に変えるということが決まっていたと記憶しております。ですので，総合問題も学力検査と捉えるかどうかという考え方もあるとは思うんですけれども，なぜ今の形になったのかということを実は私は詳細には把握していないんですね。ただ，小論文試験に変えた背景としましては，やはり教員養成というのがキーワードになっておりまして，これは公表されている情報ですので話題にしますけれども，国立の教員養成課程において，本学は教員採用率が毎年のよう

にワースト何位とかという形で非常に低いんですね。これは受験しても受からないというわけではなくて，受験率が低いんですね。大体一学年の5割ぐらいしか教員採用試験をそもそも受験していなくて，この時点で全国平均を下回るぐらいなんですけれども，そうした背景がありまして，なるべく教職に対する熱意の高い学生を集めたいという考えはあったようです。すなわち総合問題ですと，例えばもともと工学部に行きたかったんだけれども，センター試験であまり成績がよくなかったので，特に対策しなくても受験できそうで，かつセンター試験の比重が比較的大きい横浜国立大学を受験しましたという学生が，私が着任した当時も結構いたんですね。

そういった学生は，もともとやっぱり教員を目指していないわけですので，ミスマッチが起きてしまいまして，本人にとってもやっぱり，何でしょう，望むものを学ぶ場としては適切とは言い難いですし，我々としましてもやっぱり教員養成をしていくというのをミッションとしているにもかかわらず，最初から教員になる気はないといった学生がいると，なかなか難しい部分があります。特に必ず教育実習に行きますので，教育実習，本学の場合は全ての学生が附属で実習を行うわけではなくて，一般校に行く学生も多いんですけれども，教員志望でない学生が実習に行ってしまうと，実習先の小学校，中学校あるいは高校にもご迷惑をかけてしまいますので，そういった観点からも教職への志望が高い学生を集めることがかなり重要といったところで，小論文試験を恐らく課すという結論に至ったんだと思います。さらに，それに加えて面接試験も課すといった決定をするようになりました。

今後の展望に関しましては，なかなか難しい点はあるんですけれども，まずはやっぱり小論文試験を導入して初めて卒業したのがこの間の3月の学生でして，面接を導入して初めて卒業するのが今の学部の4年生なんですね。すなわち，今の個別試験の形になってからの成果の検証がまだ時期的に十分にはできていない段階にあると思います。私個人の考えとしましては，今の試験の在り方の適切性を評価する前にまた変えるというのはあまり好ましくないのではないかというふうに思っていますので，現在の入試の形になってどういった成果と課題があるのかといったことを検証してから，きちんと吟味をして，内容について検討するしかないだろうというふうに思っていますので，長々としゃべって全然中身がないもので申し訳ないんですけれども，今現在の中ではこうしたほうがいいとかこうすべきだという考えがあるわけではなくて，今の形をまずきちんと検証するのが先決だろうというふうに思っております。

倉元直樹教授（討議司会）：

基本的には，きちんと志望のはっきりした学生が欲しいというところが課題だったという受け止めでよろしいのですね。

さて，立脇先生，コロナで集まるのが遠くから来るのが難しい，ということは重々わかります。感染状況がひどい場合には，これから変異株なんかも出てきますので，・・・今の感染機序からいくと入試のリスクは低いわけですけど，・・・今後どうなるか分からないということはもちろんあります。ただ，高大接続改革の検証の中でも，やはり記述問題の重要性って，それは個別試験でやるしかない，というようなことを言われていますよね。それで，実際，・・・これは内緒なのかよく分からないんですけど，・・・ある段階では旧帝大の中で，もし移動が制限された場合にそれぞれの受験生をその場で受験させること

はできないか，つまり，うち（東北大）で九大志望の学生さんを受験させることはできないか，みたいな話題が出たことはあったのですよ。旧帝大として共通テストの重要性だけをおっしゃるのは，同じような立場の大学としてはどうかな，と思った次第なんですが，立脇先生，どうでしょう。

立脇洋介准教授：

あくまで本日お話しした内容，一般選抜は実施するという前提でお話をしております。一般選抜が中止とか，集まることができないということは，それは国立大学に関しては九州大学だけではなくてほぼ全国の大学が同じ日に似たような状況だということを考えますと，うちの大学だけどうこうということをもう超えているので，そこも別で検討することが必要だということで，個別で行えるような総合型と学校推薦型に関しては具体的なオプションを検討してつくったというのが本学の昨年の状況でございます。

倉元先生おっしゃるように，記述に関するところというのは，本日発表を一部省略いたしましたが，実際に小論文だったところを学校推薦型で代替として口頭試問であったりとかに変更した学部に関しては，やっぱり書く力に関してどうだったかということは入った学生に関して検証が絶対必要だということは皆さんおっしゃっていますので，そこに関しては当然必要だとは思っております。お答えになっておりますでしょうか。

倉元直樹教授（討議司会）：

個別学力検査を軽視しているということではないという理解でよろしいですね。

立脇洋介准教授：

そうです。そのとおりです。

倉元直樹教授（討議司会）：

わかりました。

今の議論をお聞きになって，高校側からコメントが欲しいんですけれど，まずは近藤先生，お願いします。

近藤明夫教諭：

おっしゃるとおりだと思います。やはり特に難関国立と言われるような，言い方がいいかどうかわかりませんけれども，二次試験をしっかりやるんだと，それに向けてしっかり力をつけてくださいというメッセージ，先ほど「変わらないでもらいたい」ということがちょっと誤解があったかと思うんですけれども，フェアな戦いであればいいと思うんです。

例えばうちにも九大を目指して，現役で受けて，ダメだった，「先生，来年も絶対九大受けるから」っていう子がいるわけですね。その例えば既卒の生徒も含めて，ルールが変わることでフェアな戦いでないことが嫌だなってすごく思います。ですから，二次試験を重視していく，それはやはりそれぞれの国立大学さんが工夫を凝らして，力をつけて来いよと。ですから，ちょっとこういう場で少し

ケンカを売るような言い方になりますけれども，それを放棄してしまって共通テストだけで，先ほど来のご説明はわかるんですけれども，やっぱりすごく違和感がありましたし，大学さんのほうはどう考えているかわかりませんけれども，「共通テストだけで入れるんだったら，横浜国大に別に行きたいわけじゃなかったけど，共通テストが点数が取れちゃったから行きます」っていう子がうちもいました。ですから，それはやはり足並みが揃えばまた別だとは思いますけれども，結果的にはやはり横浜国大さんが何を考えてやられたかということはすごくわかりますけれども，高校の現場からするとやはり二次試験に向けてしっかり力つけてよっていうメッセージを捨ててしまったように思えました。ちょっと言い過ぎでしょうか。

倉元直樹教授（討議司会）：

ありがとうございます。

多田先生，お願いします。実は多田先生の須磨学園は，ありがたいことに，本学，東北大学とあと九州大学に同時に大きな関心を抱いてくださった。その関係もあって今回登場いただいたこともあるんですけれども，多田先生，お願いします。

多田鉄人教諭：

関心を抱いたというのはどの部分でかちょっとわかりませんが，推薦入試はたくさん確かに出願をさせてもらいました。

私は逆に，先ほどの近藤先生とは意見がまた異なるかもわかりませんが，二次試験でもその人物の学力をはかると。さらに，推薦においても学力以外の，その子がその大学に入った後の活躍ができるかどうかということを大学の先生が判断されるという，何といいますか，いろいろな側面でその人物像を評価するということ自体にはどちらかというと賛成をしています。ですので，横浜国立大学さんのほうがそちらに必要な学力が共通テストで満足できると考えられて，それを選択するのであればそれでよいと思いますし，東北大学さんや九州大学さんのような，それ以外の面でもはかることが可能だからというのでそれを全面的に押し出していくというのもいいと思います。僕は選択肢が増えるという意味においてはフェアであるというふうに考えていますので，いろいろな選択肢があって，いろいろな大学さんがいろいろな観点でその高校生を判断してくれるということは，私はすごく魅力的なことだなというふうに感じています。

倉元直樹教授（討議司会）：

ありがとうございました。

この話も延々とすると長くなりそうですので，そろそろ司会を交代いたします。

末永仁特任教授（討議司会）：

それでは，私のほうからなんですけど，オンラインで質問が寄せられているので，特に広報活動について久保先生に質問があります。今から3点ほど質問がありますので，それぞれお答えいただければと思います。

まず 1 点目は，「久保先生の説明に「広報活動の広域化」というワードがあったと思うんですけど，そのことによって学生の出願状況や合格者の状況に対して何らかの効果があったとお考えでしょうか。特に志願者，合格者の地域比率への影響はありましたでしょうか」，これが一つ目です。

二つ目，「2020 年度オンライン入試説明会における地域ごとの志願者数と参加者数との相関について質問いたします。ここでの参加者数は，入試説明会の対象となる高校教員の

数でしょうか。それとも高校の数でしょうか。また，多数回の入試説明会を開催していますが，コンテンツは同じでしょうか。あるいは地域別，参加高校別に異なる内容だったのでしょうか」，これが 2 点目です。

最後，3 点目なんですけど，これはオープンキャンパスに関してです。「今年度も多くの大学でオンラインオープンキャンパスが実施されると思いますが，東北大学ではどのように他大学との差別化を図っていますか」というのが 3 点目の質問です。

久保沙織准教授：

3 点ご質問いただきまして，順番に答えさせていただきたいと思います。

まず 1 点目の広域化というキーワードを私のほうで挙げさせていただきましたことを受けまして，広域化によって学生の出願状況，志願者，合格者等の状況に変化があったのかというお話だったと思うんですが，今年，この 4 月の入学者という意味では，地域ごとの比率にこれまでとの明確な違いは出てはいないといった状況になっております。合格者状況，志願者状況というのは大きくは変わらなくて，関東からの入学者が 40%弱で，東北からの入学者が 35%くらいということで，こちらで 75%くらいで，残りの地域からが 25%前後になっていると思いますので，相対的に少なかった地域からの志願者が，明確にどこかだけがどんと増えたということはございません。けれども，各学部を回らせていただいてお話しする中では，例えば東海地方など学部によってはこれまで志願者が少なかったようなところから受けてきてくれて，かつ実際に私たちが行っていたオンライン進学説明会・相談会やオンラインオープンキャンパスを見たという話を面接の中でしてくれた受験生がいた，というお話は聞いております。

2 点目の 2020 年度オンライン入試説明会の散布図，相関のところに関してですが，参加者は，参加してくださった高校教員の数のデータとなります。

3 点目，オープンキャンパスに関して，どのように他大学との差別化を図っていますかということなんですけれども，まず昨年度，オンラインでのオープンキャンパスを企画，設計するに当たって，ほかの大学がコロナ禍においてどのような形でオープンキャンパスを実施しているのかということの情報収集のところから取組み始めました。その上で，私たちがかけられる予算であるとか，人員であるとか，その範囲内でできる形というものはどのようなものかということを慎重に検討した上で，昨年度のオープンキャンパスは出来上がったものでございます。東北大学の中で，理系の女子学生によるサイエンス・エンジェルという活動があるのですが，このサイエンス・エンジェルによるキャンパスツアーというものを特別コンテンツとしてオープンキャンパスの中にも掲載させていただきました。これに当たっては，男女共同参画推進センターという部局がございまして，そちらがサイエンス・エンジェルの担当部局になりますので，そこに何度か出入りさせていただいて，

実際にサイエンス・エンジェルの方ともお会いして，最終的にはキャンパスツアーという形に決まったんですが，どんな企画が可能かということを一緒にアイディアを出したり，ディスカッションさせていただいたりしました。昨年度であれば，東北大学ならではのコンテンツとしてはそのようなものが挙げられるかと思います。

また，今年度に関しては，やはり一番特徴的なのは，オンラインと対面とのハイブリッドを計画している，予定しているという点が一番の差別化といいますか，特徴というふうに考えられるかと思います。以上です。

倉元直樹教授（討議司会）：

ちょっと補足をさせてください。司会の立場を外れてしまって申し訳ないのですが，今ご質問のあった「広域化」というキャッチフレーズは内部のものなんですけれども，確か，平成 19 年度ぐらいから方針として掲げてきたものです。これはやはり東北大学という大学の立ち位置が非常に関係しています。要は東京じゃないんですよ，仙台は。仙台は仙台。東北地方にあるわけです。当時は東北地方出身者の占める比率が 4 割台だったはずなんですけど，ここ 5 年ぐらいですね，音を立ててという感じで，もう聞こえてくるぐらいに減ってきています。これは，一つはおそらく少子化という要因でしょう。聞いたところによると，九州の少子化はそれほど激しくないんですね，東北地方と比べると。東北地方は激しく少子化が起こってきます。現状，その影響かどうかはまた別なんですけれども，東北地方の受験生にとって東北大の魅力が落ちたわけではなくて，なかなか他の地域に出ていけなくなってきている，学力的に届かなくなってきている，という事情があるんです。

ですので，実は，もう一つ，「特色化」というと「オープンキャンパス」。これはオンラインになるとまた別なんですけれども，これはどうしてもやっぱり地域によって情報の届き方に違いがある。地元はこういう形で支えつつ，ただそれだけではもう大学として今のクオリティーを維持することはできない。なので，今まで目を向けてくれなかった層にも訴えかけていこうというのが「広域化」というキャッチフレーズです。

では，これが直接的な効果としてどう出てくるかというのは，まさしくオンラインという要素が加わった現状としては，これから先ですよね。ただ，そういう努力もしているということです。

久保沙織准教授：

ありがとうございます。

あともう 1 点，ごめんなさい。2 番目の質問が二つに分かれていたと思うんですが，回答が抜けてしまっておりましたので，続けて答えさせていただいてもよろしいですかね。

オンライン入試説明会において，地域ごとに内容を変えていたのかという質問も含まれていたかと存じますが，コンテンツに関してはもちろん入試に関する情報や大学に関する情報の部分は変えておりませんが，導入部分として地域ごとの近年の志願者状況，入学者状況のグラフ等をお示しするなど，その地域の出願状況，志願者・入学者の状況に関して，各地域に沿ったデータを用いた説明をさせていただいておりました。以上です。

末永仁特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

先ほどのオープンキャンパスについて，お二人の高等学校の先生にお伺いしたいんですけど，まず近藤先生，オープンキャンパスというのは情報収集以外に生徒たちが将来どう

生きていくかということについてすごく大きな影響を及ぼしていると私個人は思っています。

それについて，戸山高校では具体的に生徒に対してはオープンキャンパスに対してどういう指導をしているのかということをお伺いしたい。それから，多田先生にも同様の質問をお願いしたいと思います。

近藤明夫教諭：

お答えします。たぶん多田先生の私学さん，または中高一貫と，私たちのようないわゆる公立の3年間の学校というのはだいぶ違うとは思います。うちの場合ですと，例えば運動部で一生懸命毎日汗を流している，高校3年生の夏まで頑張って，さあそこで大学を目指そうって考えて，じゃあどこの大学に行くのがいいんだろうかと，そういうタイムスケジュールでもう全然OKだよと。ですから，あまり早い段階でオープンキャンパスに行って，学校を絞り込むというよりは，とにかく目の前にある自分の興味・関心のあることに一生懸命取組むと。ですので，たぶんほかの学校に比べてオープンキャンパスに行きなさいというような指導は比較的遅いと思います。

先ほどこれが始まる前の段階で久保先生にもお話ししたんですけれども，ただオープンキャンパスがオンラインではなくて実際に行く場合にすごくいい点は，例えば友達2人で東北大学のオープンキャンパスに行く，1人は例えば工学部志望，もう一人はあまり考えてないけれども何となく理系。でも，行ってみて実際にいろんなものを見てみると，彼らが高校生のレベルで知っている学問分野が非常に狭いですから，「わあ，大学へ行ったらこんな学びがあるのか」というのを，何というんでしょうか，掘り起こすというか，そういった場面としてすごくいいなというふうに思っています。ですので，逆に言うとオンラインになると，自分の興味のあるところにだけピンポイントで行きますので，学問分野もあまり広がらないですし，例えば1人は東北大学に行きたいと思っている，1人は別の大学に行きたいと思っている，でも一緒に行ってみたらば「うわあ，東北に行ってみたい」っていう子も生まれてくる。だけど，オンラインだとそれぞれ自分の行きたいところに行ってしまうっていう，そんなあれはあると思います。ちょっとお答えになっているかわかりませんけれども。

末永仁特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

それでは，多田先生，お願いいたします。

多田鉄人教諭：

本校では，もうそれこそ高校1年生の頃から積極的にオープンキャンパスに行くようにということを指導しています。何なら例えばこちらは関西ですので京都大学とかを受ける生徒はまあまあいますから，それこそバス1台チャーターして行ったりとかいうようなこともあります。そこへ行かせていただく目標の一つとしては，生徒たちが大学生になったときの自分を想像できる非常に数少ないよい機会だからというふうに考えていて，私たちのほうとしてはできるだけ入学した後の生徒と大学とのアンマッチを避けられるのではないかなというふうに考えています。実際にその雰囲気を感じてみたりとか，学生さんを見させていただいたりですとか，あるいは大学の先生のお話を実際にお伺いすることで，自分と合っているか合っていないのかということ，特に合っていない部分についてもしかしたら発見があるかもしれないなというふうに思うので，1年生の頃から積極的に行くよう

にということで指導をさせていただいております。

末永仁特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

今度は高校生を受け入れる立場になるんですけど，横浜国立大学ではどういうことを意識してオープンキャンパスをやっていらっしゃるでしょうか。オンラインにこだわらなくて結構ですので，よろしくお願いします。

鈴木雅之准教授：

部局によってやはりその意図とか狙いというのは異なるかと思うんですけれども，何か同じことの繰り返しで大変恐縮なんですけれども，オープンキャンパスで一番狙いとしていることといえば，本学部のやっぱり目標というか目的を伝えるということを特に重点に置いているのかなというふうに思います。もちろん受験生の中には，何でしょう，どこに行くのが自分にとって一番ふさわしいのか，まだ明確でない人もいるかと思います。例えば心理学ですと，なかなかイメージが湧きにくいので，心理学部のような学部のあるところに行ったらいいのか，それとも教育学部にある心理学科行ったらいいのかということがわからないということがあるかもしれません。あるいは，教員になりたいという何となくのビジョンはあるんだけれども，心理学に行ったらいいのか，それとも例えば数学を専門にしながら心理学は空いた時間で自主的に学んだりだとか，授業を取ったりしたらいいのかというふうに，どういう学びをしたらいいのかというのがわからない受験生も結構いらっしゃいますので，そういった受験生に学びの指針だったり将来の展望を開かせるというような意義があるのかなというふうに私自身は考えております。

末永仁特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

倉元直樹教授（討議司会）：

広報をめぐって様々なお話をいただきましたけれども，いよいよ残り時間が少なくなってきましたので，まさしく「コロナ」といえば「オンライン」という，オンラインの話に移っていきたいと思います。

一つは，これ東北大学の方では，昨年度，・・・大学院は別として・・・学部入試をオンラインで実施することについて検討はしたんですけれども，事例がなかったものですから，横浜国立大学と，それから特に九州大学の立脇先生に質問が集中することになるんですが，いくつか拾いますのでお答えいただければと思います。技術的な話が多いです。

立脇先生，一般選抜の追試験において合否判定はどのように行われたでしょうかと。本試験と追試験とでは科目数も異なっていたようですが，本試験の総得点と追試験での総得点を揃えた上で，双方の受験生をあわせて一緒に合否判定をされたのでしょうかと。東北大学でも１名追試験があったんですけれども，本試験と全く同じ科目設定でやっていますので，これは立脇先生にお答えいただこうと思います。

それから，課題図書を用いての事前の小論文提出だと，他者の手が入る可能性があるか

と思います。その点での公正性の確保については何か議論がなされたのでしょうかと。

この2点でございます。立脇先生，よろしくお願いいたします。

立脇洋介准教授：

追試の合否判定に関しましては，各学部で実際行っておりますので，私のほうで完全には把握しておりませんが，科目も違いますし，全体で7人ですので，実際は各学部に1人いるかいないかという規模で行いますので，それぞれの学生に関して合格に足る学力があるかどうかを追試験で課した試験内容の結果から判定をしていくと。総合型とか学校推薦型で実施しているような合否判定に近いようなものにならざるを得ません。

郵送形式の小論文に関しても，これも詳細に関しては学部が持っている情報ですので，私のほうで把握している範囲ですと，当然手が入るということはもう想定はしております。その小論文を郵送にした代わりに，面接試験の中で口頭試問的な要素を入れて，本当にその学生がそれらの小論文の内容について理解しているかどうかというところをあわせて聞くという形で判定をするというふうに伺っております。

倉元直樹教授（討議司会）：

かなり苦労をされているという印象ですね。

2番目の質問は恐らくこれ鈴木先生にも関わってくることじゃないかと思うんですけれども，もう一つ質問がありますので，これはざっくり，選抜方法を変更したことで志願者を選抜する大学側として戸惑った点はあったでしょうかと。これをあわせてお答えいただければと思います。

鈴木雅之准教授：

まず最初の不正といいますか，そういった問題かと思うんですけれども，この点に関してはかなり議論はあったと思います，何でしょう，言い方が悪いかもしれませんけれども，課題型のレポート提出をしてしまうと第三者が書いたものをそのまま出す人がいるんじゃないかとか，盗作の心配があるんじゃないかとか，そういった議論はかなりなされていたんじゃないかなというふうに思います。

私の個人の考え方としましては，非常に何か理想論的で，ばからしく聞こえてしまうかもしれませんが，最終的には信じるしかないなというふうに私は個人的には考えました。例えば調査書一つ取っても，やっぱりそれは信じるしかないなっていうふうに思うんですよね。選抜試験の歴史の変遷の中でも，調査書の扱いとかっていうのはかなり議論されてきたというふうに認識しているんですけれども，高校によって例えば評定のつけ方一つだったり，推薦書の書き方だったり，あるいは本学の場合は教員になりたい人を推薦型選抜では学校長から推薦してもらっているわけなんですけれども，本当に教員になりたいかどうかを確認してくれた上で推薦してくださっているのかどうかというのは実際のところは当然わからないわけなんですよね。すなわち，本年度のこういった提出型の課題に限らず，きちんとといいますか適切に書類等を用意して志願してくれているかどうかというのは，最終的には信じるしかないなという部分は大きいと思っています。

また，もしそういった誰かが書いたものをそのまま提出して入学してきた学生が仮にいたとしましても，やっぱり一番それによって，何と言ったらいいんでしょうか，ある意味では被害を被るのは本人だと思いますので，もしかしたら罪悪感にさいなまれて，ずっと苦しい思いをするかもしれませんし，ミスマッ

チで大学生活が楽しく過ごせないかもしれませんので，そういった点をトータルで踏まえて，やっぱり受験者や，あるいはそれを送り出す高校さんを信じて入試を行うしかないなというふうに私個人なんかは考えたりします。

戸惑いでいいますと，やはり先ほど近藤先生から厳しいご指摘もありましたけれども，部局によってかなり異なるかと思います。例えば教育学部に関して言いますと，もともと一般選抜の個別学力検査ではいわゆる学力試験をやっておりませんので，例えば学力という点だけに関して言えば，教育学部においては恐らく戸惑いはそれほどには大きくなかったのではないかなというふうには思いますけれども，他部局，特に例えば理工学部のような学部ですと戸惑いは大きかったんじゃないのかなというふうに推察されます。

また，同じ教育学部に関して言いますと，これはほかの大学さんでも共通しているんじゃないかなと思うんですが，本学の教育学部の保健体育専門領域ですと，従来推薦型選抜においてはいわゆる関東大会のような地区大会の成績みたいなものが出願要件になっていたりしたんですけれども，いわゆる全国大会ですとかそういったものが行われなくなってしまったような関係で，そういった出願要件を変えたというようなことがあったりします。そうすると，学校推薦型選抜の保健体育領域に関しましては，実技能力を担保できる情報というのがほとんどなくなってしまうといった点で，かなり戸惑いはあったんじゃないかなというふうに，私は保健体育の人間ではないんですけれども，推察しております。

倉元直樹教授（討議司会）：

東北大学としての考え方は，久保先生に振るのはちょっと厳しいかなと思いますので，私が最後にちょっとだけお話しさせていただくとして，高校側からの見方ですね，どう思われましたでしょうか。多田先生から行きましょうか。多田先生。

多田鉄人教諭：

ご質問をすみません，もう一度お願いしていいですか。

倉元直樹教授（討議司会）：

とにかく，今，鈴木先生は「提出されたものは信じる」という姿勢で，・・・公正性に対して疑念があるという観点は分かるけれども，・・・基本的にそういうスタンスで臨んだということでよろしいですね。そのことに関して。

多田鉄人教諭：

それこそ鈴木先生がおっしゃられていることが私個人としても全く同じ思いでいます。もちろん生徒が出願する際には，志望理由書であったりとか，自分でつくったものというのをある程度こちらも見ますけれども，別にこちらが主体として作っているわけでは全然なくて，あくまでアドバイスをすると。何せ入試は本人のものですので，本人が一番書きたいことを書く，やりたいことを書く，行きたいところに行けるというのを何よりも重視しております。本校においては，もちろんですけど全然不正とかはなかったように思います。以上です。

倉元直樹教授（討議司会）：

近藤先生。

近藤明夫教諭：

少し開き直った言い方をすると，推薦入試，推薦型選抜ですね，それから総合型の選抜において，例えば学校間の成績の比較とかはど

うなんですか。言い方は悪いですけれども，例えば同じ4がついていても，ある学校とある学校では学力が大きく違うとかっていうこともあるかもしれません。例えば先ほどスポーツの大会の話がありましたけれども，エリアによっては例えばベスト4に入るまでに2回勝てばベスト4というところもあれば，というようなこともあります。ですから，私自身は個人的には総合型選抜とか推薦型選抜はもうそういうものなんだというふうに思っています。ですから，そこでの公平性というのは逆に大学さんのほうがもしかしたらもう諦めてらっしゃるのかな，くらいに思います。

ただ，調査書に関しては，何か不正をしたりということはほとんどないんじゃないかと思いますけれども，結局 JAPAN e-Portfolio さんがああいう形になったことによって，何でもかんでも高校の調査書で担保してくださいと，エビデンスは調査書ですよという言われ方をすると，高校の現場としては大変困りますし，調査書の電子化が進めば解決する問題かもしれませんけれども，現状の紙ベースの場合だと，各大学さんが例えば備考欄にこういうことを載せてくださいと。じゃあそれは高校入学時から指導要録上にきちんとそれらを全ての子について記録ができるかっていうと，なかなかそれも難しいと。ですので，やはりちょっと今過渡期の中でいろんな整理が必要な段階なんじゃないかなというふうに思っています。

倉元直樹教授（討議司会）：

ありがとうございました。

そうなんですよね。不正をするとかしないとかではなくて，「公平に扱われるのか」ということは、高校側から常に言われてしまう，という話ですね。私ども東北大学は，おそらく，「信じるけれども鵜呑みにしない」というスタンスなんですよ。鵜呑みにしないと言っても，「じゃあ，ぎりぎりそこから詰めて吟味しよう」という方向ではなくて，扱いを適度にするという考え方ですね。

特に，「信じる」という意味でいえば，主体性の評価なんです。これは鈴木先生にもずいぶん理論的にお世話になった部分ですけれども，私どもは受験生を信じる。主体性に関しては「チェックリストで5項目」という形で取り入れました。ただし，これは同点に並んだときのみ，そこの合否を分ける場合にそのチェックリストを使う，という使い方です。書類審査に関しても，一次選考で書類審査だけで不合格は出していません。全て筆記試験がつく形で一次選考している。そういうやり方でもって，おそらくは，出す側の不公平感というのを軽減できているんじゃないかなと思っています。

さて，最後になりましたので，なるべくポジティブに終わりたいと思います。

コロナがきっかけで，半分強制的にですけれども，デジタル技術，オンライン技術というのが教育に取り入れられるようになりました。もちろんプラスの面だけじゃないんですけれども，これからこの技術をどういうふうにしていけば活用できるとお考えになるか。もう時間もございませんので，短いコメントで結構ですから，まず高校側から行きましょうか。近藤先生，お願いいたします。

近藤明夫教諭：

高校は来年から新学習指導要領が始まります。ですから，いろいろ面倒くさいことも多いですけれども，やはり前向きに捉えて，教育が変わっていくいいきっかけというふうに，私も頑張ろうというふうに思っています。以上です。

倉元直樹教授（討議司会）：

ありがとうございます。

多田先生，いかがでしょうか。

多田鉄人教諭：

最後に述べましたが，不登校傾向生徒などへの対応として，学校の新たな価値としてオンライン授業というのは今後使い続けることができるのではないかなというふうに考えています。以上です。

倉元直樹教授（討議司会）：

ありがとうございます

それでは，リモートつながりで立脇先生，お願いします。

立脇洋介准教授：

入試に関して言いますと，オンラインで遠隔地というのがまず真っ先に浮かびますけれど，ただ，それだけではなくて，やろうと思えばいろいろな形での使い方，カメラで撮ったものを後で採点する等も可能だと思います。ただ，それを全てやろうとするのではなくて，やっぱりどこかというところを，今そこの大学，学部で必要なものに特化して実現することが必要かと思います。

倉元直樹教授（討議司会）：

ありがとうございます。

では最後，トリは久保先生に取らせていただきたいので，鈴木先生，お願いします。すみません，ひいきで。

鈴木雅之准教授：

いえ，大丈夫です。ありがとうございます。

すみません，一つだけ補足させていただきますと，先ほど倉元先生が「信じるけれども鵜呑みにしない」という点，私も全く同感でございます。例えば面接で，当然「教員志望ですか」と聞いたら，ほとんどの学生が「そうです」というふうに答えたわけですので，これはくだらない例ですけれども，鵜呑みにしないというのはそのとおりだと思います。本学でも，今日詳細を述べることができないのが非常に申し訳ないんですけれども，やっぱりレポート課題ではかなり工夫を凝らして，鵜呑みにしないための工夫を凝らしております。

すみません，最後の一言なんですけれども，私は去年１年間通して，やはり教育学部にいるということと，私自身が心理学を専門としておりますので，こういったリモートだとか遠隔を経験する中で，教育の本質ですとか，人間関係とか人間社会の在り方についてかなり考えるきっかけになりました。そういった哲学的な部分が学生の生活を豊かにするかどうかはわかりませんけれども，そういったいい機会になるいう部分，どんどんポジティブな面がたくさんあると思いますので，いい面，楽しい面に大学生や高校生，中学生，小学生，皆さんが目を向けてくれるといいなというふうに思っております。

倉元直樹教授（討議司会）：

ありがとうございます。

じゃあ最後，久保先生，お願いします。

久保沙織准教授：

先ほど近藤先生や多田先生からいただいたオープンキャンパスに関するご意見，コメントも含めてなんですけれども，今回私からご紹介させていただいた三つのオンラインによる入試広報活動の取組みの中でも，学内型のオープンキャンパスというのは，やはりちょっと異質な一つの広報活動の形であるというふうに考えております。特にリアルで行うこ

との意義が一番大きな広報活動ではないかなと考えております。

その中でも，例えばですけれども，遠方であったり，1・2 年生の早い段階の方には，最初にオンラインから入って，いろんな情報を幅広く集めていただいて，その上で満を持してオープンキャンパスに来ていただくというようなことができれば，それが最も理想的な形なのかなというふうには思います。先ほどお話ししたサイエンス・エンジェルの方との企画を考える中でも，サイエンス・エンジェルの中のお一人が実際オープンキャンパスでキャンパスに来て，キャンパスを歩いてみたことによって「私，ここで生活するの，いいな」と感じたことで，東北大学に入りたいと思った，受験しようと決意したという声がありました。そういう意味でも，やはり来ることの意義というのは失ってはいけないと思いますので，オンラインと対面，双方の利点を活かしながら，広報活動であれ，実際の入試の業務であれ，高校と大学とのより良い連携につながるように進めていければいいのかなと，希望を持っております。

末永仁特任教授（討議司会）：

それでは，ご登壇の先生方並びにリモート参加の先生方，長時間にわたりましてどうもありがとうございました。

本日のこの討議が，フォーラム参加者の皆様のそれぞれの現場での実践に生かすことができれば幸いです。本日はどうもありがとうございました。

（拍手）

船橋伸一特命教授（司会）：

5 名の先生方、長時間にわたり大変お疲れさまでした。

閉　会　の　辞

東北大学理事・副学長　　滝澤　博胤

船橋伸一特命教授（司会）：

それでは，最後に主催者を代表して東北大学理事，滝澤博胤より閉会のご挨拶を申し上げます。

滝澤博胤理事：

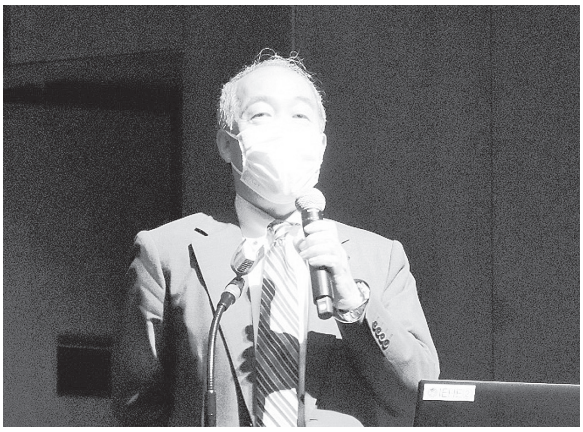
本日，午後1時から4時間半にわたりまして，このフォーラム，ご討議にご参加いただきまして，誠にありがとうございます。

本日，オンラインで参加された方も含めますと500名を超える非常に大規模な開催となりました。改めてお礼申し上げます。

今日，最後の討議のところでもお話がありましたけれども，昨年の今頃は私たちも一体これからどうなっていくんだろう，とまさに思っていたわけです。秋入学の話もありましたし，それから特例追試ですとか，いろんな状況の中でどうやって入学者選抜を行っていくかと，非常に厳しい状況の中で議論をしていた記憶がございます。

そうした中で，今日お話がありましたように様々な展開があったわけでございます。私たちの教育の方法というのも，だいぶ変わりました。そのような中で，何と言いますか，最後の討議にもありましたけれども，・・・この先，おそらくいつかこの感染症を克服する日がやってくるわけですけれども，・・・ここで変わったこと，そして私たちが新しい可能性を見いだしたこと，それはおそらく完全に元に戻ることはなくて，また次の着地点に向かって進んでいくのだと思っています。

私たちも，昨年度オンライン授業を中心に展開していく中で，学生アンケートの中では8割近くの学生から「学習の仕方を考え直す良いきっかけとなった」との回答がありました。また，教員側も「教育の方法論，それを考え直すいい機会であった」と，そのような回答を得た上で，今現在はオンラインと対面を組み合わせた新しいハイブリッド型の講義という形式の中で，国境ですとか時間の壁を超えた新しい教育の展開を模索しているところでございます。



このフォーラムでは，いつも最後に挨拶させていただくときに，このイベントのポスター，これを眺めながら一言感想を述べるというのが恒例となっています。今日はこういう図柄で「コロナ禍の下での大学入試」というタイトルのフォーラムでした。これは非常に難しい写真で，どう解釈していいか分からないんですけど，暗雲立ち込める中でようやく光が見えてきた，この先何かが降臨してきて，新しい時代が始まるんだな，というふうにポジティブに考えたいと思っています。そのためには，やはり高等学校の皆さん，そして大学人との間の，まさに対話というものが非常に大事だと思っています。そのための高等教

育フォーラムでもあるということで，今後も引き続きこの高等教育フォーラムにご参加，ご興味を持っていただきますよう，よろしくお願いいたします。

本日，大変長い時間でございましたけれども，最後までお付き合いいただきまして誠にありがとうございました。引き続き皆さんと対話できるようにしていきたいと思っております。

本日はどうもありがとうございました。

（拍手）

船橋伸一特命教授（司会）：

滝澤理事，ありがとうございました。

以上をもちまして，本日のフォーラムを終了いたします。お忙しい中，最後までご参加いただきまして誠にありがとうございます。

最後に、アンケートのご協力をお願い申し上げます。

講評

講評１：第 34 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

青森県立八戸北高等学校
山本　智也　教諭

1.　はじめに

令和3年度入試は，大学入学共通テストの初年度であり，かつコロナ禍の中での入試であった。この年の受験生は，入学時から様々な不確定な情報に振り回され，現場も混乱した。その中でも何とか受験生が安心して受験できるよう，様々なことに対応しながら行ってきた。今回のフォーラムに参加することで，自分自身の振り返りをするとともに，大学側の視点も知ることができ，今後の入試について考えていくよい機会となった。

2.　基調講演１

コロナ禍における個別大学の入学者選抜
―令和３年度選抜を振り返って―
九州大学アドミッションセンター
准教授　立脇　洋介　氏

立脇先生の講演を伺って，大学側の苦労と真摯な姿勢をうかがい知ることができた。緊急事態宣言下での大学入試をいかに安全に，受験生の負担を考慮しながら，公平に行うかをぎりぎりまで様々な可能性を考え，検討しながら行っていた。特に，入学者選抜方法を変更するにしても，大学のアドミッションポリシーに掲げている力がはかれ，かつ実施可能なギリギリのラインを模索しながら検討していたという点が印象的であった。

選抜するということだけを考えれば，もっと簡単な方法もあったかとは思うが，そのようにせず，バランスを考え最後まで検討したということから，改めて入学者選抜方法・問題は大学から受験生へのメッセージであり我々ももっと研究し，生徒に伝えていきたいと思った。

今回の講演を伺って，初めて大学側の苦労を知ることができた。オンライン受験など新たな入試方法について，高校側（受験生）がどこまでなら実施可能なのか，大学側と積極的に情報交換・共有することが重要であると思った。

3.　基調講演２

オンラインを活用した東北大学入試広報の新たな展開
東北大学　高度教養教育・学生支援機構
准教授　久保　沙織　氏

本講演では，東北大学の広報活動は，省エネ型で行っているということであったが，入試説明会や進学相談会，オープンキャンパスはもちろん，入試においては，得点開示や出題意図の公表など，本当に丁寧に対応しているという印象がある。さらに，工学部では高校生向けに研究内容や学問の魅力についてホームページ等で発信しており，高校生にとっては研究や学問に触れる絶好の機会を頂いている。特に昨年度は，コロナ禍で様々な進路研究の場が失われた。そんな中でオンラインでのオープンキャンパスはとても貴重な場となった。確かに，現地に行って感じることができなかったのは残念だが，生徒はオンラインであっても，大学の先生方や研究内容，学問に触れ多くの刺激を頂いた。

また，入試説明会の時期についても私は適切であったと思っている。確かに内容が固まってからという考えもあるが，昨年度は，センター試験から共通テストに変わる年であり，さらに主体性評価や外部検定試験についてなど，常に変更に伴う不安がついてまわる年であった。それだけに，早く情報を得て，生徒や保護者を安心させたいとの思いがあったの

で，適切な時期だったと思うし，大学の真摯な姿勢を感じた。

今年度は，オープンキャンパスを対面式とオンラインとハイブリッド方式にするとのことだが，高校の現場では，様々な事情により当日会場に行けない生徒もいる。しかし，この方式であれば，そのような生徒も進路研究ができるので，是非今後も継続して頂きたい。

4.　現状報告１について

臨時休校・分散登校の下での「学習の遅れ」の回復

東京都立戸山高等学校

主幹教諭　近藤　明夫　氏

コロナ禍による休校によって，通常の授業ができず本当に大変だったと思う。本校でも休校中の対応やコロナ後の補充授業をどうするかなど，毎日会議が行われており，会議を重ね一つの対応が決まっても，事態が変わり変更を余儀なくされることが多く，日々追われていた。新学習指導要領の中でも，これからは予測困難な時代で，それに対応する力が求められるといわれているが，まさにこのコロナ禍の状況がそれであり，生徒の学びを止めないために，いかに臨機応変に対応していくか，学校や教員の対応力を試されたと思った。

そのような困難な状況でも、戸山高校では休校期間中は学びの基礎に重点を置き，休校が解除されてから授業内容を進めることで、前年よりよい結果を出したのは素晴らしいと思う。今回の発表の中ではあまり出なかったが，学力ばかりでなく，担任の先生方を中心に休校中の生徒や保護者のメンタルケア（不安を払拭し，モチベーションを維持するための）も随分されていたと思うが，そのあたりの話も伺いたいと思った。

5.　現状報告２について

オンラインの現場から

――Web授業のメリット・デメリット――

須磨学園高等学校

教諭　多田　鉄人　氏

須磨学園高等学校では，オンライン授業を本格的に実施したばかりでなく，その結果を詳細に分析したものを教えていただき，とてもわかりやすく参考になった。本校でも，Zoomによる双方向授業やYouTubeによるオンデマンド授業を実践している先生もいたが，休校期間が比較的短かったため，プリントを印刷して生徒に配布して対応する先生が多く十分に行われなかった事もあり，全校で実施した時のメリットやデメリットを検証できないでいた。今後，ICTを活用した指導を展開することを考えると，本報告にある情報はとても貴重であった。

テクニカルの面もそうだが，生徒のメンタルケアについての話はとても貴重であった。特に，生徒に不安を与えないために，学校は通常通り動いているということを示そうと工夫されていたというところは，とても印象的であった。

ここで得た情報を本校でも共有して，全職員がいつでも必要に応じてオンラインで授業ができるようにしたい。

また，ICTの環境が整っているとはいえ，全教員がICTを活用して実施できた理由についても詳しく教えていただきたかった。というのも，本校では一部の教員しかICTは実施しなかったということがあり，全教員が一致団結して行う秘訣があったら教えて頂きたい。

6.　現状報告３について

大学入試における教員としての資質・能力の評価

横浜国立大学

准教授　鈴木　雅之　氏

横浜国立大学は，いち早く共通テストのみで合否結果を決めると表明したが，これは高校としては衝撃的だった。私は，選抜方法や試験問題は，大学からのメッセージと思っていただけに，これでいいのかという思いがあ

った。

しかし，早く知ることで安心して受験に向かえるメリットもある。特に昨年度の受験生は，入学当初から様々と変化がある年だったので，選抜方法を早く決めて公開していただけたのは，受験生の不安を取り除くという点では本当に助かった。

その中で，教育学部は共通テスト以外の試験もあり不思議に思っていたのだが，受験生の安心・安全と学部としての考え，目標を考慮して考えられたものなのだということを知り，納得した。特に，教育学部としての使命や歴史，入学する生徒の現状など，お話を伺って初めて知ったことばかりで，教育学部としての考えがよくわかった内容であった。

普段中々ここまでのお話をすることがなかったので，今後はこのような大学からの情報を集めた上で，生徒への指導にも当たっていきたい。

7. 討議

様々な討議があり，伺って大変有意義だった。中でも一番印象に残ったのは，高校側が生徒を指導する上で大切にしていたこと，そして，大学に求めたこと。一方，大学入試に向けて大学が考えていたことについて，それぞれの先生からお話を伺えたことである。高校側の話として，二人の先生から話があったが，私自身もパネラーの方々と全く同意見だった。生徒が安心して高校生活を送り，受験を迎えられることが第一と思っていた。昨年度の受験生は，高大接続改革によって高校にいる3年間翻弄され続けたからである。そのため，大学には大きく変えず，情報もなるべく早く教えてほしいと思っていた。

一方で大学側からは，3人の先生が話されたが，アドミッションポリシーをベースに，受験生が安心・安全に受験できること，またその試験が公平・公正に行われるようギリギリまで検討していたということを知った。大学・高校双方とも，高校生，受験生への思いが同じだということがわかった。

今後は，今回得られた様々な知見をもとに，大学入試ばかりでなく，オープンキャンパスや入試説明会，個別の体験活動など，高校でのキャリア教育の観点にたって，大学と今後も連携していきたい。

8. 終わりに

立脇先生からも初めにあったが，昨年度は，大学，高校とそれぞれの立場で何とかやりきったと思う。本当にこの状況を如何に切り抜けるか，この年の受験生が不利にならないよう，存分に力が発揮できるよう必死だった。まだコロナは落ち着いていないが，この経験を踏まえて，大学・高校間で情報を共有する場があれば，それをもとに今後よりよいものになると思う。本フォーラムは，その事を気づかせてくれた貴重な体験だった。今後は，より大学と連携・情報共有しながら生徒がよりよい人生を歩めるようにしていきたい。

この度はこのような貴重な経験をさせていただき誠にありがとうございました。

講評２：所感「変わるべきもの」と「変わるべきでないもの」

岩手県立黒沢尻北高等学校
小田島　淑人　指導教諭

1. はじめに

恥ずかしながら（オンライン参加であるにもかかわらず），フォーラム当日12;00からの事前打ち合わせに遅刻。Zoomでの接続がはじめてのデバイスを使用したためのトラブルが原因であった。事前の準備が不十分だったことを痛切に反省。ただトラブル処理は非常にスムーズにでき，2～3分の遅刻で済んだ。本来的にPC音痴である筆者がこのようなことを一人でこなすということは1年前には考えられないことである。Zoomでの会議などを数多くこなさざるを得なくなったこの1年間の修行（？）の成果である。これひとつをとっても我々を取り巻く環境が新型コロナウィルスによって大きく変わったことを示している。

われわれですら，このような変革を経験した1年であったが，昨年度の高校3年生にとってはさらにすさまじい1年であった。大学入学共通テストをはじめとする大学入試改革（と数々の導入断念）だけでも大激震の令和3年度入試だったのであるが，最後に迎えた超ド級のビッグインパクトが「コロナ禍」であったろう。

筆者が勤務する岩手県はおそらく昨年度において全国でもっとも学校休校の影響が少なかった都道府県である。しかし，昨年2月末の全国一斉休校以降の一連の流れの影響が全くなかったわけではない。中でも大きかったのは4月半ばに発表された「県高校総体の中止」であった（この時点で岩手県は授業を再開していた。にもかかわらず全国に先駆けての中止発表）。例年，岩手県の3年生運動部員は5月末の県高校総体で部活動の集大成を迎え，そこで全力を出し切って引退し，本格的な受験勉強生活に入る区切りとする。岩手県は他県に比較して運動部の活動を最後まで成就する生徒の比率が非常に大きいため高校総体前は一種異様な盛り上がりを見せる（このことによって受験勉強を始めるのが遅くなっているは事実ではあるが，逆に文武両道をしっかりと最後まで実践する生徒を指導できるのはわれわれ岩手県の進路指導に携わる教員の深く喜びとするところである。批判もあるところではあるが，決して消えてほしくない岩手の高校文化であると考える）。ところが，この一大イベントが突然生徒の目の前から消え去ってしまった。筆者の勤務校でも中止発表の翌朝生徒たちが部ごとに集まり行き場のない思いを胸に悔し涙に暮れており、その光景には筆者も涙を禁じえなかった。その状況を目の当たりにして当時の3学年長が急遽学年集会を実施，号泣しながらみんなでこの事態を乗り越えていこうと訴えた。そこから3学年団は生徒の受験勉強への切り替えを促すべく，すさまじい数の個人面談を実施（朝･昼･放課後ほとんど担任は休みがなかった）し，生徒に寄り添うべく奔走した。その甲斐もあって，生徒たちは例年通り，いやむしろ例年よりもスムーズに受験生生活に切り替わっていった（この時も生徒たちの健気さに3学年団は涙･涙であった）。

しかし，問題はここで終わらなかった。総合型や学校推薦型選抜を志望する生徒たちは，コロナ禍で独自の取材ができない。ネットや書籍などで情報不足を補おうとするが，そこにも限度がある。なかなか志望が深まらない。また，スムーズに切り替えが進んだ分だけ例年より長い受験生生活を送ることになり，秋のころには生徒たちに疲労感が顕著に目立つようになってきた（毎日保健室が3年生で満杯

になった）。そしてこの疲弊感は生徒だけではなく春からフル回転で走ってきた教員側にも表れてきた。特にリモート面接のへの対応や調査書の変更等コロナ対応や新入試のシステム的な部分で気を遣わねばならないところが数多くあったことはその原因の一つである。

このような中で何とか終えることのできた令和3年度入試であった。しかし，このイレギュラーな年を誰かが総括しなければならない。大学や他の都道府県の高校ではどのような思いで昨年度入試を行い，あるいは受験し，どのように総括されているのか，を確かめたく今フォーラムへの招待参加を受けさせていただいた。

以下，今フォーラムの中で筆者なりに捉えた論点を3つ取り上げ，そこに関する所感を記すことによって，講評とさせていただきたい。

2. 「受験生への負担」について

九州大学立脇先生の基調講演中で入試方針の検討の際に「受験生の負担」を考慮したことが挙げられた。大学側が明確にこの視点を失わないでいてくれたことにまずもって大きな安堵感を覚えた。受験生への負担が「過度にならず」「一律に近いかたち」となることが理想であることは言うまでもないであろう。一見当たり前のことに見えるのだが，今般の大学入試改革においてこの視点が決定的に欠如していたことが，数々の混乱を生んだということを忘れてはならない。当初段階での共通テストの複数回実施や英語外部検定結果の導入など，いたずらに受験生の負担を増やす内容であり，経済的に恵まれない，地理的に不利な条件にある，部活動等をがんばっていて時間に余裕が持てないといった生徒たちには著しい負担が生じる中身ばかりであった（逆にあの制度がすべて実施されていたら，受験の勝者は経済的に裕福で，都市部在住の，学習環境の整っている生徒たちに限定されるということになる）。

昨年度の場合で受験生にかかった負担は数多くあるが，まずは受験地までの移動があった。感染のリスクを考えて受験を断念したケースはゴロゴロあった。また，「移動による感染に不安がある場合には，私立大学の共通テスト利用入試を積極的に活用するように」との指導をしたが，おそらく共通テスト利用入試は出願者が増加するであろうから合格をとるのが容易ではなく，出願数を増やさざるを得ない。その結果受験料の負担が重くなるのはやむを得ないと考えたが，これも妥当であったかどうか。高校現場ではフォローに悩んだケースであった。

オンラインによる受験に関しても，接続がうまくいかなかった場合の指示などは出されていたが，実際に初めて受験に挑む生徒たちは「何か失敗があったらどうしよう」「機器などに不具合があったらそれで不合格になるのでは」というプレッシャーは少なからず感じていたようである。大学の中には「接続がうまくいかなかった場合には不合格」ともとれる文面を出したところが存在したこともそのプレッシャーを増幅させる一因となった（この文面はすぐに撤回されたのだが･･･）。接続テストの実施により生徒は安心することができたとのことであったが，試験が始まると他人は実施している部屋に入れないという指示があったところがほとんどであったため，保護者の心理的不安も大きかったようである。

このような予期できないことに対応するため，教員の側の負担も大きかったことは否めない。勤務校ではオンライン面接対応のために急遽カメラを購入したものの，学校における通信環境が信頼に耐えるものではないとの結論に至り，オンライン関係はすべて生徒個人が手配することとしたが，この間のドタバタは大変なものであった。

通常の年であっても，概して地方に生活する受験生ほど負担が大きくなりがちであるが，昨年度においてはその傾向が一層強かったということは言えるであろう。その負担軽減についてほかの大学ではどのように考えていた

のかについては，ぜひ今後も伺いたいところである。

3. コロナ禍における授業の在り方について

現状報告において戸山高校近藤先生，須磨学園多田先生それぞれよりの報告を伺ったが，まずはお二方とも昨年度1年間の総括を生徒・教員へのアンケート等を通じてしっかりと行っておられたところに感服した。勤務校では休校の影響が少なかったとはいえ，眼前のことに手いっぱいとなり，気が付いてみたらすべて終わっており，総括しようにもアンケートを取るべき生徒はみな卒業していた。イレギュラーな1年であったが，それでもしっかりと検証を加えようとする姿勢に発表の2校の強靭な背骨を垣間見た思いがした。

戸山高校においては，対面授業と紙ベースの課題が中心となっていったとのことで，結果的に自学自習の時間が取れ，既習事項の復習をしっかり行うことができ，秋以降の学習につながった旨のお話があった。これに関して言えば，大概の学校では自学自習の習慣と基礎的な部分が身についていた生徒は休校中に伸びたという感触を持っていたのではないだろうか。近藤先生は「油断があった。4月にバタバタした」ということを述べておられたが，むしろその前に骨太の学力を十分につけさせていたことによって，このような事態が起こってもしっかりと対応できる生徒を育成できていたことこそが称賛されるべきことと思う。ただ，自学自習のやり方が身についておらず，それによって力を伸ばし切れていない生徒たちは授業が少なくなった時期の伸びがより少なかったと推測している。そこについては，他校の先生方にもご意見を伺いたかったところである。

また，オンラインに積極的に取り組んだ須磨学園多田先生の発表は非常に興味深かった。今まで目にしたものではオンラインのメリットを取り上げたり，このようにしたら上手くいったというものが非常に多かったが，本報告ではデメリットに大胆に踏み込んでおられる。「真の学力養成は難しかった」「定着率はよくない」「目や耳に負担がかかる」「周囲の様子がわからない」「準備に4～5倍の時間がかかる」などである。そしてそこから出てきた課題を挙げておられたが，この点を解決しないといつでも使えるものにならないという意味の問題提起として非常に重要な報告であったと考える。昨年度の実践は大変な負荷のかかったものであったと推察されるが，デメリットをあえて赤裸々に示すことで「学校は動いている」を体現しておられること，そして新型コロナにかかわらず「学校の新しい価値を作る」ことを実践しておられることをまざまざと見せていただくことができた。

4. 入試における妥当性と信頼性について

昨年度入試において個人的に注目した部分の一つが，「何を残して何を削るのか」である。

秋ごろから流れていた話に「共通テストは確実に実施されるであろう。ただし，国公立大学の個別試験は実施されずに共通テストの点数のみで合否が決まることもあり得る」「だから，例年よりも共通テスト（前年までであればセンター試験）に注力した対策をすべきである」というものがあった。共通テストは住所地の都道府県での受験で移動が少なくて済むが，個別試験は受験生の大掛かりな移動を伴うからというのがこの話の根底にあった。前述のように地方では受験地に赴くというのが受験生の大きな（心理的）負担になっていたため，この話はリアル感を持っていた。

7月末の時点で横浜国立大学から個別学力検査を実施しない旨の発表があった際にはさすがに驚いたが，信州大学・宇都宮大学で話が出たときには「やむを得ない」という声と「それはあり得ないだろう」という声の賛否両論が周辺であった。今回の討議の中で立脇先生がおっしゃっていたことから，大学側でもそ

この葛藤はかなりあったことが窺えた。学生の質の確保という点からすると譲ることのできる部分とできない部分がどこなのかということを問われたのだと思う。それに対する高校側の声を代表するのが近藤先生の「フェアであればよい」という言葉であろう。

個人的には「東北大学は個別試験をやってほしい。あの試験を受けないで合格者が決まることはあり得ない」と考えている。地域のトップ層の生徒が、個別試験問題を大学からのメッセージと受け止めて下級生時から必死に取り組んできた。それを見ると，やはり個別試験をやらないというのは考えられない。ただ，（さまざまな事情により）受験に行くことができなかった生徒もいる。そのような生徒がいることを考えると個別試験を不要とする大学があるなどの多様性が担保されることはあってもよい。要は，その大学への合格を目指して取り組んできたことが，できるだけ無駄にならず，しかも早めに公表されてほしい。そういうことを一切合切含めて「フェア」であってくれることが高校側としての譲れない部分であると考える。

また，「何を残すか」の部分において興味深かったのは横浜国立大学である。大学とは基本的に学問をするところであり，将来の職業と直結する必要はないというのが筆者の常日頃からの考えであるが，例外というべきなのが医学部医学科や看護学科など医療系学科，法学部法学科，そして教育学部教員養成課程といった職業人養成を前提とした資格系の学部学科である。私見として，これらの学部学科における入試は，就職試験･採用試験を兼ねる適性試験的な意味合いを持つ必要があるのではと感じていた。今回の鈴木先生の発表で，このことに関する大学での視点がよく分かった。「熱意･愛情･人間性」といった項目は，大学入試においては測れない項目と考えていたが，ここに関して評価を行おうという取り組みは非常に野心的に感じた。さらにコロナ禍の入試でも極力ここに留意しておられたことは印象深い。このようなアドミッションポリシーと評価方法が浸透すれば，高校現場において医療系や教員志望の生徒に自分の適性についてより真剣に考えることを促すことにつながると思われる。個人的には，過疎化が進む地方において高校ができる最も有効な地域貢献とは医師と教員志望の生徒の養成と考えている。そういった視点からも資格系の学部学科においてさらに進めてほしい事項と考える。

5. 終わりに

「コロナ禍の下での入試」だったが，その中で炙り出されてきたものは真に大学入試とはどうあるべきなのかということではなかったか。変わっていく必要のあるもの，そして変わってはいけないものという両者を大学･高校それぞれがそれぞれの立場で選別することを迫られたのが令和3年度入試だったのではないのだろうか。その意味では「この先どのようになってもできるような形にした」との横浜国立大学の考え方は変わるところはやむを得ず受け止めるが，その中で変えられない部分をきちんと残した結果そのようになった，と読み取ることができる。九州大学からは「共通テストが中止になるということは一大学の判断を超えることであるため，6月の時点では検討しない」という話があったが，逆に共通テストを選抜方法の中に有機的に組み入れているという自負が垣間見えた。また東北大学が昨年度に各高校対象に行ったアンケート（受験生の移動が難しくなった場合の2次試験実施形態に関して）の内容から，東北大学は2次試験の内容に不動の自信を持っているとのプライドを感じることができた。

初めてこのフォーラムを訪れた数年前は「合格者を増やすための情報交換」くらいの軽い気持ちで参加したが，大学入試を研究することを通して大学における高等教育はどうあるべきなのか，ということを深くえぐりだそうとしていた会場の熱気に感銘を受けて帰

路についたことを思い出す。今回も最後の討議の際に倉元先生が問題提起された「高校が大学側に求めたかったもの」「大学側の気持ち」での熱い議論が特に印象深い。個人的には昨年7月の時点で大学側が考えていたことと高校側が求めていたものには乖離が生じており，ここをすり合わせることができれば受験生はいくらか安心して受験に臨むことができたのではないかと感じた。惜しむらくは，このテーマについてさらに突っ込んだ議論がなされれば，さらに両者の益となったものと思われる。

最後にこのような状況下において，ぎりぎりの時点まで開催方法について検討を重ね開催にこぎつけられた本フォーラム事務局の運営スタッフおよび貴重な報告を寄せられた登壇者のみなさまに満腔の敬意を表したい。今年度もまた，高等教育とは何かについて考える視点を与えていただき，そこにふさわしい生徒を育成するためのヒントを得ることができた。次回以降のさらなる発展を祈念して拙稿を閉じることとさせていただきたい。

講評３：第34回東北大学高等教育フォーラムに参加して

宮城県宮城野高等学校
菊地　敏広　教諭

1. はじめに

あの震災から10年が経過し，不十分ながらも復興の形も見えてきた2020年。高大接続改革に伴う大学入試改革を受け，そのねらいと実際の運用との間に大きな隔たりを感じていたこの数年。そして新型コロナウィルスのパンデミック。湧いて出てくる様々な難題を時には受け止め，時には受け流しながら生徒指導にあたってきたような気がする。これほど我々教員が試された10年はなかったかもしれない。この約1年半の間に我々教員は「生徒のいない学校」を経験し，「学校とは何か」を改めて考えさせられた。このような状況において様々な問題が顕在化した。その一つが「公平性」であった。あの時期，生徒たちの学習の場は「学校」から「自宅」に移り，課題プリントやオンライン授業が平時の授業の代わりとなった。高校でも徐々にオンラインによる教育システムが構築されていったが，生徒の学習環境は家庭ごとに異なる。使用するデバイスも違う。コンピュータやパッドでは視聴しやすい配付資料や板書内容も，スマートフォンの小さな画面では見るのも困難であろう。オンライン環境も様々で，結局のところ各家庭に金銭的負担を強いることとなった。そして大学入試。学校推薦型選抜では，大学からオンラインによる面接試験の高校実施を打診されたりもしたが，その対応にも若干苦慮した。高校を試験会場にした場合の責任の所在が曖昧だったからである。結局受験生がそれぞれの自宅で受験したのだが，もし自宅で受験できない生徒がいたらどうなったか，などといった疑問も残る。

今回のフォーラムでは高校側と大学側双方からの現状報告がある。私が昨年まで勤務していた高校での対応がどうだったか，を総括するために参加させていただいた。そしてコロナ禍における高大接続の諸課題について，何か一つでも多くのヒントを持ち帰りたいと思う。

2. 基調講演１について

九州大学　立脇洋介先生

前提として，大学入試における公平な受験機会は受験生の権利であり，入試を実施する主体はそれを保証しなければならない。その原則がコロナ禍における入試に大きな影響を及ぼすこととなる。大学入学共通テスト（以下共通テスト）ではコロナ感染者のために別日程が追加されるなどの措置がとられたが，その結果非常に複雑な実施形態となった。個別試験においても極度の緊張を強いられた入試だったと推察する。各大学では幾度も会議を重ね，複雑なフローチャートと格闘されてたことだろう。7月以降に発表された募集要項も幾度となく変更された。高校でも，日々送られてくる募集要項の変更内容を整理し，受験生に正しく伝えなければならなかった。しかし私自身も100％それを理解できた訳ではなかった。それほど多かった。

九州大学は，旧帝大時代から踏襲されている伝統を守る一方で，共創学部などに象徴されるように，時代に対応した新しい大学の有り様も提起している大学だと認識している。入試についても学校推薦型選抜，総合型選抜，一般選抜があり，それぞれの入試で選抜方法も異なる。多様な学生を求めてのことと推測する。その評価の一つである面接，口頭試問が従来通り実施できないとなったとき，さぞ苦労されたことだろう。九州大学は，オンラ

イン入試の導入に際し詳細なガイドラインを作成されたとのこと。また，学部入試の前に大学院入試があり，そこでオンライン入試のノウハウを蓄積されたそうだ。さらに，様々な高校にもオンラインに関するヒアリングをするなど，試験当日に想定されるトラブルを極力排除しようと努力される姿に感銘を覚えた。実際にはオンラインのトラブルは発生せず，公正な入試が実施できたという。

立脇先生の話を伺ううちに，いかに大学が綿密に，慎重に入試を計画・実施してきたかが分かる。私が先に述べた「公平性」に関する疑念はほぼ払拭された。受験生を公平に選抜していただいているということを改めて確認でき，高校教員としては感謝の言葉しかない。ただ，先にも述べたように，高校でオンライン面接等を実施する際の責任の所在については，大学側でも今後十分に検討していただけるとありがたい。また入試が実施できないという最悪なケースもあったかもしれない。そのような緊急事態をどのように想定されていたかも伺ってみたかったところである。

3. 基調講演２について

東北大学　久保沙織先生

私の前任校は，東北大学への進学希望者が学年の約半数というような学校で，まずは東北大学を知ることが学問への第一歩となる。例年，7月下旬に行われるオープンキャンパスはほぼ全生徒が参加し，その調べ学習が「総合的な探究の時間」の単位の一部となる。しかし，昨年度はオンラインのオープンキャンパスとなった。私見だが，前任校の生徒にとって教育効果が薄まったのではと不安を感じていた。オープンキャンパスは現地を訪問することがほぼ9割だと思っているからである。実際に研究室の先生方やボランティアの学生たちから研究や学生生活について話を聞くことで，高次の進路意識が涵養されていく。これは高校教員にはできないことである。

さて，久保先生の話では，オープンキャンパスのオンライン化によって新たな効果があったという。例えば，その参加者のエリアが拡大し，今まで東北大学を知らなかった高校生にも大学を知るきっかけとなった。新たな時代の「門戸開放」となったのだ。全国的な広報活動を積極的に行ってきたと伺っているが，オンライン化との相乗効果により「東北の大学」というイメージからは完全に脱した感がある。これは東北の受験生にとってはかなりの脅威である。

また，7月には教員対象の「オンライン入試説明会」が実施された。大学入試について不安しかない状況で，大学側からの情報発信は高校教員にとっては一筋の光明であった。長期間に渡り数多くコマを設定していただいたことで参加しやすかった。私自身もその情報を元に，自信を持って進学指導をすることができた。大学からの情報発信は高校側にとってはこの上ない貴重な「エビデンス」なのである。

話は変わるが，昨年10月，読売新聞社主催「医療体験プログラム（未来の医療を創る君へ）」というオンラインによる講義があり，3回目は東北大学医学部によるものだった。途中，参加者からの質問にも対応していただくなどして，双方向の情報交換ができた。前任校でも多くの生徒たちが参加していたが，全国からも多数の高校生が参加しており，東北大学の知名度の高さを改めて実感した。研究者から直接話を伺う貴重な機会となったのだが，その内容，対応も申し分なく，東北大学を目指す受験生が増えるのも当然であろうと思った。受験生がその大学のどこに魅力を感じるかというと，受験生に魅力的に映るコンテンツ（先生方も含め）がその大学にあるか（いるか）どうかということだろう。先進的な研究内容の紹介やニュースで取り上げられた話題なども「オンラインオープンキャンパス」や「オンライン進学説明会・相談会」とうまくリンクさせていけば，一層充実した広報活動となるかもしれないと思った。

4. 現状報告１・２について

東京都立戸山高等学校　近藤明夫先生
須磨学園高等学校　　多田鉄人先生

昨年3月の頃を振り返ると，学校現場では学習の遅れをどう取り戻すか，が大きな課題であった。共通テストやその後の私大入試，個別試験を考えると，年間行事の大幅な組み替えが必要だった。当然授業の形態も変わった。前任校ではまずは紙ベースによる自宅学習の体制を整えつつ，徐々にではあるが動画による授業もアップされていった。

今回，東京都立戸山高校の近藤先生からは，東京都の深刻な状況について話を伺ったが，感染者数が激増する現場でさぞ苦労されたことだろう。休校や分散登校による学習の遅れを，まさに休日返上で取り戻そうとするその気概には感服するしかない。結果的には進学実績も例年通りということで，その努力は報われた形だ。一方，生徒にとって休校期間はどうだったのだろうか。極めて不安な社会情勢に身を置き，様々なことを考えたことだろう。戸山高校の生徒アンケートにも「自らのアイデンティティを考える機会となった」との感想もあった。生徒にとっても振り返りの時間だったのかもしれない。

須磨学園高校の多田先生からは，「学びを止めない」ための実践例が紹介された。3月から授業の録画配信，4月には授業のライブ配信を始めた。全国的に3月2日からほぼ全国で一斉休校が始まったわけだが，その2週間後には授業を配信している。この対応の早さにはただただ驚かされる。しかし，それなりのデメリットもあったようだ。スマホやコンピュータの画面を長時間視聴することで，生徒の眼精疲労を危惧されたようだ。眼の負担を軽減するために，演習を増やすなどして画面を見る時間をコントロールしたという話は，実際にやってみないと出てこない問題であろう。当面コロナが落ち着くまではオンラインも活用しながらの授業になるだろうが，コロナが収束した後も，この時期に培われた様々なノウハウが別の形で生かされていくような気もする。完全オンラインによる高校なども想定されるであろう。不登校生徒がオンラインで久々に授業を受けられたというニュースもあったくらいだ。需要はある。

5. 現状報告３について

横浜国立大学　鈴木雅之先生

横浜国立大学が個別学力検査を実施しない，というニュースは高校現場に衝撃を与えた。正直複雑な思いであった。本当にできないのか，という疑問。特に理系学部において，数学Ⅲなしで合否を決めるはいかがなものか，などなど。そのあたりの内部事情にも非常に興味があった。

さて，教育学部の鈴木先生は，この問題からは若干距離を置く。教育学部では共通テストのスコアの他に，受験生に動画や小論文を事前に提出させることで，従来の入試に近づけたようだ。また，オンラインによる面接も問題なく実施されたようだ。受験生の公平性も最大限保たれているように思える。ただ，後の討議において，事前に提出された出願書類の信憑性について話が及んだ。本来は入試として課す小論文を事前に提出するとなれば，様々な意味で疑義が生じる可能性がある。しかし大学では「立派すぎる文章」でも受け入れるしかないという。またそれを確かめるための面接なのだとも。高校ではどの程度出願書類を「整える」か，は担当者次第である。私の場合，礼法指導等は別にして，志望理由の核となる部分を「創作」することはあまりせず，受験生自身が持っている資質・才能を本人に気づかせるに止めている。ただし，その気づきが出願後の時もあり，志望理由書の内容が面接で話す内容と違ってしまうこともあるのはここだけの話。

6. 討議

この非常事態下において，高校側からは，

入試制度をあまり変更しないでほしいという要望があった。それには高大接続改革による入試制度の変更も含まれているのだろう。共通テストの記述式問題や英語外部検定試験の導入は，その準備段階からほころびが見え始め，結局コロナと関係なく中止（延期）となった。調査書の書式変更も負担が大きかった。新書式の詳細がなかなか決まらず，調査書作成システムを外注している宮城県の高校は何もできなかった。JEPをはじめとする「ポートフォリオ」構想とは一体何だったのだろうか，と今でも思う。国立大学の個別試験の扱いについてもその対応が分かれた。横浜国立大学はいち早く個別試験を中止したのに対し，九州大学，東北大学は従来型（対面型）の入試を実施した。戸山高校の近藤先生も言われていたが，高校側からすれば個別試験は是非とも実施してもらいたいというのが本音ではないだろうか。難関大学の受験生にはそれなりの実力を身につけてから大学生になってほしいというのが高校教員の切なる願いである。

募集要項をもっと早く，との要望もあった。決定稿ではないにしろ，7月には各大学の募集要項が発表され始めた。これ以上早めるのは不可能だと思う。前任校も6月から一斉登校が始まり，タイミング的にはちょうどよかったと思う。またその時期に東北大学には「オンライン入試説明会」を実施していただき，参加した3学年団の雰囲気も変わった。それに引っ張られた生徒もスイッチが入り，ようやく受験モードに切り替わった。

各大学のオープンキャンパスへ積極的に生徒に参加させている高校は多い。そういう意味では大学を広報する手段としては有効であろう。近藤先生からは，オンラインによるオープンキャンパスは個人で得られる情報が限定的であるのに対し，訪問型のオープンキャンパスは，複数人数で回ることで友人の情報も共有でき，視野が広がるのではという指摘がなされた。まさにその通り。参加者にとって引き出しの多いオープンキャンパスであることを望むばかりである。

7. 終わりに

日本国内では現在でも変異種の脅威が出始め，先の見えない状況ではあるが，ワクチン接種も始まり，少しずつではあるがゴールが見え始めている。宮城県の高校に限っていえば，様々な制限は残っているにせよ，学校自体はほぼ平常に戻っている。このままいけば，おそらく令和４年度の大学入試も従来の形に戻るだろう。そう考えたとき，この2年間は果たして何だったのだろうか。天災と言ってしまえばそれまでだが，私たちはそこで得られた教訓なり技術なりを平時でも生かせるようにしなければならない。急速に進むオンライン環境にも対応していかなければならない。

最後に，このような貴重な機会を与えていただいた東北大学のフォーラム関係者様，今回貴重なご意見をくださいました発表者の方々に深く感謝を申し上げます。このフォーラムが今後も末永く開催されることをお祈り申し上げます。

講評 4：第 34 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

秋田県立秋田高等学校
澁谷　明人　教諭

1. はじめに

今まで秋田県という地域性もあり，フォーラムに毎年参加するということは叶わないものでした。正直にいうと，入試制度やその改革については受け身でしかなく，意見を持ったり，考察したりするものではなかったように思います。しかし，昨年来，コロナ禍という状況の中，オンライン参加が可能となり，このような教育改革や大学入試制度への変化に対する取り組みの本質に触れ，考察や検証する機会を得ることができるようになりました。普段であれば，本校の代表者が参加し，その報告書を読むという流れでありましたが，第一線で頑張っていらっしゃる方々の基調講演を直接聞くことができるようになったことは，自分自身の成長にもつながるものとなりました。また，今年度はハイブリット方式での実施を実現していただき，昨年同様オンライン参加ではありましたが，大会の臨場感を味わうことができたことは喜ばしいことであります。また，招待者という立場でありながら出張の許可が出ず，落胆していたところでしたので，学ぶことの多い貴重な時間を過ごすことできたことに，心より感謝いたしております。

2. 大学入試制度改革をどう受け入れるのか

現場の教員の中では，経験主義が蔓延しており，ここ数年入試制度の変化を受け入れず，すぐに対応しようとしない教員が多かったように感じています。変わるということを頑なに拒否するような姿勢であり，変わることが悪いかのような発言や態度をとることが多勢となることも多かったように思います。さらに，制度の変わり目は，根拠が少なく，説得する材料が全くなかったりと改革へと対応するための足がかりを現場に浸透させることは雰囲気的にも難しいものでありました。まして，昨年度まで導入しようとしていた記述式や外部試験など実現が難しいという雰囲気が漂う状況の中では，工夫した授業作りや生徒が対応できるよう出題を工夫するなど必要以上の労力を要するものを浸透させることは皆無に近かったように思います。そして，思考力や読解力を問うような形式に変わった大学入学共通テストに関しても『こんなの解く意味があるのか』というような意識でしかなく，問題分析をし，生徒に還元するような努力もしないようなありさまでした。利己主義過ぎるのか，変化を嫌うのか，働き方改革のみを優先するのか，理解できないことばかりが目立ちました。さらには，まったく問題を解かず意見や批評ばかりで，制度ばかりを批判するような姿勢にはどうしても納得がいかないものがありました。私自身、学年主任，進路指導主事という立場を経験する中で，生徒のために正しい判断を迫られるようになり，物事を落ち着いて考えるようになりました。新しい情報や変化はまずしっかりと受け入れ，すぐには行動せず，意見をもたず，沈黙と静寂を創りながら自分自身の言葉で表現できるようになるまで，じっくりと考察するようにしました。いま目の前にある現状と比較し検証する必要性があるものはならば，さらなる情報を得ることを優先しました。今回のフォーラムのような基調講演や各大学の広報活動などを聞くときも，批判や否定から入るのではなく，その講演に至るまでの背景や現状をしっかりと把握する姿勢をもちながら傾聴するようにし，その上で，自分の意見をしっか

りと明確にするように心がけるようになりました。

『検証　コロナ禍の下での大学入試』をテーマに登壇していただいた方々の言葉を思い出しながら講評を書きすすめています。それと同時にコロナ禍の下で右往左往しながら対応していた自分を回想しつつ，衝動的な拙文の進行を止めることができないもどかしさと，読み返しての反省を繰り返すばかりの愚一教師でありますが，教育に携わる責任と思いを綴らせていただいております。

3. 基調講演を聞く中で

立脇先生の講演では『高校と大学が頑張った』という言葉に励まされながらも『公正・安全・負担』3つのバランスというコロナ禍の中での基本姿勢に納得していました。また『早期の情報』と『変化を回避』を天秤にかけながらも，受験する側を意識してくれていたことを感じました。そして，入試という『枠組み』の中で『個別』の重要性を維持するために努力し続けてくれたことが伝わってきました。

久保先生の講演では，コロナ禍で生じたお互いのジレンマの中で『早く正確な情報』を届けたかったという強い思いがあったことが伝わってきました。さらに方向転換を余儀なくされながらも『受験生を護る』という意識の下での受験準備と『我々の不安』を取り除き安心できる受験を準備したいという東北大学の取り組みを改めて実感できたように思います。また，大学入試制度や東北大学が『どう変わっていくべきなのか』と今まで以上の工夫をしていくという強い意志を感じることができました。東北地区にある我々もその微妙な変化を逃さずに感じていく姿勢を持つことが大切だと改めて感じる機会となりました。

2つの基調講演を聴くなかで感じたことは，我々もただ単に要求するだけでなく，大学の対応や情報を得て，冷静に状況を見つめることや，今回のコロナ禍のような変化にしっかりと対応できるような準備をしてくことが大切であることを改めて考えるきっかけをいただいたと思っています。

4. 現状報告を聞く中で

近藤先生の講演の中で，事例報告という形で現場での対応を聞かせてもらいましたが，首都圏の学校の大変さを目の当たりにすることとなりました。生徒の学力の保証のために手探りで奔走する姿が見えるかのようでした。設備も完備されていない中での『努力する姿』が生徒たちの心を動かし，同時に教員の絆も深めのだと思いました。

多田先生の講演では，私立高校ということもあり，公立高校ではすぐにできないような設備の充実などの対応の早さに驚きながらも，そのことに満足せずに工夫を重ねながらより良いものを生徒に提供しようとする姿勢を感じることができました。特に，アンケートを実施することで，しっかとり生徒の声を聞き，状況を分析しながらの対応を重ねたことに敬意を払うだけでなく，今後，休校になったことを想定しながら，対応を考えている我々にとってとても参考になる資料を提供してくれたことに感謝いたします。そして最後に印象に残ったことは『友達と話すだけの日』を作ろうかと職員間で検討したことでした。オンラインだけでは希薄になることが大きな問題となることを想定させていただきました。

鈴木先生の講演では，入学するすべての学生たちを『教員』として送り出すための工夫や試みがあることを教えてくれました。また，選抜方法の段階から意識を向上させようとしていることに驚きました。我々現場の教員としても後継者を育てなければという『思い』があり，教員としての使命感や人間性のような『心』をもった生徒を育てて送り出したいと改めて感じることとなりました。

5. 最後に

昨年度，倉元先生を講師としてお招きし，

本校で初めての企画となる『東北大保護者説明会』を実施することができました。『コロナ』という理由ですべてが中止になっていた状況から脱却するきっかけとなり，暗闇の中からようやく『光』が見えた瞬間だったことを思い出します。

現在ワクチン接種が始まり，また新たな『光』が見えようとしています。皮肉にも教育現場に立ちはだかっていた変化を嫌う『壁』を『コロナ』で加速した『強い思い』が壊してくれたように感じています。この勢いを失わないようにこれからも心がけていきたいと思います。

講評 5：第 34 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

山形県立東桜学館中学校・高等学校
髙田　悠幾　教諭

1. はじめに

今回のフォーラムは，コロナ禍で学校教育が大きく変わった2年目に行われた。多くの活動が制限される中，オンラインで行われる授業や講演，オープンキャンパスが高く評価され始め，リモートで行事を遂行することも可能な世の中になってきた。コロナを契機に今までの教育を見直す時期がきたのではないだろうか。

コロナ禍での大学入試をテーマとして開かれた今回のフォーラムでは，大学の入学者選抜試験の在り方，広報活動，高等学校における学習指導が昨年度どのように行われてきたか，熟考された様々な案をうかがうことができた。

2. 基調講演 1「コロナ禍における個別大学の入学者選抜―令和3年度選抜を振り返って―」

立脇洋介氏（九州大学）

九州大学アドミッションセンターの立脇氏の講演では九州大学の個別試験実施に向けた苦闘が伝わってくるようであった。

九州大学では入試における「厳格さ・公正性」「安全性」「受験生（大学）の負担」のバランスを重視し，どうすれば個別試験が行えるかを長期にわたり検討されたようである。オンラインで入試レベルの筆記試験は可能かどうかを考えたときに，不正行為「厳格さ・公正性」から難しいと考えられる。オンライン面接やオンラインでの作成課題ですら，不正をしようと思えばやりやすい環境にあることにも注意が必要である。

また九州大学では小論文を，課題図書を用いた郵送方式にし，オンラインで口頭試問や面接をする形に変更した選抜もあった。立脇氏のスライドにもあったが，代替として適切かどうかは疑問が残るし，見る能力も変わってくるので従来とは違った受験生が合格している可能性が高い。これらの代替した個別試験の妥当性を今後検討されると思うが，ぜひとも情報として共有していただきたい。

九州大学の個別試験に対する考え方は，受験生のことをよく考えてくださっており，大学入試は例年通り問題なくそのまま行うべきだと考えていた私としては，新しい形の入試を考えさせられるお話だった。

3. 基調講演 2「オンラインを活用した東北大学入試広報活動の新たな展開」

久保沙織氏（東北大学）

東北大学高度教養教育・学生支援機構の久保氏の基調講演では，これからの広報活動の様々な可能性を示していただき，中学校・高校側としても生徒が東北大学をより知ることのできるきっかけになると感じた。

今後も続いていく18歳人口の減少に伴い，東北大学でも受験生獲得のためのPRを重視している。オンラインオープンキャンパスやオンライン模擬講義は我々中学・高等学校側からも参加のしやすさという点において，非常に有益なものである。

本校の中学3年生は今年，大学訪問ができないかわりに，東北大学のオンライン講義を受けたりオンラインオープンキャンパスを閲覧したりする時間を設けており，様々な高等教育を知るきっかけに活用させていただくことになっている。時間や場所を越えて体験できる機会を提供してくださり，非常にありがたいことである。しかし，オンラインの利点

はあるものの，欠点としては実物に触れられず，また画面の向こうの世界であると生徒が捉えがちになり，自分事として経験を積めないことである。今まで様々な活動をオンラインで行ってきた学年なので慣れているとは思うが，実物に触れる機会，本物を見る機会が作れなかったことが彼らの進路にどう影響を与えるかを考えながら指導していきたい。

今後は大学には対面でやれることをオンラインでやるだけでなく，オンラインならではの企画を考えていただき，対面以上に魅力を感じる活動が生まれてくることを期待したい。

4. 現状報告１「臨時休校・分散登校の元での「学習の遅れ」の回復」

近藤明夫氏（東京都立戸山高等学校）

近藤氏の報告では，コロナ禍における進学校の様々な工夫と，紙ベースからオンラインでの授業に至るまでの過程を知ることができた。報告の中にあった第４クール以降の対応は再び起こりうる出来事への対応の参考になり，オンデマンド型の補講教材にはコロナなどのない平常時でも活用できる可能性を感じた。

今の世の中には動画教材がありふれてきているが，各学校が必要となる教材を動画配信することで，生徒の学習を促進する働きができるのではないだろうか。例えば言語の教科であれば，文法は不易のものであり，学びの根幹となるものである。文法をオンデマンドで学校が配信すれば，生徒は普段の授業と関連させながら学ぶことができることや，生徒の学び直しとして使用することもできるのではないだろうか。

また，コロナ禍での臨時休校・部活動停止も学習に大きく影響を及ぼしたと考えられる。特に部活動停止があったことは，多くの運動部に所属する生徒を例年より早く受験勉強へと切り替える契機となった。コロナ禍だからこそできる学習方法や進路指導を考え抜いた戸山高校を参考に，今までのやり方を是とするのではなく，日々変化する受験業界で生徒が成功を収められる指導ができる学校を作っていきたいと強く感じた。

5. 現状報告 2「オンラインの現場から―Web授業のメリット・デメリット―」

多田鉄人氏（須磨学園高等学校）

多田氏の報告でまず驚いたことは，須磨学園はICTに力を入れている学校で，全員にパソコンとスマホの配布，全員がoffice365のアカウントを所持しているという点である。本校でオンライン授業をする際にもっとも問題となったのが，授業を受けるデバイスを所持していない家庭があることであり，貸与する手続きなどのためオンライン授業をするまでにかなりの時間を要した。普段からICT教育を充実されており，令和2年度4月もWeb授業を行い，学びが止まらなかったことは非常事態ながらも生徒たちは安心できたのではないだろうか。

緊急事態宣言解除後もハイブリッド登校をして，いつオンラインになってもいいように対応を続けられた。全てをコロナ禍前に戻そうとする世の中と違い，変化に学校全体で向かっていく姿勢をぜひ見習いたい。

しかし，Web授業だけでは定着は良くなく，対面でやり直した部分もあったと報告の中にあった。私も本フォーラムにオンラインで参加したが，長時間オンラインで過ごすというのは恥ずかしながら非常に辛いものがあった。これは決してオンラインだから緊張感がないというわけではなく，画面越しに情報を取り入れることは負荷やストレスがかかることなのだと感じた。コロナ禍になってから多くの講演や出張にオンラインで参加してきたが，言葉には表せないストレスを感じてきている。調査をしたわけではないが，対面で行う授業をオンラインで行っても効果は現れないだろうし，対面を超える授業になるとは想像しがたい。今後，もうオンラインで授業をすることがないことを望むが，オンラインで授業を

するときは，オンラインならではの工夫をし，より効果的な授業の設計をし，学びを定着させられるようにしたい。

6. 現状報告 3「大学入試における教員としての資質・能力の評価」

鈴木雅之氏（横浜国立大学）

鈴木氏の報告では，昨年度の大学入試について考えさせられるものがあった。横浜国立大学は昨年度入試でどこよりも早く二次試験を課さない旨を公表した大学で，その意図が聞けたことは今後の進路指導における判断材料になると考えられる。

横浜国立大学の教育学部ではアドミッション・ポリシーを重要視し，それに沿った形で選抜方法を変更されたようである。危機管理の視点で見ると，受験生の安全が確保され，何よりも世の中がどのような状況になっても二次試験が実施できるであろうことがわかる設定となっており，受験生の安心材料になったと考えられる。

一方，テストの公平性は担保されたのか疑問が残る。動画をあらかじめ撮影し送ることになると，その生徒に対しアドバイスを送るなどの不正行為もやりやすい環境になってしまう。また，深いところまで話を掘り下げたり，話を広げたりできないというのは，受験生の思考力を観るには不十分なものであるようにも思える。今後，どのような学生が入学し，どのように成長をしていくのかを追調査していただき，この試験形態ではどのような学生が取れるのかも共有していただけると幸いである。

7. 討議について

様々なトピックについて話された討議の中で，印象的なものは二次試験についてである。私も大学入試はフェアな闘いであってほしいと願っており，個別学力試験は本当の意味で公平に判断されるものであると考えている。横浜国立大学は，今まで教員採用試験の受験率が低かったことから教員になるという熱意を持った学生を要求しており，小論文や面接といった内容に切り替えられたとのことだが，高校の時の熱意が大学に行って変わらないという保証はない。大学に進学し，様々なことを経験する中で，自身の進路が変わることも予測される。そのため，熱意という形のないものを測ること自体が難しいうえに，入学させたい学生の資質として重要なものにするのは望ましくないのではないかと考えてしまう。もちろん様々な大学入試の実施形態があるからこそ，生徒個々人に合った進路指導ができるという点では感謝しかないので，どちらがいいとは言い難いが，多くの国立大学では最も公平な試験である学力試験を課していただけるとありがたい。

8. おわりに

「コロナ禍の下での大学入試」と題されて始まった本フォーラムでは，中学校・高等学校が大学に向かう視点から大学が受験生をどう迎えるか，どう卒業させるかという視点まで，幅広く考えさせられる内容だった。討議で話になっていたが，我々中学校・高校側も，コロナをきっかけとして教育を変えていく必要があると感じた。オンラインでの教育が大規模に始まった昨年度から，今後研究を重ね，より効果的に活用できる方法を模索していければ，緊急事態だけでなく，平常時にもオンラインで生徒を育てて，経験を積ませることができる可能性があると考えられる。

あらゆることを知り，考える機会を与えてくださったことに感謝申し上げます。私にとって新しい情報が大量にあり，考えがまとまっていないまま本稿を寄稿すること，大変申し訳なく思っております。

フォーラムを開催するにあたり，ご尽力された事務局の方々をはじめ，素晴らしいご講演をいただいた講師の先生方に心より御礼申し上げます。

講評６：コロナ禍の入試から学ぶこと

福島県立原町高等学校
小針　伸吾　教諭

1.　はじめに

まず，今回は第34回東北大学高等教育フォーラムにご招待いただき誠にありがとうございました。貴重なお話をお聞かせいただき，大変良い勉強の機会となりました。

今もなお，新型コロナウィルスは猛威を振るっており，予断を許さない状況が続いています。学校においても，先の見えない不安を抱え，行事や部活動等の様々な活動が制限されている中，「生徒にとって最善の選択はなんだろう」と常に考えながら学校全体が一丸となって日々を送っている最中です。

そんな生活の中において，今まで当たり前にあったもののありがたみを感じ，一つ一つの行事などの意義を改めて考えることが増えています。そして今回のフォーラムにおいても「検証 コロナ禍の下での大学入試」というテーマの下，大学・高校それぞれの思いや取り組みについて様々な角度からお話を伺うことで，「非常事態における大学入試のあり方」を考えると同時に「大学入試の本来のあり方」について考える契機となりました。奇しくも昨年度は大学入学共通テストをはじめとする新しい大学入試制度での実施初年度。高校生を指導する立場からすると，様々なことに「振り回された」という思いは正直ありますが，今回の入試を様々な角度から検証することで大学入試の本質を捉え，そこで得たものを還元し，生徒の適切なキャリア形成に貢献していくことこそが大切だと改めて考えた次第です。

また，開会に際し，東北大学総長である大野先生のお話にもあったように，いつか訪れるかもしれないパンデミックに備え，今回のように検証する機会を設けることは非常に意義深いことと言えます。

2.　基調講演１について

基調講演1では，九州大学における令和3年度入学者選抜試験についてのお話を伺いました。コロナ禍で入試をどう行ったか，その経緯を詳しく説明していただき，当然のことながらコロナ禍の大学入試で苦しい思いをしているのは受験生だけではない，ということを改めて痛感しました。我々受験生を送り出す側としては，どうしても早い決定や情報を求めがちですが，先が見えない状況下で様々な可能性を考慮し，入試を実施してくださっている大学の皆様には頭が下がる思いです。講演の中で，「厳格さ・公平性」「安全性」「受験生（大学）への負担」のバランスという観点から令和3年度入試を振り返っていたのが非常に印象的でした。仮に公平性を担保しつつ，安全に行える入試形態があったとしても，実際に行うとなると受験生や大学に負担がかかるだけでなく，受験生が本来の力を発揮できないという大学入試のそもそもの目的に合致しない，という事態も起こり得ることは容易に想像できます。立脇先生のお話にもあった通り，今回の入試における実績や課題を検証する必要はあるでしょう。あくまで個人的な考えになりますが，従来型の受験形態のうち，特に各大学で行っている個別試験については，厳格・公正かつ受験生の持つ能

力をはかるという点で非常に高水準なものであると考えています。今後の入試について検討する際には，これらの入試を技術的・設備的な支援により安全性を担保するという方向性で考えていただきたいというのが個人的な願いです。

3. 基調講演 2 について

基調講演2では，東北大学における入試広報活動についてのお話を伺いました。高校での進路指導を行う際，大学側からの情報は①動機付け②キャリア選択の判断材料③進路実現のための指針として大きく3つの役割を担っていると考えています。①については，特に地方の高校については，生徒に大学で学ぶという具体的なイメージが形成されていない場合が多く，実際に大学を見たり情報を得たりする過程で自分の進路の目標をたてていくということがしばしばあります。また②については，目標を立てた後に自分の目標に一番合致しているのはどの大学か，③については自分がその大学で学ぶためにはどういう力を身につけるべきかという疑問を解消するために大学から発信される情報を活用します。今回の講演でお話を伺い，東北大学の入試広報活動が目的を適切に設定したうえで効果的に行う工夫が凝らされているものであると知り，評価されていることも納得できると感じた次第です。

コロナ禍において，一番影響があるのは上記の中で①の動機付けに関わる部分であると考えています。地方の高校生にとって，大学を直接訪問することは情報を得ること以上に意義のあることだと考えています。実際に目で見て，耳で聞いて，雰囲気を感じ取ることで自分の目指すビジョンが明確化され，学習する意欲や進路意識の向上が図られる生徒を高校教育の現場ではよく目にします。そして，その影響は今後受験する高校1・2年生に色濃く表れるのではないかと感じています。この動機づけに関するフォローをどうするか，高校教員としても考えていく必要があります。

4. 現状報告①および②について

ここでは，コロナ禍における高校での実践について東京都立戸山高等学校，須磨学園高等学校から報告をいただきました。福島県は東京都と比べ休校期間も短いものでしたが，それでもその対応に苦慮したことは今でも鮮明に記憶しています。慣れない講義動画を作成したものの，あまり良い出来ではなかったな，などと苦い経験も思い出しながら拝聴しておりました。今回，両校からきちんと今回の対応について検証・分析を含めてお聞かせいただけたことは，私にとって貴重な機会となりました。私の勤務する学校においても，昨年度の休校期間の学習の遅れは先生方の工夫や生徒の努力によって取り戻せたとは感じていますが，どの取り組みがどの程度の効果があったのかはきちんと検証する必要があります。その点において，今回のお話を伺えたのは非常に有意義であったと思います。特に，オンライン授業について振り返って，定着はやはり良くないこと，一見意味の無いように見える時間が学校には必要であるといった内容が印象に残っています。生徒は学校に決められた時間に通い，授業は対面で行って当たり前だと思っていましたが，その長く続く教育スタイルが非常に価値あるものであると，今回の報告を聞いて改めて痛感しました。様々な教育活動の見直しが図られている現状において，我々はもう一度その価値について再

考する必要がありそうです。また，戸山高等学校の近藤先生が仰っていた「学校間の連携，情報の共有が大切である」ということも印象に残っています。今回のような非常時以外においてもこの言葉は当てはまるはずです。質の高い教育を行うリソースは案外身近にあるのかもしれない，と気付かされた次第です。

5. 現状報告③について

ここでは，横浜国立大学の令和3年度入試についての報告を伺いました。横浜国立大学はコロナへの対応として入試形態の変更が早い段階で決定され，そのインパクトも大きかったと記憶しています。しかし，その判断は受験生を混乱させないという意図のもと決定されたということで，苦渋の決断だったのではないかと想像します。

その中で，教育学部においてはアドミッションポリシーを考慮し「共通テストのみで判断する」という選抜方法はとれない，と判断したということでした。今回のお話を伺って，アドミッションポリシーと入試自体が大学から受験生へ向けての最大のメッセージになっていることを痛感しました。高校の現場においても，アドミッションポリシーを良く読み込むよう生徒に指導していますが，受験生本人はあくまでも進路実現のための知識，という位置づけになっているような気がしています。そうではなく，先述した大学の広報から発信される情報と同様，動機付けや進路選択等，総合的なキャリアプランニングの中で重要な位置づけに置くべきだと再確認させられました。

6. 討議について

コロナ禍における入試を経験して，改めて思うことは身体的にも精神的にも安心して受験できる体制づくりを最も重要視すべきだということです。そして，それは大学入試にかかわる高校，大学ともに共通する思いでもあります。しかし，その思いを入試形態という形で実行する際，何を優先するかによってさまざまな形になるということを再確認させられました。かといって，全国で統一したやり方で指導し，受験形態を決定すればよいのか，というそれは違うと強く感じています。今回，様々な大学や高校の思いや実情を聞くことでさらにその考えは強くなりました。先述した通り，従来型の入試は，大学のそれぞれの思惑を形にしたものであり，受験生へのメッセージとしての意味合いも強いものです。そして，受験生も受験生を指導する我々教員も，そのメッセージを受けて進路設計をしていきます。安全・安心で，公正なものであるという前提は必要ですが，今まで築き上げてきたものの価値についても同じ土俵に上げて論じる必要はあると思います。大学入試改革の話題がメディア等で論じられる度，その視点が欠けているのではないかと常々感じていました。今回行われた特別な状況下での入試を経験して，逆に普遍的な部分，すなわち大学入試の本質をもう一度捉えなおす必要があるのではないでしょうか。

また，討議の中では「エビデンスに基づく広報」についても話題に上っていました。特に地方の高校については，東北大学の取り組みに学ぶべきことは多いと感じています。今後自身の取り組みに生かしていくことが今回参加したものとしての務めであると考えています。

7.　おわりに

今回の教育フォーラムはコロナ禍で行われた大学入試に大学・高校それぞれの視点からスポットを当て，検証するというものでした。多面的に今回の大学入試を検証することで，改めて大学入試の目的や本質について考えることができたと思っています。

改めて，今回大きな示唆を与えてくださった発表者の先生方と，貴重な機会を与えてくださった主催者はじめ関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

アンケート・参加者統計

令和3年5月17日

第 34 回東北大学高等教育フォーラムアンケート

（回収数 85，回収率 17.5%）[1]

1．御所属

(1)　高校：28 名（33.7%）(2)　大学：48 名（57.8%）　(3)　その他：7 名（8.4%）

2．フォーラムのテーマは如何でしたか。

(1)　よかった：　75 名（89.3%）　(2)　どちらとも言えない：　9 名（10.7%）
(3)　改善すべき：　0 名（0.0%）

3．基調講演者の発表は如何でしたか。

(1)　よかった：　72 名（84.7%）　(2)　どちらとも言えない：　11 名（12.9%）
(3)　改善すべき：　2 名（2.4%）

4．現状報告者の発表は如何でしたか。

(1)　よかった：　71 名（84.5%）　(2)　どちらとも言えない：　12 名（14.3%）
(3)　改善すべき：　1 名（1.2%）

5．ディスカッションは如何でしたか。

(1)　よかった：　59 名（70.2%）　(2)　どちらとも言えない：　24 名（28.6%）
(3)　改善すべき：　1 名（1.2%）

6．時間は如何でしたか。

(1)短すぎた：　0 名（0.0%）　(2)　ちょうど良い：　57 名（67.9%）
(3)長すぎた：　27 名（32.1%）

7．今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば、どのような形式、テーマを望まれますか。

（後述）

8．その他、全般的な御意見、御感想をお寄せください。

（後述）

ご協力ありがとうございました。

[1] 多重回答，無回答は個別の集計から除く．

アンケート自由記述

2. フォーラムのテーマは如何でしたか。[1]

○ 例年もそうですが，大学と高校双方の考え方が聞けるため。（大学，よかった）

○ 本学でも入試に関する運営面から（入試）広報などすべての面で当てはまっていたのでとても参考になりました。（大学，よかった）

○ 方向性が多岐に渡り，聞く側として頭の切り替えが難しい会だった。（その他，どちらとも言えない）

○ 普段なかなか接することのない高校の先生のお話が聞けたことが大変有意義でした。また，他大学の苦労の一端が見えたことも大きかったです。（大学，よかった）

○ 発表段階ではバラバラに見えた内容が討論の中で立ち上がって見えたから。（高校，よかった）

○ 入試広報など実例を紹介いただけたので，非常に参考になった。（大学，よかった）

○ 討議の内容がとても深かったです。（高校）

○ 途中からの参加で，内容を把握しきれていない。（大学，どちらとも言えない）

○ 登壇者が多く長すぎた。（その他，どちらとも言えない）

○ 大学側のご苦労もだいぶみえたので。（高校，よかった）

○ 大学高校双方の事情が垣間見れました。（高校，よかった）

○ 大学や高校それぞれの経験から，今後に必要な対応を考える機会となった。（高校，よかった）

○ 大学にせよ高校にせよ，報道には表れにくい，逐次的な対応の実態を感じることができたため。（大学，よかった）

○ 大学から，高校からみたコロナ，オンラインについて，考察できた。（高校，よかった）

○ 大学および高校の苦労について，生の意見が聞けた。（よかった）

○ 大学・高校の現状がわかった。（高校，よかった）

○ 全国の教育機関で難題としていることを解決していく方向性を見出すことができた。（高校，よかった）

○ 新型コロナ禍における入試を含めた教育を高校がどのようにとらえたか興味があったから。（大学，よかった）

○ 色々な先進的な取り組みを聴くことができた。（大学，よかった）

○ 初めての経験の中で，各部門（大学，高校等）でどう対応したかが知れ，とても良かったです。（高校，よかった）

○ 受験において，あるいは，教育の場において，何が大切か，ということについて，今回のコロナが様々な示唆を与えているという事実に関し，多くの方の考えを知ることができ，思いを共有できたこと。（高校，よかった）

○ 時機を得た内容の開催であったと思います。大学・高校の事例ともに，大変参考になり，今年度のこれからの活動・選抜においてもフィードバックしていきたいと思いました。（大学，よかった）

---

[1] 末尾の括弧内は所属，選択された御意見.

○　時期を得ている。（その他，よかった）
○　参加したいと強く思うテーマだった。（大学，よかった）
○　昨年は暗中模索であったが，少しづつ方向性が見えてきたと思います。（大学，よかった）
○　昨年の状況について，高校大学それぞれの立場でご報告いただき，大変参考になりました。（その他，よかった）
○　今後当分続くであろう状態に対応する術を身につけつため早い時期に昨年の総括をしていただけたから。（高校，よかった）
○　今回拝聴いたしまして，つくづくわが国の試験文化のキーワードは「大学側が実施する試験」の「公平性」だと考えます。今回のフォーラムでも基調として流れていたと思います。しかし，アメリカの AP 試験やバカロレアやアビトゥーアの様に，高校教員主体の評価を導入する方法が検討されないでしょうか。そこでは公平性の観点は弱くなりますが，測定・評価される能力の多様性の向上に貢献すると考えます。大学側も入試は高校に委ねて受け入れた学生の指導に集中できます（受験費用の収集が出来ないなどの問題はありますが）。しかしながら，その実現のためには大学側では，留年も辞さない入学後の評価の厳しさの徹底等の改革とセットにすることが必要であると考えます。高校側の評価が不適当で入学すれば，入学後苦労するのは合格した受験生ということになります。高校側の評価がわが子可愛いさや，付け焼き刃的な評価であれば入学後の教え子が一番苦労します。これは高校側の望むところではないと考えます。とは申せ，現在の高校・大学・社会（就職）の三位一体的結合の中で，大学側では，せっかく合格した大学での留年を多用すれば，社会（就職）との関係が悪くなり，世間の目も厳しくなる危険性が大変高いと考えます。
○　このように，「高校」と「大学」と「出口として社会」との三者の結合も考慮しなければ，大学入試を考えるのは難しいと思います。今後は，高大社接続を意識した大学入試のあり方の検討に日本社会はどのように対応すべきか，高大社接続の観点から大学の出口として「社会」を代表する皆様の見解もうかがいたいと思いました。（大学，よかった）
○　今回は校務を間に挟んでの参加となってしまい，細切れにしかお話しが聞けませんでした。申し訳ありませんでした。（高校，どちらとも言えない）
○　今，取り上げるテーマとして，非常に適切だと思ったから。（大学，よかった）
○　高等教育に携わる者であれば，必然的に気に掛けざるを得ないテーマであるため。（大学，よかった）
○　高大のそれぞれの現場でのコロナ禍入試実施に関する考え方を知る機会となった。（大学，よかった）
○　高校側と大学側の様子，考え方がよくわかった。（大学，よかった）
○　高校の現場から生の意見を聞くことが出来たから。（大学，よかった）
○　高校の教育現場を知れたこと。そして，九州大学が苦労してオンライン入試を行っていたことが知れたこと。（大学，よかった）
○　高校，大学それぞれが，どのように昨年度入試を乗り越えたのか，具体的な状況を知ることができて，今後に活かすことができると考えたため。（高校，よかった）
○　現状にマッチしたテーマだった。（大学，よかった）
○　現在もコロナ渦が継続しており，他大学等の状況も知りたかったため。（大学，よかった）

○　現在，受験生が置かれている状況を踏まえている。（高校，よかった）
○　具体的な例がない，現況において情報共有の機会が必要であったため。（大学，よかった）
○　まだ先が読めない状況下において，興味深いテーマである。（大学，よかった）
○　まだまだ見えない未来での教育の在り方について考えることができました。（高校，よかった）
○　まだまだコロナ禍が終息しない中で，今年度の入試実施に当たって参考となります。（大学，よかった）
○　どこも試行錯誤で昨年を乗り切り，今年実施する自信やメドがたったように感じた。（大学，よかった）
○　タイムリーな話題でよかったと考える。（大学，よかった）
○　タイムリーな設定とおもいます。（大学，よかった）
○　タイムリーで参考になる内容が多く，大変勉強になりました。参加して良かったです。（その他，よかった）
○　それぞれの立場からのコロナ禍での奮闘がよく分かる話であり，その結果として今回の大学入試を巡る全体像に迫る構成になっていた。（大学，よかった）
○　コロナ禍下での高校の授業対応，大学の入試対応についていろいろなタイプの事例が視聴できたのが有意義であった。（大学，よかった）
○　コロナ禍の下で，大学や高校がどのように対応し，入試や入試広報についてどのように対策を練ろうとしてきたのか，その考え方も含めて知ることができたのが良かった。この中で得られた知見・方法論は今後につながるものがあることも再確認できた。（大学，よかった）
○　コロナ禍の影響で，学び方，学ばせ方が大きく変容した時期でもありましたので，現場（高校と大学）がどのような迷い，苦労，工夫を重ねてきたかを共有する機会となったため（その他，よかった）
○　コロナ禍のテーマであるが，コロナ後にも通ずる内容と思われるので。（高校，よかった）
○　コロナ禍における動きと今後にむけた指針を探ることができたため（高校，よかった）
○　コロナ禍に，設置形態が異なる 2 つの高校と大学への「接続」を考えるヒントをたくさんいただけたこと。（その他，よかった）
○　コロナ禍という統一テーマではあるが，玉石混交感が拭えなかった。（大学，どちらとも言えない）
○　コロナ禍で義務教育段階から学習の在り方が変わってきている状況で，どんな生徒（学生）を育てていかなければならないか，どういった人材が今後必要となってくるのかを考えさせられるきっかけとなった。アフターコロナになるとまた違った指導が求められると考えられるが，オンラインやデバイスを使用した指導の可能性を広げていかなければ，今後取り残される学校・地域が生まれてしまうと思った。（高校，よかった）
○　コロナ禍での他大学及び高校での具体的対応について情報を得ることが出来たこと。（大学，よかった）
○　コロナ禍が継続する中での対応を模索するうえで参考になりました。（大学，よかった）
○　コロナに負けないように教育を止めないということはどのような工夫が必要であるかわかってよかった。ただ，今後が読めない状況で，テーマが最適であるかどうかわからな

い部分がある。（高校，どちらとも言えない）

○　コロナに対する地域間格差を感じた。秋田県では，コロナはさほど流行っておらず，東京都の昨年 5 月頃の危機感のまま。あわよくば，リモート授業を避けてうまくかわしたいと思っている。それではいけない，乗り遅れてしまっていると思った。（高校，よかった）

○　コロナにおける大学，高校の考え方，実践がわかりました。（高校，よかった）

○　コロナという特殊な状況下での大学側の考え方，高校の具体的な対応状況がよく分かりました。（大学，よかった）

○　コロナという特殊な状況下での大学側の考え方，高校の具体的な対応状況がよく分かりました。（大学，よかった）

○　この状況において，最も気になっているテーマだから。（高校，よかった）

○　いいタイミングだった。（高校，よかった）

3.　基調講演者の発表は如何でしたか。

○　九州大学の入試対応，東北大学の入試広報についての現場感覚の話を聴くことができてうれしかった。（大学，よかった）

○　Web で視聴しており，途中，業務の関係で一時的に視聴できない時間があったため。（大学，どちらとも言えない）

○　いずれも旧帝大のケースなのと，受験者の数が膨大（地域的な広がりも）なのとで，参考にしづらい部分もあったものの，やはり各大学が変化する状況下で試行錯誤された様子がうかがえ，また実際の対応例も知ることができたため。（大学，よかった）

○　オンラインを活用した入試広報活動をどのように展開されたのかが参考になった。（大学，よかった）

○　お二方とも素晴らしい講演でした。ありがとうございました。（よかった）

○　コロナ禍での入試，入試広報の工夫，課題を分かりやすく説明していただいた。（大学，よかった）

○　コロナ禍でも大学によって考え方が大きく異なることがわかったため。（大学，よかった）

○　コロナ禍における個別入試や広報活動の対応を知ることができました。（高校，よかった）

○　意欲的な取り組みに感心させられた。（大学，よかった）

○　基調講演に関しては，資料を見るとわかる情報が多数であり目新しい情報がなかった。（高校，どちらとも言えない）

○　九州大の綿密な準備の様子がよくわかりました。また，東北大学の外部発信に真摯に取り組む姿姿勢に感銘を受けました。（高校，よかった）

○　九州大学での検討内容，実施内容をその理念も含めて知ることができ，また実施後の学内の振り返りも教えていただけたのは大変有益であった。また，東北大学の入試広報の取り組みは，そのレベルの高さに感服した。普段入試広報を主たる業務としているので，大変参考になった。（大学，よかった）

○　九州大学のコロナ禍への対応と姿勢がよくわかった。（その他，よかった）

○　九州大学立脇先生のご発表など特に参考となった。（大学，よかった）

○　具体的事例に基づき，大変わかりやすかった。（大学，よかった）

○　具体例や高校現場の率直な意見が聞けて良かった。（大学，よかった）
○　決定にいたる過程が明らかにされていること。多くのデータが披露されていること。（高校，よかった）
○　高校，大学のコロナ禍での現場の率直な意見が拝聴できたため。（大学，よかった）
○　高校現場では，大学の具体的な動きや考え方を直接聞く機会はすくないため，議論の末の今年度の入試だったと改めて実感しました。それぞれの意見に正当性があり，聞いていて楽しかったです。（高校，よかった）
○　今回は校務を間に挟んでの参加となってしまい，細切れにしかお話しが聞けませんでした。申し訳ありませんでした。（高校，どちらとも言えない）
○　実感が伴っていた。（大学，よかった）
○　上記記述に近いのですが，国立大内部の動きが知ることが出来て，参考になりました。良かったです。（高校，よかった）
○　新型コロナ対応について，上手くまとめられていた（目新しいことを求めてた訳でなく，「本学の対応に抜け漏れが無かったか」の観点で拝聴したので，その意味ではよかった。）（大学，よかった）
○　他大学様の状況，考えがよくわかりました。（大学，よかった）
○　大学がどのように考え，発信しているかを理解できたから。（大学，よかった）
○　大学が高校生のためにできる最大限の努力を知ることができ，敬意を表します。（高校，よかった）
○　大学の工夫がわかったから。（高校，よかった）
○　大学の取組でどのような工夫をしているかわかったのでよかった。（高校，よかった）
○　大学も受験生のことを考えて広報や入試を考え，対応しようとしている苦心の様子がよく分かった。（高校，よかった）
○　大学側が，コロナ禍で入試を進めるためにどのような取り組みをされてきたのかがよく分かった。受験生を大切に考えて頂いていることが，高校側からすればありがたく思った。（高校，よかった）
○　大学側の葛藤，苦労を，工夫を理解できた。（高校，よかった）
○　大学側の考えが知れたこと。（高校，よかった）
○　大学入試を実施する上で，今後の継続性を想定しながら，バランスのとれる形態を工夫されていたところ。（高校，よかった）
○　通信やスライドの扱いなど手順の問題。（その他，どちらとも言えない）
○　途中からの参加で，内容を把握しきれていない。（大学，どちらとも言えない）
○　討議時間でより詳細にうかがえたのでさらによかったのですが，工夫や準備をしながら，学力判断という要素をできるだけ維持しつつ取り組まれた九州大学の話と，受験生のニーズに寄り添いながら広報活動を進められた東北大の工夫内容が伺えたため。（その他，よかった）
○　特に，久保先生のエビデンスにもとづく広報活動は，高校現場でも役に立つように思います。（高校，よかった）
○　特に東北大の昨年の状態がわかった。（高校，よかった）
○　内容が細かく，わかりにくかった。（高校，どちらとも言えない）

○　二つのご報告ともに，昨年度，混乱の中で決めた自学の振り返りとの比較と言う点も含めて，大変参考になりました。（大学，よかった）
○　入試を構築するまでの経緯，行動が制限される中での広報活動とそれに伴う志望動向の変化について確認できたこと。（高校，よかった）
○　入試広報のあり方を検討する上で参考となった。（大学，よかった）
○　不確実な状況下，根本的なことを押さえて手探りで進めていく様子がよくわかった。（大学，よかった）
○　報告内容が具体的で，分かりやすかった。（大学，よかった）
○　本学の今後の方針決定に資するものであったため。（大学，よかった）
○　立脇先生（九大），久保先生（東北大）ともに全て参考になりました。現状と課題についてとても分かりやすくご説明いただきました。（大学，よかった）
○　立脇先生の「バランスを考慮しての入試制度の検討」という部分に大変共感を覚えました。今後の本学の入試の検討の際，常に頭の片隅に入れておきたいと思います。（大学，よかった）
○　立脇先生のご発表では，コロナ禍で入試にどのような困難が生じ，どのようなことを行ったのか，非常に具体的なご説明で大変勉強になりました。多数の大学で貴重な情報を共有できたと思います。久保先生のご発表も，東北大学の積極的な取り組みと参加者の反応が分かりやすく示され，こちらも大変勉強になりました。とても価値のあるご発表だったと思います。（その他，よかった）
○　立脇先生のバランスの考え方が参考になりました。（大学，よかった）
○　立脇先生の話は事例的に参考になる部分があった。久保先生の話はいまいちだった。あと，他大学に先行という話だったけど，先行してましたかね・・・他大学と比べてもそんなに早くなかった記憶があります。（大学，改善すべき）

4. 現状報告者の発表は如何でしたか。

○　様々な取り組みに感心した。参考にしたい。（大学，よかった）
○　複数の高校の事例，また，ともに異なる進路指導の方針をもつ高校側の実際の動きや見方がわかり，大変良かったです。（大学，よかった）
○　発表者によっては，テーマの解釈が異なり，期待していたものと違う場合もあったが，これまでの状況においての「悩み」が共通であったことが確認できた。（高校，よかった）
○　二つの高校の取り組みについて，その違いが浮き彫りになって興味深かった。（大学，よかった）
○　特に戸山高校の近藤先生の報告は良かったです。高校生の質にも因ると思いますが，先生方の工夫，姿勢も大変勉強になりました。又，他の二例の報告も良かったです。（高校，よかった）
○　同じ悩みをもつ高校として勉強になりました。（高校，よかった）
○　途中からの参加で，内容を把握しきれていない。（大学，どちらとも言えない）
○　大学，高校の率直な意見であった。（高校，よかった）
○　他校の取り組みを知ることができた。（高校，よかった）
○　他校の実施状況が知れたこと。（高校，よかった）

○　他校の現状がわかった。ONLINE の問題点がはっきりした。（高校，よかった）
○　他の高校のコロナ禍における対応の様子が分かり参考になったが，発表時間が長くなったとろもあり，やや間延びした観もあったため。（高校，どちらとも言えない）
○　須磨学園高等学校の多田先生の発表が特に参考となった。（大学，よかった）
○　須磨学園の取組に感銘を受けました。現場主義での真摯な取組みが，素晴らしいと感じました。また，多田先生が音声の件で陳謝されておりましたが，充分に内容は伝わりましたし全く問題ないと思います。
○　事務局様でもオンライン開催であり，インフラ閾値はラフにして双方が気兼ねなく発表できるような施しがあれば良いと思います。（よかった）
○　首都圏や関西圏の高校では，実際どのように学校を運営していたのか，非常に興味がありました。東北地区と違い，現場の先生方の献身的な努力が継続していたと改めて感じることができました。それでいての，またの緊急事態宣言にも負けずに働いていらっしゃる姿をみて，自分もがんばらなければと感じました。（高校，よかった）
○　自分が教員養成系大学に勤務しているため，特に教員志向性の重視の部分など，横浜国大の事例は今後の参考材料としても重要でした。（大学，よかった）
○　昨年度は，共通テスト初年度にあたり，高 3 生を中心にどのようにご指導されてきたのか，とてもリアルに感じることができ，学ぶべきことが多くありました。（その他，よかった）
○　昨今の状況で，高校の先生から直接意見を聞く機会がなかなかないので，ありがたかったです。（大学，よかった）
○　今回は校務を間に挟んでの参加となってしまい，細切れにしかお話しが聞けませんでした。申し訳ありませんでした。（高校，どちらとも言えない）
○　高等学校の現場の状況が分かり大変良かったです。（大学，よかった）
○　高等学校が現在どのような状況なのか，知ることができたから。（大学，よかった）
○　高校側における教育手法を学ぶことができた。（高校，よかった）
○　高校側，大学側それぞれから見た入試に対する姿勢が伺われた。（大学，よかった）
○　高校の立場からの話は興味深かった。（その他，よかった）
○　高校の対応は，こちらの想像以上に大変だと思った。（大学，よかった）
○　高校の先生方のご説明も時系列で示されるなど，当時の情景が思い浮かびました。また，「例年以上の合格実績」を出された戸山高校でしたが，「これ以上コロナかが続いたら厳しかった」といった本音も聞かれ，対処療法の続いた 1 年であった当校の苦労を実感しました。（大学，よかった）
○　高校の状況を聞くことができたことは参考になりました。（大学，よかった）
○　高校の状況を共有できる内容だったから。（高校，よかった）
○　高校の取組が比較できたので良かった。（高校，よかった）
○　高校の実態をよく反映していました。（高校，よかった）
○　高校での状況を知ることができてよかった。（その他，よかった）
○　公立高校と私立高校の授業の現状，横浜国大の個別試験の代替内容を知ることができた。（大学，よかった）
○　戸山高校がスタンダードだと思います。私立公立のさをひしひしと感じてしまいました。

（高校，よかった）

○　個別試験を実施しなかった横浜国立大学の取り組みを知ることが出来たため。（大学，よかった）

○　具体的事例に基づき，大変分かりやすかった。（大学，よかった）

○　苦労話だけではなく，視点が，「全て生徒の将来のために」何ができるかを現場で様々な先生の協力を得ながら進められていることがよく分かりました。（その他，よかった）

○　苦労していたことが理解できた。（大学，よかった）

○　近藤先生と多田先生のご発表から，受験をする高校生がどのような状況だったのかがよくわかり，改めてこの年の受験生は本当に大変だったのだなと思いました。そんな中で頑張っていた受験生と，彼らを支えた高校の先生方には大きな敬意を表したい思いです。特に多田先生が言及されていた「教員どうしの雑談」は，私は授業が非常勤の 2 コマしかないながらも，とても共感いたしました。高校の取り組みも参考になりましたが，鈴木先生のご発表の，大学入試における具体的な取り組みもとても勉強になりました。代替ではなく動画ならではの利点を活用しようとした入試は，まさに将来プラスに働いてくると思います。今後の検証がとても興味深いです。（その他，よかった）

○　各部署における先生方の取り組み方，考え方を共有できた点。（高校，よかった）

○　各高校，大学の状況や苦労を知ることができた。（大学，よかった）

○　横浜国立大学の教員養成に関する考え方を拝聴できたこと。タイプの異なる高校のコロナ禍の高校生・受験生のようすをリアルに拝聴できたこと。（その他，よかった）

○　やや漠然とした内容であったように感じます。特に。横浜国立大学の鈴木先生からは，より深いお話（二次募集実施に至るまでの経緯や思いなど）を聞きたいところでした。（高校，どちらとも言えない）

○　やはり高校へは少しでも早く情報を提供すべきと改めて思いました。（大学，よかった）

○　それぞれ特色のある高校での状況や教員養成学部のくふうを知ることができた。（大学，よかった）

○　それぞれの立場で，当時の様子や工夫を知ることができたため。（高校，よかった）

○　コロナ禍の影響により，高校の現場の生の声を聞きに行く機会が減少しており，このような機会が貴重な情報収集元であるため。（大学，よかった）

○　コロナ渦での影響は地域によっても差があり，高校側の視点について十分だったか考える機会となった。（大学，よかった）

○　オンライン授業への取り組みや，授業時数回復のためにどのように取り組んだか，具体例を知ることができてとても参考になった。（高校，よかった）

○　オンライン授業の展開について。（高校，よかった）

○　オンラインのマイクがわるくいてききとれなかった。（高校，どちらとも言えない）

○　Web で視聴しており，途中，業務の関係で一時的に視聴できない時間があったため。（大学，どちらとも言えない）

○　1 番楽しみにしていたが，2 人目の方の音声がききとれなかった。オンラインのむずかしさを感じた。（高校，改善すべき）

○　都立戸山高校と私立須磨学園高校の組み合わせが絶妙だった。横浜国大教育学部の選抜資料に写真・動画提出は画期的だったがその作品から生徒の実力を見抜くのは至難の業

である。そんな意味ですごいと思う。（大学，よかった）

5. ディスカッションは如何でしたか。

○ 一つの切り口からいろいろの観点・テーマの話が聴けたのは良かったが，反面，散漫の感は残った。（大学，よかった）
○ 「リアルな教育現場」のキーパーソンのご意見を具体的に伺うことができました。（その他，よかった）
○ 4。と同様に高校側の視点について十分だったか考える機会となった。（大学，よかった）
○ Web で視聴しており，途中，業務の関係で一時的に視聴できない時間があったため。（大学，どちらとも言えない）
○ オンラインのメリット，デメリット→大学入試における個別試験の重要性。（高校，よかった）
○ コロナという外部圧によって変わっていくことをポジティブに捉える，そこから新しいものがイノベートされていくのだ，と確信する次第です。（高校，よかった）
○ それぞれの立場での対応をする上での視点を知ることができた。（高校，よかった）
○ ちょっと緊張感が出た瞬間が面白かった。（その他，よかった）
○ つっこんだ話で，素晴らしかった。（高校，よかった）
○ テーマについてより深めることができた。（高校，よかった）
○ なぜこのテーマなのか，なぜこのメンバーなのかを答え合わせしていただいたようでメッセージも明快だったから。（高校，よかった）
○ バランスは意識しながらも，現場の率直な意見が聞けたのがよかったです。コロナ禍の影響がなかったとして，大学側がどのような視点で受験生の学ぶ力や将来性を見出そうとしているのかという点ではもっと突っ込んだ議論がなされてもよかったと思いました。（その他，よかった）
○ もう少し個別 2 次試験の意義を話していただきたかった。（高校，よかった）
○ やはり高等学校側と大学側とで，意識に共通する部分，相違する部分があることが感じ取れました。ただ高校側の意識の一端を知ることができた点は，今後の具体的対応や配慮の材料になるかと思いました。（大学，よかった）
○ 何を焦点において活動し，どのような考えをもっていたかについて知ると同時にその考えをそれぞれ共有できたこと。（高校，よかった）
○ 会場での空気感のようなものも把握できればと感じたため。（大学，どちらとも言えない）
○ 各質問に対して，具体的な方策を聞きたかったです。（高校，どちらとも言えない）
○ 各先生方のお考えを引き出し，より深いお話が伺えて，とても興味深かったです。情報を早く発表すると，安全策のために却って大きな変更を伴う，あるいは後で変更を余儀なくされる，かといって，変えないようにしようとするとなかなか情報を発信できない，というジレンマは，受験生，高校，大学のどの当事者にとっても悩ましいと思いました。（その他，よかった）
○ 活発な意見交換がなされていて，興味深かったから。（大学，よかった）
○ 議論されたテーマの中でいくつか興味深いものがあり，今後の考察のきっかけとなったため。（大学，よかった）

○　教育に対する思いについて共有できたことが一番の収穫でした。（高校，よかった）
○　近藤先生はなかなか突っ込んだコメントをされましたね。良かったと思います。（大学，どちらとも言えない）
○　現場の生の声を伺うことができ，大変良かった。（大学，よかった）
○　戸山高校の近藤先生から，横浜国立大学の先生に対して，二次試験を課す意義についてご質問がありましたが，共通テストの結果を見て，受験生がそれまで意識していなかった大学へ，二次試験がないし合格できそうだから出願するという流れは，できれば避けてほしいと思っています。大学側がどんな学生に入学してほしいのか，という意思を，どういうかたちであれ，個別試験で測るべきではないかと保護者の立場としても考えさせられました。（その他，よかった）
○　高校，大学側双方が，入試をどのように位置づけているか，本音に近い形でのディスカッションとなったので，受験指導に大いに参考になると感じた。（高校，よかった）
○　高校側の率直な意見は貴重でした。（大学，よかった）
○　高等学校教員・大学教員の率直な意見が聞けたことがよかったです。（大学，よかった）
○　司会の倉元先生・末永先生のハンドリングが素晴らしく，全てのディスカッション・皆さんの発言内容が聞きたかったことでしたので，参考になりました。（大学，よかった）
○　司会者が本音の発言を引き出していた。（大学，よかった）
○　時間を考えると，新情報としての内容が薄まってしまっていたと思う。表面上の話よりも今後のコロナ禍における高校・大学段階における学習の展望，入試の展望，様々な最新の取り組み，オンラインでのオープンキャンパスにおける可能性など，焦点を絞って話をしていただいたほうが有益だったと思う。（高校，どちらとも言えない）
○　時間的制約があり拝聴できませんでした。（大学，どちらとも言えない）
○　質問と回答が少しずれているように感じたことがあった。（大学，どちらとも言えない）
○　質問内容が適切でした。（大学，よかった）
○　倉元先生が話題を広げようとしてくれていたので，様々な意見を聞くことができて良かった。（高校，よかった）
○　倉元先生の素晴らしい誘導で，大学・高校の本音（悩み）が多数聞けたと思います。頷く箇所が多々ありました。（大学，よかった）
○　倉元先生の着眼点には，いつも教えられます。また，各先生の本音が伺えて，良かったです。共感できます。（高校，よかった）
○　大学，高校双方の考えが知れた。（高校，よかった）
○　大学と高校の温度差をかんじた。（高校，どちらとも言えない）
○　第 2 部の鈴木先生の報告途中で業務が舞い込んでしまい，第 3 部の討議も断片的にしか拝聴できなかった。そのため，内容についてコメントできる立場にないので，「どちらともいえない」とさせていただいた。（大学，どちらとも言えない）
○　途中からの参加で，内容を把握しきれていない。（大学，どちらとも言えない）
○　入試に対する高校，大学それぞれの思いが表れて興味深かった。コロナ禍という特殊事情から，本質的なことに少し食い込めた。（高校，よかった）
○　発表以上の新しい発見に欠けた。（その他，どちらとも言えない）
○　半数が対面・半数がオンラインでしたが，ディスカッションを成立させるには，その場

にいらっしゃる先生方も全員がオンラインとするほうが，良かったのではないかと思いました。（高校，よかった）

○　本音が聞けて良かった。（大学，よかった）

○　本質的な部分を聞けたのが良かったです。（高校，よかった）

○　面白かった。（大学，よかった）

○　様々な立場で様々な意見が聞けて，良かった。（高校，よかった）

7. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば，どのような形式，テーマを望まれますか。

○　「新教育課程，高大接続改革（これはしっかり生きている）の中で，いよいよ大学入試はどのような方向に向かうのか，さらに詰めてほしい。（大学）

○　さて，今回はコロナのため，直接参加できませんでしたが，昨年と今年と参加してみて，大変勉強になっています。今後とも，そのときそのときのテーマを設定していただき，大会を継続していただけたらと思っています。

○　瀧澤先生の最後のコメント心に響きます。（高校）

○　・コロナ禍においての生徒のモチベーションを維持する装置。
・大学入学後に生徒に与えられたオンライン授業の検証。（特に 1,2 年生）（高校）

○　・形式：出張が難しい状況でも参加が出来るため，オンラインでの参加が可能であるのは本当にありがたい。コロナ禍が収まった後も継続してもらいたい。
・テーマ：コロナ禍の影響についてもう一度振り返るとともに，何が変化したか，今後どのように変化していくかを長期的な視点で考察する。（大学）

○　With コロナの時代として，GIGA スクール構想における教育現場での ICT 整備や活用状況について企画していただけると嬉しいです。（その他）

○　オンライン。（大学）

○　オンラインが良いと思います。（大学）

○　オンラインでの課題共有。（大学）

○　オンラインで行っていただけると助かります。（高校）

○　オンラインのハイブリットで，オンデマンドで録画がみられると良い。（高校）

○　オンラインは，遠隔地でも参加できる。今回のようなハイブリットであることを希望。（高校）

○　オンラインを希望。（高校）

○　オンライン形式。教育現場のお手伝いをしたいので，企業参加型になれば良いと思います。

○　オンライン入試の具体例。（大学）

○　オンライン入試等をトピックにしていただけると非常に参考になります。（大学）

○　コロナがある程度収束して多数の来場参加が可能になっても，オンライン参加も残してほしい。（大学）

○　コロナが続く場合は，このようなハイブリッドも止む無しか。（その他）

○　コロナ禍での入学者の検証の報告。（大学）

○　ご準備は大変かと存じますが，会場とオンラインの併用型はありがたいです。（大学）

○　テーマ：コロナ禍における組織改革・働き方改革。（高校）
○　テーマは問いませんが，オンラインであれば遠方でも参加できるので，このやり方を残して欲しいです。（大学）
○　ハイブリッド形式。コロナ禍での学生の学びを止めないための企画。（その他）
○　もしコロナが終息しても，オンラインと対面とのハイブリッド形式を続けてほしい。また，2022 年 4 月から新学習指導要領が実施されますので，テーマは「新学習指導要領下における入試はどのような形が望ましいのか」などはいかがでしょうか。（高校）
○　やはり対面式は良いと改めて感じました。テーマ→オンライン授業で大学選びはどう変わったか。志望に変化があるのか。（高校）
○　リアルで半分位の時間であれば。オンラインで 4 時間半は長く感じた。（その他）
○　基本的にはオンライン開催でよいと考える。（大学）
○　共通テストに変わったことで，総合成績の点でセンター試験の時と比べて，学力相関に変化が見られたのか（二次逆転幅が従来と比べて狭まった，従来よりも優秀な学生がとれた），総合型選抜が拡大していく中で，大学内での成績伸長や，卒業後の状況に質の変化がみられたのかなど，入試制度の変革がどのような効果をもたらしたのかの議論を拝聴したい。（その他）
○　教科情報の受験の在り方。（高校）
○　形式としては今回のようにオンラインとのハイブリッド実施だと参加しやすいので大変助かります。テーマについては，今回のようにタイムリーかつ，どの大学でも悩んでいるんだろう事柄を取り上げていただけると助かります。（具体的に提案できず，すいません。）（大学）
○　形式は今回のように「オンライン参加も可」で良いと思います。テーマについては，新課程入試（令和 7 年度入試）に関するものがあれば幸いです。（大学）
○　現在の形式でいいかと思います（コンパクトにする部分はした上で）。テーマとしては新しい教育活動においての学力観についてを希望します。（高校）
○　現地にてぜひ参加したいのですが，5 月から本格化する本学の入試広報による出張や入研協ウィークと日程が近いことで仙台に行ける可能性が低いため，今後も「オンライン併用」ですととても有難いです。（大学）
○　現地へ行くことが出来なかったので，Web でも開催いただき大変ありがたかったです。テーマについては，新学習指導要領に対応した入試を希望します。（大学）
○　講演，報告は双方向ではないので，あらかじめ動画をアップロード，視聴をして質問を集める形にしてはいかがか。生徒もオンラインで授業を受けることがつらいというのがあるように，目や耳がつらい。討議をライブ配信にするなど，分散して受講できる形にしていただけると助かります。（高校）
○　高大社接続の観点から大学の出口として「社会」を代表する皆様の見解もうかがいたいと思いました。（大学）
○　高等教育と名乗りながら，入試に偏っているように思います。入試ばかりになるのなら冠を変えないと変ですね。（大学）
○　今回のようなオンラインと対面での形式での開催であれば，次回もぜひオンラインで参加をさせていただきたいと思います。コロナ禍入試，アドミッション全体に関する話題

は継続して取り上げていただきたいです。（大学）

○　今回のようなハイブリッドですと，遠隔地の人間にも大変参加しやすいので，今後もこの形での開催をお願いできるとありがたいです。（大学）

○　今回のようなハイブリッドの形を継続せざるを得ないと思います。（大学）

○　今回のような形は，とても良かった。（高校）

○　今回のようにオンラインで配信いただくと参加が容易となりありがたいです。（大学）

○　今回の形で良い。（高校）

○　今回の形式でよいと思いますが，もう少しコンパクトになればと思います。（大学）

○　暫く入試改革が落ちつくまでは入試についての内容がほしい。（高校）

○　受験生減少に伴う入試の変化について－選抜性の高い大学以外はマッチングを重視するようになる言われているようですが，国公立の特別選抜を 3 割にする目標や主体性評価の問題とあわせ，今後どうなっていくのか，どうなるのがよいのか。（高校）

○　新学習指導要領を踏まえた高校教育のあり方と，その成果を図るための大学入試のあり方。（高校）

○　総合型選抜・学校推薦型選抜・一般選抜の入試の内容が変化したことにより，大学の学びもどのように変化しているのか，それとも変化していないのかを知りたい。（高校）

○　大学入試において現場が必要とする具体的な内容で，今回のような対面とオンラインのハイブリッド形式が良いと思います。（大学）

○　大学入試に関わる仕事をしておりますので，やはり大学入試に関する具体的な取り組みのお話をこれからも聴いて参りたいです。オンライン形式でしたので，配付資料もディスプレイで見やすく，かつ移動時間ゼロで参加できたので大変ありがたかったです。（その他）

○　調査書の活用。（大学）

○　同じようなテーマで継続し，変遷をたどっていくと良いと思う。（大学）

○　日本の教育と入試の方向性をご指導下さい。（高校）

○　入学者選抜は，コロナの影響も大きいですが，それ以前から多様な議論があった点であり，多様な人々が関与する領域なので，議論を深めるべき側面が多いように思います。東北大学の出版物シリーズの内容をベースにしたような企画を期待しております。（大学）

○　入試・改革の行くえを追う事の大切さを痛感致します。初年度と二年目を比較し，見えて来た差や問題点などを取り挙げて戴ければ幸いです。（高校）

8. その他，全般的な御意見，御感想をお寄せください。

○　話し手が代わる時に時間のロスがあるようです。（大学）

○　有意義な会でした。（その他）

○　毎回このフォーラムの重要性を強く感じています。今回もご指導に感謝申し上げます。（高校）

○　本日はありがとうございました。（高校）

○　本校では熱烈な横浜国立大学志望者が，「2 次試験を行わない」発表を機に東北大学に志望を変えました。共通テスト後，十分に点数をとれたので，横浜国立大学合格の方が安全と言えましたが，再びその気持ちをもとに戻すことはありませんでした。そんな経緯

からの東北大学合格にはとても興奮しました。結果オーライなのですが，1 人の受験生が大きくその道を変えたのは事実です。大多数の大学が「2 次試験を行わない」とはしなかったなかで，ほぼ単独でその独特な判断をしてしまったことに，後悔はないのでしょうか？（高校）

○ 本フォーラムは，貴重な情報を得ることができる機会として参加させていただいております。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。（大学）

○ 本フォーラムの内容が現場の生の声であり，文科省他国家施策に反映させて頂きたい。この危急の状況下で入試を成し遂げた先生方のご尽力は並々ならぬものであり称えるべき功績です。ありがとうございました。

○ 勉強になりました。（大学）

○ 内容的にはいい話ですが，画像視聴によるフォーラム参加は実際の現場に参加しての聴講より疲労が多くなる気がします。もう少しコンパクトでもいいかもしれません。（高校）

○ 特にありません。（大学）

○ 東北大学が世界№1 の大学になられるような，アドミッションを追求していただきたく，よろしくお願い申し上げます。（大学）

○ 東北大学オープンキャンパス，オンラインと来場のハイブリッドとか。本校は一年生が毎年参加しておりました。今年は毎日ホームページを確認し，具体的な発表がなかったので，行事予定は空欄のまま，バス予算なしで組んであります。来場があるなら行かせたかったです。交通の便と，予算の関係でオンラインで参加いたしますが，もう少し早く発表していただければ，予算も組めたかなと感じました。ちなみに，昨年の WEB オープンキャンパスは，高校の中にブースを作り，自由に見られるように会場を作りました。生徒たちも楽しんでいました。今年度のオープンキャンパスも，楽しみにしています。今後とも宜しくお願い致します。（高校）

○ 調査書の評定平均値については，高校ごとの相違が大きいので，それを得点化することはかなり難しいと感じています。それゆえ，やはり判定に際して比重は低くせざるを得ないのかもしれません。なお公正性に関しては，都立戸山高校のように，全国的な上位校の場合は泰然としていられるように感じましたが，そうではない高校の場合，例えば自校の推薦者が不合格であった場合などに，この点が追及の対象になる可能性もあるので，一定の配慮は必要かと考えています。（大学）

○ 大変参考になるご発表が多かったです。ありがとうございました。（大学）

○ 大変貴重な機会でした。ありがとうございました。最後の副学長先生のご挨拶に感銘を受けました。「高・大の対話」というキーフレーズが肝になると確信しました。（その他）

○ 大変すばらしいフォーラムだったと思います。企画・運営された東北大学の皆様に感謝いたします。（大学）

○ 対面の場合は今回の時間でもよいのですが，オンライン開催では時間がかなり長いと思います。工夫が必要と感じました。（大学）

○ 打合せから 5 時間半の時間でしたが，学校にいながらでしたので少しきつかったです。特に，授業をして，打合せ，そして，フォーラムという状況でしたので，対面での聴講と違い，オンラインでの参加となると，なかなかきつかったです。7 時間のオンライン授業を受けた生徒のような気持ちになりました。蛇足です。（高校）

○　素晴らしい会を開催していただきありがとうございました。（高校）
○　全ての面でとても勉強になりました。また，富山大学船橋先生の司会も素晴らしかったです。有り難うございました。（大学）
○　誠にありがとうございました。今後とも何卒宜しくお願い致します。（大学）
○　須磨学園高校の報告が聞きづらかった。（音声が歯切れが悪い感じでした）（高校）
○　須磨学園の先生の話がほとんど聞きとれず，残念でした。マスクは仕方ないとしても，もう少しゆっくり話していただきたかったです。（高校）
○　従来型の対面でのフォーラムは，特に強い必要性がない限りは必要なのではないか。オンライン開催でも十分に，必要な情報共有や意見交換ができている状況を考えると，従来型の対面でのフォーラムの開催は費用対効果を考えると不要であると考える。（大学）
○　質問を書いて送ろうとしたのですが 16 時 11 分であったため弾かれました。内容を聞いた上で，15 分で質問を送れ，というのは無理だと思います。（高校）
○　今回も有意義な会をありがとうございました。横浜国大の入試の公平性，公正性への疑問は本校でも話題になりました。レポート形式は程度の差はあれ，教員の指導が入らないことは考えられません。特別選抜ならば近藤先生の発言にもありましたが，そういうものだと割り切るのですが，一般選抜では割り切れません。あくまでもコロナ禍での今回限りのことであってほしいです。（高校）
○　今回も大変有意義な時間を過ごさせていただきました。ありがとうございます。地方の県立高校長経験者の立場からすると，戸山高校近藤先生のご意見が感情的には最もしっくりきました。3 年前，まだ現役の高校長のころに，①時流に乗った安易な変更はやめてほしい，②文科省・大学はある程度信頼性のある情報を早く出してほしいと声高に喚いていたことを思い出しました。あれから何も変わっていない。①公平性を崩すような変革はやめてほしい。②情報を早く出してほしい。この高校側からの声は尊重してほしい。その念を強くしたフォーラムでした。（大学）
○　今回はこのような研修会に参加させていただく機会をご提供いただきありがとうございました。オンラインであるために西日本からの参加が可能となりました。対面とオンラインの開催は運営側においては負担も増大するかと思いますが，継続実施される場合には，また参加させていただきたいと思います。（大学）
○　高校・大学双方の取組や意見を知ることができ，大変勉強になりました。もう少し討論の先を聞きたかったと感じました。コロナ禍はまだまだ終わりが見えません。引き続き同様のテーマでフォーラムを開催いただけると嬉しいです。（大学）
○　貴重な機会をいただき，ありがとうございました。（大学）
○　企画，運営に携われた方々のご尽力に感謝申し上げます。（大学）
○　環境の大変ななか，継続的に公開での情報共有と議論の場を設けてくださるのはとてもありがたいと思っています。今後ともよろしくお願いいたします。（その他）
○　横浜国立大学が今年度の入試を共通テストのみで実施したが，あの当時の状況の中，受験生を安心させるために早い段階で他大学に先駆けてこのような判断をしたことは，称賛に価すると思います。共通テストに出題されない科目の履修について危ぶむ声もありましたが，「高校の学びは大学入試のためではない」という高校教育の原点について，高校教員，生徒一人ひとりが，今一度考える機会ともなったのではないでしょうか。（高校）

○　フォーラム全体の締めとして，閉会の辞が大変良かった。ぼんやり見ていたポスターがとても良いものに見えてきた。（大学）
○　どの先生方のお話も大変参考となりましたが，特に近藤先生のお話は良かったです。単刀直入にお話しされるところに大変好感が持て，ファンになりました。次回も高等学校の先生が登壇される機会がありましたら，ぜひお話を聞きたいと思いました。東北大学の先生方，貴重な機会をありがとうございました。（大学）
○　どうしても，オンラインだと回線の関係で，途切れ途切れになる時がありました。（大学）
○　タイトルから考えると，入試広報の話は浮いていた。この 40 分分を短縮すれば，良かったのではと思います。東北大は久保先生を売り出したいのかな。また，時間の長さの割りに中身が薄くなっていたのが気になりました。（大学）
○　コロナ禍の高校生の様子をうかがえた。学生募集について参考になる意見が聞け参考になった。（大学）
○　コロナ禍での入試の実情を知る貴重な機会をいただき，ありがとうございました。（大学）
○　コロナ禍での対応の話題に限られたせいか，いつもより中身が薄く感じられました。一方で，その分メッセージが明快でした。高大接続や入試設計，広報の観点で大学の先頭を走る東北大学の気概と自負を感じるフォーラムでしたし，高校としては，大学に思いを直接伝える貴重な場だったと思います。なお，因みにタブレットの充電ギリギリの長さでした。（高校）
○　お忙しい中，このような機会を頂きありがとうございました。大変参考になりました。（高校）
○　お疲れ様でした。ありがとうございました。（高校）
○　オンライン形式で開催して頂き，参加しやすかったです。大変ありがとうございました。（高校）
○　オンラインの際の機材のチェックを事前にお願いしたい。今日のマイクの不調はすぐに改善できるのでは？（高校）
○　ありがとうございました。（高校）
○　ありがとうございました。（その他）

参加者統計

1　参加者総数: 529 名

（講演者・招待参加者: 16 名，大学: 296 名，高校: 114 名，スタッフ等: 27 名，その他: 76 名）

1.1　来場参加者総数: 57 名

（講演者・招待参加者: 6 名，大学: 9 名，高校: 13 名，スタッフ等: 25 名，その他: 4 名）

1.2　オンライン参加者総数: 472 名（参加申込者数）

（講演者・招待参加者: 10 名，大学: 287 名，高校: 101 名，スタッフ等: 2 名，その他: 72 名）

2　参加者地域別

宮城県内: 117 名

宮城県以外の東北地方: 63 名

（青森県: 11 名，岩手県: 12 名，秋田県: 13 名，山形県: 17 名，福島県: 10 名）

東北地方以外 349 名

（北海道: 27 名，茨城県: 23 名，栃木県: 7 名，群馬県: 5 名，埼玉県: 10 名，千葉県 12 名，東京都: 80 名，神奈川県: 27 名，新潟県: 8 名，富山県: 3 名，石川県: 7 名，福井県 1 名，山梨県 7 名，長野県: 5 名，静岡県: 12 名，愛知県: 11 名，三重県: 3 名，滋賀県 3 名，京都府: 10 名，大阪府: 10 名，兵庫県: 6 名，奈良県 1 名，鳥取県 2 名，岡山県: 6 名，広島県: 8 名，山口県: 1 名，徳島県: 4 名，香川県: 5 名，愛媛県: 4 名，高知県: 4 名，福岡県: 18 名，佐賀県: 1 名，長崎県 4 名，熊本県: 3 名，鹿児島県: 2 名，沖縄県: 9 名）

2.1　来場参加者地域別

宮城県内: 45 名

宮城県以外の東北地方: 4 名

（青森県: 0 名，岩手県: 0 名，秋田県: 0 名，山形県: 0 名，福島県: 4 名）

東北地方以外 8 名

（埼玉県 1 名，東京都 3 名，神奈川県 1 名，富山県 1 名，愛知県 1 名，大阪府 1 名）

2.2　オンライン参加者地域別

宮城県内: 72 名

宮城県以外の東北地方: 59 名

（青森県: 11 名，岩手県: 12 名，秋田県: 13 名，山形県: 17 名，福島県: 6 名）

東北地方以外: 341 名

（北海道: 27 名，茨城県: 23 名，栃木県: 7 名，群馬県: 5 名，埼玉県: 9 名，千葉県 12 名，東京都: 77 名，神奈川県: 26 名，新潟県: 8 名，富山県: 2 名，石川県: 7 名，福井県 1 名，山梨県 7 名，長野県: 5 名，静岡県: 12 名，愛知県: 10 名，三重県: 3 名，滋賀県 3 名，京都府: 10 名，大阪府: 9 名，兵庫県: 6 名，奈良県 1 名，鳥取県 2 名，岡山県: 6 名，広島県: 8 名，山口県: 1 名，徳島県: 4 名，香川県: 5 名，愛媛県: 4 名，高知県: 4 名，福岡県: 18 名，佐賀県: 1 名，長崎県 4 名，熊本県: 3 名，鹿児島県: 2 名，沖縄県: 9 名）

多くの方々に御参加いただき，ありがとうございました。

第 34 回東北大学高等教育フォーラム運営スタッフ

統括責任者	倉元直樹	
企画責任者	倉元直樹	宮本友弘
事務局	樫田豪利	秦野進一

当日スタッフ

船橋伸一（富山大学）		
末永仁	阿部和久	田中秀樹
鎌田裕子	朱嘉琪	熊井弘子
竹浪綾子	林如玉	高城淳之
周睿嫻	郭伊晗	林瀅
朱力行		

共催：国立大学アドミッションセンター連絡会議
本企画の一部は，JSPS 科研費 JP21H04409 の助成を受けた

IEHE TOHOKU Report 85
第 34 回東北大学高等教育フォーラム報告書

新時代の大学教育を考える［18］
検証　コロナ禍の下での大学入試

発　行：2021 年 9 月
編　集：倉元　直樹
発行者：東北大学高度教養教育・学生支援機構
Institute for Excellence in Higher Education,　Tohoku University
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41
Tel: 022-795-7551
Email: ieheoffice@ihe. tohoku. ac. jp

印刷所：　有限会社　明倫社